

ば、血液の運行を止むる故、疾速に屏息するなり。

蜘蛛のいに馬をつなぐ如し。

腐り索に馬つなぐと同義なり、就きて見るべし。『古歌』
蜘蛛のいにあれたる馬をつなぐとも二途ある人はた
のまじ。

蜘蛛の子を散らしたやう。

ちり／＼ばら／＼になる形容。

蜘蛛の子を吹き散らす。

『十訓抄』南向に梅木の太なるがあるを、梅とらんとて
人の供のものども、あまた礫にて打ちけるを、主のあや
つとらへよと御簾の内よりいひ出し給ひければ、くも
の子を吹きちらすやうに逃げにけり。

雲を捉むやう。

漠然として要領を得ざる間を爲す形容。雲の捕捉しが
たきがごとく、問の對へやうなき喩。例へば余の尋ぬる
人は何處に在りやと問ふが如し。

雲を突くやう。

身長の高き形容。

発馬。

鳥水練といふと同義なり。登乗馬の術を學ぶ者は、先発
に乗りて、其法を習熟し、而る後實の馬に乗るなり。然
れども若し発ばかりに御することを知りて、馬に乗る
能はざれば、其用を爲さず、故にいふ。『戦國策』勝曰以

奇爲御者。不盡馬情。

關から牛を牽き出す。

頗る遅緩なる喩。

關から關へ這入るやう。

益々辨じがたく一層迷ふとの義。

關様は粹様。

『未廣十二段』はてさて愚痴な、古も關様は粹様といひ

し譬を知らずやと、抱付は締返し。

關の耻を明へ出す。

一家一族の中に、紛紜の事起りし際などに、少しく忍

べば他人に知られずして、冥々の中に治まるべき事を、

忍ぶ能はずして、他人に知らるゝに至り、よしなき耻

をさらす事あるにいふ。

關の頬冠り。

暗中更に頬冠をなして面を隠す必要なし。せずともよ
き注意をなすにいふ。

苦樂は生涯の道づれ。

苦あれば樂あり、樂あれば苦ありて、苦樂共に人間の
生涯に纏はる者なりとの義。

水母は蝦を目とす。

己一人の力にては爲すこと能はず、他人に依憑して行
動するにいふ。『文選』木華賦。水母目蝦。『爾雅』水母
不能動。蝦附之則所在如意。

水母も骨に逢ふ。

天性受け得まじき僥倖にめふにいふ。あるまじき事の
稀に有る喩。水母は元來骨の無き者なり故にいふ。『夫
木集』仲正の歌に「我戀は海の月をぞ待ちわたるくら
げの骨にあふ世有りや」と増賀上人の歌に「みつわさ
す八十あまりの老の波くらげの骨にあひにけるやな」
庫の中の財は朽つることあり身の中の財は
朽つることなし。

庫中に財貨を藏すとも、水火盜賊の難に逢へば、忽ち消
失するの患あれども、身に學び得たる智能才幹は其身

一生決して失ふことなく、人にも掠奪せらるゝ事なし
との義。

倉の粒穂集め粉。

女子が幾人の男子に通じて、孕みたる子の種とも
知れざるにいふ。

鞍馬に福人なし八幡に武勇なし多賀に長壽

なし。

『鹽尻』「いつの世の俗説にや知りがたし是は實福壽天

皆天に在り祈り求むること能はずとの義」くらまは多

聞天、八幡は八まん、多賀は多賀神社なり。

くらやみから牛を牽き出す。

くらがりの條に出づ。

くらやみからくらやみへ這入るやう。

くらがりの條に出づ。

くらやみの恥を明へ出す。

くらがりの恥の條に出づ。

くらやみの頬冠り。

くらがりの頬冠りに出づ。

くらやみへ鐵砲を發すやう。

向ふ見ずにやることをいふ。

栗の花盛りには雨天續く。

栗の花盛りは梅雨の季節に中る故なり。

栗の夢を見れば産がある。

俗説。

栗蟲のやう。

能く肥満したる喩。栗虫はむくくとして肥りたるものなり。

苦しい時には繼母の從兄弟をも尋ね。

かなしい時には繼母の從兄弟をも尋ね(カの部分)に出づ。

苦しい時の神だのみ。

困つた時の神だのみ(コの部分)の條を見よ。

車に乗る人乗せる人其又草靴をつくる人。

貧富貴賤さまざまの階級あるをいふ。

車は三寸のくさびを以て千里の藪を駈る。

大なる事も小なる力より出来る事。

廓の金につまるとは習ひ

遊廓に留連して放蕩を爲すもの、遂に金なくして困窮に至るが世の常なりとのこと。

紅は蘭生にかくれなし。

人に優れたるものは、必ず顯るゝ喩。「波氏烏帽子折」

「宗清手を拍ち蘭生に植ゑても紅のさすがる御ふるまひ」

くれば桶屋の棚に在り。

人より物を臭れと請はれし時に、之を與へずして冷嘲する詞なり、樽と臭れとを通はせたるなり。

黒犬に噛まれて汁灰の和滓に怯る。

前に驚ることあれば、後には何でも無い事に恐るゝをいふ。灰汁の和滓は黒き色の物なれば、之を道路に捨て置けば、宛も黒犬の臥したるかと怪しまらるゝ理なり、故に一び黒犬に噛まるゝことあれば、灰汁の和滓の黒きを見て、亦心動きて之を怯るゝとなり。あつゝのに

苦勞性の人は頭垢が多い。

苦勞性(アの部分)に同じ。

苦勞性の人は頭垢が細い。

俗説。

苦勞性の人は頭垢が細い。

俗説。

黒山のやう。

人の群衆せる形容。

會稽の耻を雪ぐ。

前の失敗耻辱を刷ぐこと。「史記」貨殖傳「勾踐十年國富

遂報吳兵。刷會稽之恥。」越王勾踐吳王夫差の爲に會

稽に破られしが、後に范蠡の謀によりて吳を亡ぼし前

の耻を雪ぎし故事より出づ。

光陰矢の如し。

光陰とは月日の義にて、晝を光とし、夜を陰とす。月日

の過ぎ易く、一度過ぎ去りて、後、返り来らざること、射

放たれし矢の如しとなり。禪門諸祖傳「光陰如箭。」

大燈師遺誡「光陰如矢」黃山谷詩「日月過箭疾。」白

樂天詩「年光同箭疾。」

蝸牛の角争ひ。

愚にもつかぬ極めて些細なる事を争ふをいふ。世の中

の果敢なき所業に喩ふ。「莊子」有國子蟻之左角者。

曰「蠻氏。有國子蟻之右角者。曰「觸氏。時相與争。地

而戰。伏尸數萬。逐北旬有五日而後反。」此寓言に基

く「白氏文集」對酒詩「蝸牛角上争何事。石火光中寄

此身。隨富隨貧且歡樂。不開口笑是癡人。

過言一たび出づれば馴も舌に及ばず。

一たび言を過まれば、取り返しが付かぬとの義なり、馴

も及ばずとは、四頭立の馬車で追ふとも追ひ付かれぬ

といふことなり。馴も舌に及ばず(シの部分)の條参照。

火事後の釘拾ひ。

多大の損耗を爲し、巨費を盡したる後に至りて、小事を

節約にする喩。

火事の前には家に鼠が居なくなる。

俗説。

火事に馬を焼けば其家に七代たゝる。

馬を焼殺せしめざるやうに戒めたるなり。

火事の始を夢みれば吉。

俗説。

火事は江戸の花。

徳川時代に江戸火災多く、大名火消、町火消など消防夫

の装束美々しいりし故此語起れりといふ。

火事場盗賊

世の紛擾に乗じて、自己の利得を計る者なれば、火事の
際騒動に乗じて、盗を爲すに喻へていふ。
火事場に煙草火なし大水に飲み水なし。

物の濁山ありとも之を用ふる能はざる喻。
瓜田に履を納れず李下に冠を正さず。

萬事に就いて人の疑のたぬやうにせよとの義。「文
選」君子行「君子防未然不慮嫌疑。瓜田不納履。
李下不正冠。」「痛うない腹さくられなと同義。

禍福はあざなへる繩の如し。
吉凶はあざなへる繩の如し(キの部)の條に出づ。

禍福は門なし唯人の招くところ。

禍福は其の入り来る門の定れるにあらず、唯人の所行
の善惡に隨ひて、皆自ら之を招く者なりとの義。「左傳」
襄公二十三年傳「禍福無門唯人所召」「淮南子」人間
訓「夫禍之來也。人自生之。福之來也人自成之。禍與
福同門。」

果報は寝て待て。

因果應報は天の心にありとの意。
晝餅饑に充たず。

用を爲さずとの義なり。

晝に書きたる餅は、如何に旨く出来たりとも、固より食
ふべきものなれば、毫も腹の飢を愈するに足らず。人
の道も亦斯の如く、假ひ讀書萬卷の多きに達すとも、能
く之を我物とするに非ざれば、何の用にも立たずとの
類に喻へていふ。「釋林類聚」悟道門「香嚴閑禪師在馮
山。時。馮山知其法器。欲激發智光。謂云。吾不問汝
平生學解。及經卷册子上記得者。汝未出胞胎。未辨
東西。時。本分事試道。一句。來。吾要記汝。師愕然無
對。沉吟久之。進數語。陳其所解。山皆不許。師云。
却請和尚爲說。山云。吾說得是吾之見解。於汝眼目。
何有益乎。師遂徧檢所集諸方語句。無一言可將
對。乃自歎云。晝餅不可充饑。於是盡焚之。」

折角爲したることの、用を爲さずして、無効に歸するを
いふ。晝にかきし餅の一向用に立たざるが故にいふ。

勸學院の雀蒙求を轉る。

萬の事、學習せずとも、見聞に熟すれば、自然に大略の
事は知らるゝといふ喻なり。勸學院は藤原氏の學問所

用を爲さずとの義なり。

晝餅に屬す。

折角爲したることの、用を爲さずして、無効に歸するを
いふ。晝にかきし餅の一向用に立たざるが故にいふ。

勸學院の雀蒙求を轉る。

萬の事、學習せずとも、見聞に熟すれば、自然に大略の
事は知らるゝといふ喻なり。勸學院は藤原氏の學問所

用を爲さずとの義なり。

晝餅に屬す。

折角爲したることの、用を爲さずして、無効に歸するを
いふ。晝にかきし餅の一向用に立たざるが故にいふ。

勸學院の雀蒙求を轉る。

萬の事、學習せずとも、見聞に熟すれば、自然に大略の
事は知らるゝといふ喻なり。勸學院は藤原氏の學問所

用を爲さずとの義なり。

晝餅に屬す。

折角爲したることの、用を爲さずして、無効に歸するを
いふ。晝にかきし餅の一向用に立たざるが故にいふ。

勸學院の雀蒙求を轉る。

萬の事、學習せずとも、見聞に熟すれば、自然に大略の
事は知らるゝといふ喻なり。勸學院は藤原氏の學問所

なり、雀とは勸學院に仕へて、水を汲み薪を運ぶ小女の
名なり。其女此勸學院にて、朝夕學問する人の蒙求を
誦するを聞きて、常に口まねをする故に、雀の名にたよ
りて轉といふなり。又「昔言字考」傳云往古四條勸學院
林有雀。鳴聲微。晤伊。似唱蒙求題目呂蒙非熊之音。
故俗爲「常談」。即ち之によれば雀とは鳥の雀を指す如
し。「諺草」勸學院は藤原氏の人學問する所の名なり、
日本後記を考ふるに、天長三年三月に藤原冬嗣始て立
らる。拾芥抄に勸學院は三條の北、壬生の西に在とす、
今其遺址を雀塚といふ。そのかみ勸學院にて學問の行
はれし時は、其近林にある雀までも、蒙求を轉りしと
云事なり、是た々學問の甚盛に行はれし事をいはんた
めに云諺也。雀と云は僕隸の名なり、又蒙求の呂蒙非
熊と云事を黃鳥の轉りしなど、云は皆蒙求なり。按す
るにそこに集くふやくざものを雀といふなり、僧の學
林に長くとまり居て、出世せぬを雀といふ。
伊勢のつまらぬ案内者を宮すいめといふ。
慈姑を食ふと精を耗す。
此諺は「和名抄」に烏芋なくわめと訓じて澤瀉の類なり
といへるより、後には偏に澤瀉なくわめと心得、其澤瀉

け

苦をせねば樂はならず。

樂は苦を爲したる後來るものにして、前に苦を嘗めざ
れば後に樂はなきものぞとの義。

水を利用といへることをさへ思ひ僻めて言ひ出せしな
り。「本草」に「入腎經去舊水養新水利小便。」と
いひたり精を耗すといふこと絶えてなし。」

慶安口と言ひ始めたるなりと。

媒酌口と同意にて、頼まれざる事。慶安とは奉公人、
縁談などの口入する者の異稱にて、雇人の請宿をいひ、
奉公人又は縁談の候補者を悉く善良なる様に言ひなす
事なり。寛文年間江戸の醫、大和慶安てふ者、某貴人
の婚姻の媒して後大事件起りしより、人々取沙汰して

慶安口と言ひ始めたるなりと。

富裕に生れて榮耀榮華を盡したる者が、一朝不幸に陥
りて衣食に窮するに及び、嘗て榮耀に習ひし遊藝など

之を營業にすとは期せざりしに、圖らず之に依て、衣食を支へ僅に生計を立つるをいふ。これは錦花翁隆志といへる俳人の獨吟十百韻中の名高き句なるが、海内の人口に膾炙するに至り、諺とはなれり。

盤火を以て須彌を焼く如し。

微力なる者が大なる事を爲さんとするに喩ふ。力足らずとの義。骨折るとも其効なき義。「同覺經」取「盤火」。

燒須彌山。

雞群中の一鶴

衆人の中に一人卓越せる者ある喩。

雞口となるも牛後となるな。

大なる者の後に従はんよりは、小なる者の頭首の地位に居れとの義。「戰國策」蘇秦爲趙合從、說韓王曰。

臣聞鄙語曰。寧爲雞口。無爲牛後。今大王西面交臂

臣事秦。何以異牛後哉。

稽古に神變あり。

物を習ひて熱心に稽古する人は、必ず人の及ばざる一

得の備るものなりといふ義なり。

桂三個持て負ることなし。

將養の誦なり。桂馬三個手に有る時は必ず勝つといふことなり。敬して遠ざける。

表面には敬を加ふるが如く装ひて其實之を排斥し遠ざ

くる義なり。

傾城買ひと灰吹は青い内が賞玩

未熟の内却つて佳處あるをいふ。

傾城買の糖味噌汁。

女郎買の如き事に金錢を費消する者は、一方に於て奇

奇なるものなりとの義。

傾城買の草鞋はかず。

傾城買草鞋を拾ふともいふ。女郎買の云々ともいふ。

傾城買草鞋を拾ふ。

遊里に入て放蕩する程の者は、金錢を土芥の如く思ひ、

定めて慈善の事業、其他公共の事に金を投ずる事を吝

まざるべき筈なるに、其實却て路傍に遺棄せる破れ草

鞋を拾うて穿くほどの、鄙吝なる事を爲す者なりとの

義なり。

傾城に誠あらば三十日に月もある。

若し娼妓に實意のあるものならば、陰曆三十日に月色

輝輝たるを見るを得べしとて、陰曆晦日に月光を見ること能はざる如く、娼妓の誠を見ること能はずとの義なり。

傾城に誠なし。

娼妓に實意なしとの義。

傾城の千枚起證。

信用すべからずとの義。

傾城の空泣。

娼妓が客の心を蕩かす爲に、悲しくもなきに涕を流して、欺くをいふ。錦花翁隆志の句に「傾城の涙で庫の屋根が洩り」

盤雪の功を積む。

勤苦して學業をなすなすいふ車胤孫康二人の故事より出づ。「晋書」車胤字武子。南平人。勤不惰。博學多通。家貧不常得油。夏月則練蠶盛數十盤火。以照書。以夜繼日焉。「孫氏世錄」孫康家貧無油常映雪讀書。少

小済介。交遊不雜。後至御史大夫。

兄たり難く弟たり難し。

優劣する所なしとの義。

系圖自慢

漫りに祖先の系統の立派なる事のみ自慢して、自己の目下の位置如何を問はざる者をいふ。

兄弟牆に鬩ぐ。

さやうだいな鬩ぐ(キの部)。を見るべし

藝は道によりて賢し。

凡藝能は、人各自己が主とする道々によりて熟練する所ありとの義。耕作の事は農夫精しく、商業の事は商人が巧なる如きないふ。「王充論衡」程材篇「從農論」田田夫勝。從商勝。買買人賢。」

藝は身の仇。

藝能ある爲に、却て身の害を爲すとの義。古歌に「見よや人おのがえならぬ花の香に折つくさるゝ野路の梅が枝」

藝は身を助くる。

身に藝能の覺ある者は、縦ひ窮乏に陥るとも、之に由て糊口の便を得、能く身の不幸を助け救ふべしとの義なり。韓文公の進學解「占小善者率以錄。名一藝者無不庸。」

刑鞭蒲朽。

優劣する所なしとの義。

無爲にして治まる事をいふ。小野園風が詩に「刑穢蒲
朽空去。諫鼓皆深鳥不驚」
桂の高飛歩の餌食。

將棊の語桂馬を漫に動すと歩に取らることなり。
桂馬のふんどし香車の田樂。

將棊の語。
無期の功名。

健倅にて、思はず意外の手柄を成すをいふ。即期せずし
て偶然の奇功を得る義なり。

怪我の功名。

あやまちの功名(アの部)の條に出づ。

下戸と化物はない。

酒を一滴も飲まぬといふ者の無きは、化物のあるく
いうて無きか如しとの義。「犬子集」思ふか中は下戸ぞ
かし治まれる世には化物なかりけり」

下戸の殺あらし。

飲酒すること能はざる者は、肴を貪り食ふとの義。

下戸の酒怨。

酒を飲まざるものが、酒を怨むをいふ。
下戸の建てたる倉もなし。

飲酒家が酒を飲まぬ人を冷嘲して、酒飲まぬからとて
それだけ錢はたまるといふ常語なり。「家中
竹馬記」いかなるなげきのある時も、心ぐるしきをり
ふしも、萬わすれて心やるさかもりこそ、はめてたけ
れ。まして祝のある時は、賀酒とて酒を先ぞ飲む。上月
は酒にまどひつゝ、世さまわびしと申せども、生れつき
たる貧福は、「下戸の建てたる倉もなし。」

下戸の手強。

上月ならば酒を飲ますれば、少々の事は承諾すれど、
下戸は手強くて、むづかしきものなりとの義。

袈裟で尻拭。

貴重なる物を貴重なる所に用ゐず、飛でもない所に濫
用する喻なり。袈裟は僧の肩にかけて、衣の上に蔽ふも
のなり。之にて尻拭ふとは實に亂暴なり。

芥子に須彌をかくす。

小なる者の中に、大なる者を藏すとの義。「念佛三昧經」
「取三千大世界内ニ於口中能以須彌内ニ於芥中」

下性の一寸戸。

けすの一寸のろまの三寸の條に出づ。

芥子を手に破るが如し。

至極些細なる事に心を勞し手を煩す喻。

下衆と鷹とに餌を飼へ。

下衆を使ふこと、鷹を養ふこと、は、程能く餌食を與
へ恩恵を施して、柔和に取扱ふべしとの義なり。

下衆の後智慧。

下賤愚昧の者は、事の過ぎ去りたる後に至り、漸く氣が
付くものにて、其初めには思慮未だ及ばずとなり。

下衆の一寸戸。

次の語を見よ。

下衆の一寸のろまの三寸。

戸を閉づるに、一寸ほど残すを下衆とし、三寸ほど残す
をのろまなりといふ。下衆とは、はしたものの、いやしき
もの、身分のなき者等の名なり。のろまとは、癡漢。愚鈍
等を指す。「梧嶽漫筆」戸障子を閉づるに、一寸残し草
履木履を踏散して、脱置く人みな敗家の人なり。品性
の卑しき人は物ごと敬みなく、物を地に置くにも未だ

手を放たざるに、はや目は他に向ふ者なり。舉動の如何
によりて、人品の如何を知らるゝなり。(下性の一寸戸
とも下衆の一寸戸ともいふ。

下衆の唇と夜着の袖。

常に開き居て、恰好が悪いとの義。夜着の袖は厚くして
不恰好なり、下衆の唇厚くして、是も亦不恰好なり。

下衆の子と稗團子。

卑しき者と陋しきものをいふ。

下衆の樂は寢樂。

下賤の者は、寝ることを無上の樂とすとの義。

下衆のない上臈はならぬ。

上臈は、下衆の上に立ちて指揮するものなるが、下衆無
ければ、上臈を務むること能はず。畢竟尊卑上下の等差
こそあれ、其相待つこと平等なりとの義。(下衆なりと
侮蔑すべからず)。「野語述説」言雖有上下尊卑之分。
何持尊敬上位。而犯侮下位乎。」

下衆の話は糞で治まる。

下衆共の話の終は必ず糞の事が出るとの義。

下衆も三食上臈も三食。

賤しきも貴きも日に三び食事すること相同じとの義なり。

懈怠の者は食を急ぐ。

なまけ者業を勉めざれども食を急ぐとなり。

懈怠者の食急ぎ。

前の謎に同じ。

下駄に焼味噌のやう。

汚穢なる者の形容。下駄に焼味噌したるは食ふべからず。下駄に焼味噌かんからやの婆さんといふ。未詳。

下駄穿いて首つ切り。

深いといふ謎にして、深く懸慕執心せることを、形容していふ。(水中に入るに下駄を穿いて居るに、猶首つ切りまでつかるといふことにて、水深しといふ意をあらはす即此深しの意義を取るなり。)

下駄に灸をすえると客が歸る。

來客の長坐する時、其の穿き來れる下駄に灸すれば、客歸り去るといふ俗説なり。

獸雲に吠ゆ。

昔支那にて仙藥を雞犬に與へしに、雞犬みな天上に飛昇して、吠ゆる聲遙々雲中に聞えしといふ、神仙不經の怪談なり。「事文類聚」「淮南王安臨仙去餘藥在鼎中。雞犬舐之並得飛昇。故雞鳴雲中。犬吠天上。」

下駄を洗ふと雨が降る。

俗説。

けちがつく。

かりそめなる過誤失敗を爲し、身に不利若しくは害の來るべき前兆の至れるをいふ。けちとは凶事のこと。

げぢ喰ひ頭。

頭の禿げたるにいふ。げぢに舐めらるゝと髪落つる參照

げぢ〜眉毛。

眉毛の虫蟻に似たるをいふ。

げぢに舐らるゝと髪落つる。

世俗の説に、虫蟻に頭なめらるゝと、頭が元げるといひ傳ふるなり。げぢとは虫の事にはあらで、下食といふ鬼に舐らるゝといふことを指すか。「江家次第」「追離後

主殿寮供御湯に注に「雖當歲下食猶供」「一條禪閣

鈔」其日注「曆下食者。鬼神之名。此日沐浴則。鬼舐頭

而髮落故禪之」倭名類聚鈔「河源論云鬼舐頭人頭或

如錢大。或如指大。髮不生也」曆例に云く「歲下食は

天狗星の精、下界に下て、食を求むる日也。吉日なれば

妨なし、凶日なれば忌むべし(中略)か、れば俗説のけ

ちはげじきの約りたるなるべし。云々」

下女腹よければ主腹知らず。

下人はおのが腹のみ思ふとなり。主盡ふれば狗痔すといふに反す。

けちをつけらる。

けちがつくの條參照すべし。

血氣盛りに神たゝらす。

血氣に乗じて、一時盛榮を極むる際には、非道を働きても運勢よし、故に神のたゝりあるを知らずといふなり。

結構毛だらけ猫灰だらけ。

結構ですといふ事を罵りていふなり。

結構人は阿房の中。

如何なる事を爲しかけられても、立腹もせざる者は痴

漢の鬪なりといふ義なり。(結構は馬鹿の唐名ともいふ)結構は馬鹿の唐名。

前に同じ。

褻にも晴れにも。

唯一あるのみにして二とないことをいふ。褻は平常着を云い、晴れは晴れの場所に着る衣服のこと。

けはひ假粧して水風呂の御馳走。

けはひは氣色にして假粧の事、丁寧に假粧したる所を見かけて、風呂に浴せよと勧められたるをいふ。事の前後顛倒せる接待法杯を云ふか。

今日か明日か。

人の老境に及びて、殘齡のほどなきをいふ。今日とも明日とも知れぬ果敢なき命なりとの義なり。「法苑珠林」致敬篇「命如風中燈不知滅時節」今日復明日不覺死輪迴。朝忠の家集に「人の世の老をばてにせましかばけふあすもなげかさまし」

髪深いものは色深い。

髪の濃く生えたるものは深く色を好むといふ俗説。

今日の後に今日はなし。

日は一日一日と経過し去りて、再び原へ返り来らず、今日といふ今日は、再びあることなしとの義なり。

陶淵明の詩に「盛年不重來。一日難再晨。及時當勉強。歲月不待人。」

今日は人の身の上明日は我身の上。

凡そ忠難窮厄の人世に於る、一向定めなきものにして、今日は他人の身の上の事に關すとも、明日はまた我が身の上の事となるも測るべからず、との義なり。「平家物語」悪源太義平、死に臨みて、平家の士に對して言ひたる詞、今日は人の上明日は我身の上。「新古今集」なき人をしのぶること、かつまでぞ今日のあはれば明日の我身を。」

外法の下り阪。

失敗して回復しがたしとの義。外法を行ふものは人の目をくらますを趣意とす、若しあやまちて仕損ずる時、仕直すこと能はず。下り坂に車をやるが如しとなり。又外法といふは、下駄のことにて、下駄を穿ちて、坂道を下るは難きもの故、しが云ふとの説もあり。懸河の辯。

能辯の形容。辯舌水の流るゝが如し(への部)参照

験が見ゆる。効験のあらはるゝ義。(病氣の際醫藥等の法により、すこし快方に赴くやうの氣色ある類をいふ)

験が見えぬ。

効験のあらはれざるをいふ。

喧嘩口論は後悔の種。

人と喧嘩し口論する時は、其後必ず悔ゆることありとの義。

喧嘩過ぎての棒断木。

喧嘩過ぎて後に断木を打振り、いかに騒きたりとして、何の益もなし。是れ物の既に時期後れて用を爲さるるにいふ。ちぎりきは断木を指す、力競べをせん爲に振合に用ゐる棒の事。「平家物語」四國を九郎判官せめ落されぬ、今は何の用にあふべき、六月の菖蒲會に逢はぬ花、既過ぎてのちぎり木かなとぞ、笑はれける。「碧殿」八十八則下語「賊過後張弓。」

喧嘩同士の軒並び。

中の悪き者の相隣れるをいふ。

喧嘩に毛が生えた。

喧嘩が更に紛糾して、一層勢を添ふるに至りしこと、禿頭をきんかん頭と云ふ。きんかんに毛が生えたと云ふ語呂を轉じたるならん。

喧嘩に花が咲いた。

前の跡に同じ、花は火花の事。

喧嘩に負けて妻の面をはる。

強者に敗れて弱者をいぢむる事。

喧嘩の傍杖。

喧嘩の餘波傍觀者にまで累を及ぼすことあるをいふ。

玄關に横付。

乗物を玄關に横付すること(大業なる體)

喧嘩兩成敗。

いさかひは双方共に成敗すべしとの義。成敗といふは

成敗すとの舊き俗語なり。

賢者は口を慎み虎豹は爪を愛す。

鼠とる爪は爪をかくすに(への部)同じ。

獻上の鳴のやう。

足袋ばかり白く新しきを穿きたる體にいふ。

獻上物の鯛。

眞面目なる形容。

賢者ひたるし伊達寒し。

顔回は賢者なりしが、糟糠だも飽はずと孔子が評せられたやうに、常に赤貧に安じて居りしなり。故に賢者ひたるしといふ語起れり。又伊達するものは、伊達の薄衣とて見えをつくらふ爲、寒き思をするとなり。

賢者も千慮に一失。

智者も千慮に一失(への部)と同じ。就きて見るべし。

建長寺の庭を烏箆で掃いたやう。

綺麗になつて居ることをいふ。「狂言記」鐘の音、誠に世話にも建長寺庭を、烏箆ではいたやうと申すが、隔から隔に、塵が一つ御坐らぬ。

玄田牛一。

畜生といふかくしことはなり。玄田を合して畜となり牛一を合して生となる。

捲土重來。

一時勢を賤めたれども、更に重ねて来るとの義。
権振り棒振り。

権つくことをいふ。(威勢を弄する義)
権興もなし。

初めより之を爲さんと企圖したるにあらで、不圖出来たることをいふ。「諺草」に「權興時經泰風に權興篇あり、朱子の註に云、權興始也。華谷殿氏曰造、衡自權始。作車自與始。今俗に始もなく不圖出来たる事をけんよもなきといへるは此字なり」

権もほろ。

人の請ふ所あるに對し、斷然謝絶して、よりてもつかれやうな、無愛想なるをいふ。「日本辭林」けん及ほろ、は雉子の鳴き聲、取り付く術もなきことをいふ。「和漢故事要旨」心に堅く誓ひて、十分此の事を貫徹せんと思ひ立つことある時は、假令權柄強く威勢ある人の臂を張り荒言して、吾ならば此事を申込んで、よもや断ることあるまじとて、試に之を従はせんと欲すれども、曾て従はざるをいふ。まして天下の政より一家の内を治むるに至るまで、忠を盡し義を重んずるの誠を以て、

ふ。「周易正義」碩鼠五能不成二技。注云能飛不能上屋。能緣不能窮木。能游不能度谷。能穴不能藏身。能走不能先人。「荀子」梧鼠五技而窮。石鼠碩鼠梧鼠共に蟻蝻の異名。石臼、藝(イ)の部参照。
けらの水渡り。
大なる事を爲す能はざるを云ふ。けら才の解を見るべし。

けらが味噌を嘗めたやう。

容貌のなかしき形容ならん。
毛を吹いて疵を求む。

本義はアラサカシをする意。人の不利に乗じて、己の利を計らんとし、却て自己の不利となり、大失敗の緒を引き出す如き類をいふ。(口を以て毛を吹きたらば自體の疵露はる、如く、人の惡を露はさんとして、怒に吟味して、却りて我身の過失に墜つることあるをいふなり)。「韓非子」大體篇「古之全大體者。中略 不逆天理。不傷性情。不吹毛而求小疵。不洗垢而察難知。」「前漢書」景十三王列傳「今或無罪。爲臣下所侵辱。有司吹毛求疵。」「劉子新論」宿讒篇「善人少而惡人多、則

けら—けな—こ

依姦の人を罪せんには、何の威ありとも、此一箇の硬直には邪なる人の權ほろくとなるぞの心なり。按ずるに雉子の聲なり、ケンは聲、ホロ、は羽音、雉子は雌雄なれば相愛し、雄と雌となれば必ず闘ふなり。唯此諺詳しくは解きかねれど、イヅレ下々の語なる故明かならぬが兩雄の相容れざる事には相違なし。

剣を遣して舟をささむ。

株を守ると同様に、迂愚にして、機に臨み變に應ずる才なきものを指していふ。「呂氏春秋」慎大覽察古篇「楚人有涉江者。其劍自舟中墜於水。遺契其舟。曰。是吾劍之所從墜。舟止從其所契者。入水求之。舟已行矣。而劍不行。求劍若此。不亦惑乎。以此故法爲其國。與此同。時已徙矣。而法不徙。以此爲治。豈不

家來と爲らねば家來を使へぬ。

一旦人に事へし者ならでは、人を使ふこと難しとの義なり。

蟻蝻才。

少の才能あれども、精しからずして、用に立たぬをい

擧者寂寞而譏者訕。是以洗垢求疵。吹毛覓瑕。「書言故事拾遺類」「事求多端。曰吹毛求疵。註曰深求隱僻。吹毛求疵。以求瑕疵。」「故事成誤考」「小過必察。謂之吹毛求疵。」「後撰集」雜歌「直き木に曲れる枝もあるものを毛を吹き疵をいふがわりなき」

こ

五位鷺の嫁入り。

朝行つて晩に歸り來るとの意、嫁して間もなく戻るとの義なり。

濃い中に水をさす。

親密なる間柄を疎遠ならしむる義なり。濃い中とは親密なる間柄をいひ、水をさすとは薄くするをいふ、即疎遠ならしむる義なり。

濃い中の夫婦いさかひ。

至極親密なる夫婦の間柄にも、争の起るものなりとの義なり。

五位を得て四品に昇らんと望む。

一八三

人の欲には際限なく、既に五位を得れば、又四品に昇らんと欲すとの義。
後悔先に立たず。

事の過ぎたる後に悔ゆとも其効なし、さりて後悔する前に、其氣が付かぬものなりとの義。『瀧山驚蟻』可
惜一生空過、後悔難追。『古今集』さきだ、ぬ悔のや
ちたびかなしきは流るゝ水のかへりぬなり。奥儀抄
に「うせにし人にさきだ、ぬを後悔さきにた、ぬによ
せてくひたるなり」
後悔先に立たず提灯持後に立たず。

後悔といふことは事の起つた後にあることにて、其事
未だ起らざる前にあることなし。提灯を持つものはい
つも前にあらざるべからず故に對句となしたるなり。
後悔は智慧の緒

後悔するに依つて、知識を得らるゝをいふ。
後悔臍を噬む。
事生じたる後に至り、之を悔ゆとも及ばずとの義、臍を
噬まんと欲すとも及ばず故にいふ「左傳」。莊公六年傳
「若不早圖。後君噬臍」。

孔子の腹黒。

『塵添盛鑑鈔』腹黒事付孔子腹黒事。孔子の腹黒と云事
あり、喻へば魯より齊へ政道の爲に行給ふに、或山中
に童子ありて、樹上より小便をしかけたり。孔子取致へ
ずよくしたり、大剛者也とほめて通り給ふ。其後時の令
尹の通るに、又以前の如くしけり。令尹是を見て、天下
の大害をなさん者也とて、引下して頭を刎捨てけり。三
年を経て魯に歸り給ひしに、木上に白たる頭あり、孔子
筆を取て納金百兩と書て、過給ひけり。賊人之を見て打
碎けり、毒蠶をば腦を碎くと云此事也。蠶字丁腫反古文
蠶と書く、ノンシと讀也。木蟲とも又白魚とも云。皆是
ノンシ也。其國に居て其國を亡す蠶の其木を咬て其木を
枯すに喩へたり。今シミと云是也。『寶論』夏國公子問
云佛法蓋國孔子腹黒と云非常の腹黒の義にはあらず、
非其官不爲其政と云へば國大害とは思給へとも、
其官なられば其人に讓るなるべし、是政道の趣也。
孔子も時に遇はず。

孔子の如き聖人の身を以ても、七十年間志を得ずして、
政を天下に施すこと能はざりきとのことにて、智能あ

り、識見ある人も、不運にして用おられざることありと
の義なり。
講釋師見て來たやうな虚言をつく。

川柳の句より出でたる諺なり。
後生畏るべし。
『論語』子罕「子曰後生可畏、焉知來者之不可今也、
四十五十而無聞焉、斯亦不足畏也已」。

碁打親の死期に得遇はぬ。
圍碁を好む者は、耽り易く、ふける時は緊急の用務をも
打ち忘れ、大切の時をも顧みざるが常なり。故にいふ。
碁打に時無し。

圍碁を好む爲に、食時に後れ、又は急にすべき用務をも
後にする等、毫も時を正しくせざる故にいふ。
功遂げ身退くは天の道。

功業已に遂げ、名聲世に顯はれたる上は、速に其身を
退くべし、是功名を全うする所以にして、天の道に叶ふ
者なりとの義なり。そは天の萬物を生ずるに、春は發
生して、夏に長育し、秋は成熟して、冬に收藏し、各其

功を成して去る者なれば、天の道に叶ふとはいふなり
「老子」功遂身退天之道。古本に従ふ「功成名遂身退

天之道。今本に従ふ。
功能書のよめぬ所に功能あり。

薬の功能書の讀み得ざる位のもの、却つて薬を信ず
ること強き故病によく功ありとの義。
勾配がぬるゝ。

陵運の勢をいふ。愚昧の者の凌ぎ易き義なり。『言海』
「勾配(一)算術測量の語、斜なる線の傾ける度。屋根の
勾配、山の勾配、(二)俗に勾配に走るといふ意を略して
氣働き。氣轉。勾配はやし、勾配のろし。」
弘法の代僧勤め兼ねずい。

智能の人の代に立つことを得べしとの義。
弘法も筆の誤。

如何なる長所能所の事、如何なる功者なるものにも、千
に一の過誤なきこと能はずとの義なり。弘法名は空海、
博學多識、特に書を善くす。嵯峨天皇、橘逸勢、を合せ
て本朝の三筆と稱す。殊に弘法大師が執筆の嚴正なる
こと、古今比なしといふ。かゝる逸筆の人にても多く書
ける中には筆の誤り無きを保し難し「元亨釋書」空海傳

「空海奉勅書應天門額。已挂之仰見應字上點缺之。海乃擲筆補之。毫無差邪」とあり是詠の由来せる所ならん。

小馬の朝いさみ。

小馬の朝駈に同じ。

小馬の朝駈。

駒は晨朝に最も元氣ありて、能く走れども、直に疲る者なり。故に事を爲すに當り、其中途に顧るゝをも顧みず、最初に全力を出して、威勢強くするに喩ふ。子が思ふより親は百倍に思ふ。

木陰に臥す者は枝を手折らず。

親の子を思ふ念の切なるをいふ。恩義に背かざる義なり。樹陰に憩ひ臥す者は、其場を立ち退く時などにも、其枝をば手折らぬ者なり、一ひ恩義を受けては之を忘れざるに喩ふ。「韓詩外傳」食其食者、不毀其器。陰其樹者、不折其枝。

小刀細工。

醒醒たる小策を弄する事。

小刀に鑿のやう。

物の卒合せぬこと、不相應なることに喩ふ、七首に鐔を打つたやうともいふ。

五月子は養はず。

俗説。齊の孟嘗君五月に生れ、不祥の子なりとて捨てられんせとし事あり、支那の古來の俗説より起りたる諺なり。

五月の盲人薯蕷。

五月に薯蕷を掘るときは最も掘り易しとの義なり。盲人にても掘り得るなりといふほどの意なり。盲が強ければ將棋にも強い。

子が無くして泣くは芋掘ばかり。

子無くとも誰も泣く者なし、芋掘のみは其芋に子の付かぬを見ては泣くとなり。黄金の刀も請うて見よ。何事にても他人に請うて見よといふ事。

黄金を鏤め玉を磨く。

物の美麗を飾ることをいふ。

木枯の終は落葉の夕日影。

風吹荒める後、木の葉のはらりと散る様が、夕陽に映じて見ゆと云ふ詩的の語にして、最後のやさしさを云ふ。

吳下の阿蒙に非ず。

「吳志」孫權謂呂蒙及蔣欽曰、卿今當塗掌事、宜學問以自開益、蒙始就學、魯肅遇蒙言議、拊蒙背曰、吾謂大弟但有武略、今者學識英博、非復吳下阿蒙、蒙曰士別三日即當刮目相待。

吳牛月に喘ぐが如し。

人の畏懼すること甚しきないふ。吳牛は水牛なり。此牛熱を畏るゝこと甚し、因て月を見ても、炎日なるかと疑懼し喘ぐなり。

故郷には錦を飾る。

一旦修行為の爲に、他國に出で、千辛萬苦を嘗め、遂に立身出世して、其故郷に歸る時には、立派に着かざりて、今の富貴顯榮を人に示すこそ、本意なれとの義なり。「史記」項羽本紀、項羽曰富貴不歸故郷、如衣繡夜行、誰知之者。「南史」劉子遵傳、之遵字思貞、中略、除南郡太守武帝謂曰卿母年德並高、故令卿衣繡還鄉、盡榮養理。「事文類集」衣錦還鄉條下、柳慶遠字文

和尙、雍州刺史高祖饒於亭曰、卿衣錦還鄉、朕無西顧之憂。「後選集」紅葉ばなわけつ、行けば錦着て家に歸ると人や見るらん。故郷忘じ難し。

凡そ人は他國に在りて富貴顯榮なりとも、故郷は常に慕はしく懐かしくして、忘れがたきものなりとの義なり。「楚辭」鳥飛返故郷、兮狐死必首丘。「文選」王正長雜詩、人情懷舊都、客鳥思故林。「淮南子」繆稱訓、狐獨丘而死我首不乎、禾稔垂れて根に向ふ、君子本を忘れざるをいふ。「唐詩選」舉頭望山月、低頭思故郷。「歸朝嬉しやあの山越えて都まさりの故郷へ」

「諺草」檀弓曰君子樂樂其所生、禮不忘其本。古之人有言、狐死正丘首仁也。諺の意と同じ。

御器も持たぬ乞食。

御器とは飯椀の事。飯椀をも持たぬ乞食は零落の極なり。

小食は長生の験。

少食に食して大食せざれば長壽を保つとの義。殺を粗末にすれば核の病を煩ふ。殺を粗末にせざらしめん爲の感し核は不治の病なり。

殺と核と音相近し。
虎穴に入らざれば虎子を得ず。

艱難危険を凌ぐにあらざれば、大利は得られぬものなりとの義なり。「後漢書」班超傳「班超曰不入虎穴不得虎兒」

轉けた上を踏まる。

不幸ある上に、更に苦しめらるゝをいふ。

顛けても徒手では起きぬ。

貪婪ななき者をいふ。其身物に躓きて轉ぶることありても、空手には起き上らて、地に物なければ沙石にもあれ、馬糞にもあれ、拾ひ取りて己を利せんとする熱心のいと深きなをいへるなり。「史記」貨殖傳「魯人俗儉嗇。而曹邴氏尤甚。以鐵冶起。富至巨萬。然家自父兄子孫。約。俛有拾仰有取。轉心。只は起きぬといふ。

焦飯の好きな人はあばたづらの人と連れ添ふ。

俗説なり解するに及ばず。

白痴の後思案。

愚昧なる者は、事ある前に思慮する能はず、事ありたる後にて、漸く思案をめぐらす者なりとの義。

白痴の一心。

事の結果如何を思慮せず、一心不亂となる事、又た何程考ふるも成功せざる事にも云ふ。

後家の質屋に見せても價值がある。

頗る價值のある物を指していふ。後家の質屋ですら其價值あることを認めらるゝとなり。

白痴ほど恐しい者は無い。

思慮なき故、如何なる無分別なる事をするか測りがたければなり。

此處が思案の置き所。

此處が即ち能く熟考すべき所なりとのと。

虎口を逃れて龍穴に入る。

一難逃れて又難に逢ふことをいふ。

此處といへば彼處。

識解ありて悟りの鋭敏なる義なり。譬と云へば植の如し。

此處に手洗ふ手水鉢。

非常の常言にて、此處に手があらうといふを、手洗ふといひなして、其の語呂の柏子より、手水鉢とつけてい

下向女に反男。

古來の風習として、男女の姿態、男は仰ぎ、女は俯したるを美とせるをいへるなり。

粉米も噛めば甘い。

小利と雖ども收むれば益ありといふこと。又何事でも咀嚼すれば味ありといふ事。

心内に在れば色外に顯る。

「忍ぶれど色に出にけり我戀は物や思ふと人の問ふまで」心中の事直に外貌に表はるゝをいふ。

心内にあれば詞外に顯る。

心中に何事か思ふことある時は、必ず其心に思ふ事の端、やいもすれば言に出づとの義。

心がけ有る士は櫓の音に目をさます。

常に寸分の油断なく、用意愼密なる武士は、櫓の鳴る音を聞けば、熟眠中にも、直に目を醒ますとなり。

心がけ有る士は地を這ふ蟲にも氣をゆるさぬ。

油断せぬこと。注意の周密なること。

心から乞兒となる。

油断せぬこと。注意の周密なること。

此處まで來れ體進じやう。

「南瓜咄」昔さる人の云、友だちには相應じたる友を求めたるがよきといふことに、古人云君子交淡如水小人交甘如醴、とそれより子供の友だちと語らひて、此處までこざれ體進じやうといふと申されし

鈍鈍に反鎌。

鈍は弓形になりし所の終彎曲せるものは、木竹を断つに銳利にして、鎌は其反對に彎曲の甚しからざるもの銳利なりとの義。

午後五時半。

ふなり。所謂引掛文句にていひかけたるなり。

七つ下り(ナ)の部とも云ふ。衣服など古びたるをいふなり。

九日鐵漿は乞うてもつけよ十日は殿後に遠ざかる。

婦女かれをつくるに九日を吉日とし、十日を凶日とす。

此處ばかり日は照らぬ。

何處の地に行くとも、日光の照さる所なきが如く、此處に限らず何處にゆくとも、樂を營むを得べしとの義なり。

此處まで來れ體進じやう。

「南瓜咄」昔さる人の云、友だちには相應じたる友を求めたるがよきといふことに、古人云君子交淡如水小人交甘如醴、とそれより子供の友だちと語らひて、此處までこざれ體進じやうといふと申されし

鈍鈍に反鎌。

鈍は弓形になりし所の終彎曲せるものは、木竹を断つに銳利にして、鎌は其反對に彎曲の甚しからざるもの銳利なりとの義。

俗に心迷ひて、千人に悪まれたる者、癩病を受くといふ、我心の悪しき爲に悪報を受くる喩。

志は笹の葉につゝめ。

志とは禮物の事。些少の報効なりとも之を謀るべしとの義なり。些細なきの葉とつけて云へるなり。昔は進物杯木の葉に包みたるより云ふ。

志は椎の葉につゝめ。

前と同意。

志は松の葉につゝめ。

前と同意。

志を松の葉に包む。

前と同じ。

心正しければ事正し。

心正しければ、従つて爲す所の事も正しきなをいふ。「讀書綴録」心如水之源。源清則流清。心正則事正。文字は心の寫眞なりと云ふ程にて、字の書さまにて其人の心根を推知すべしと云ふ。寶下師などの墨色を見るといふも此事なり。

心と口と違ふ。

口に言ふ所と、心に思ふ所と相違すとの義。「潛夫論」行與言謬。心與口違。

心無き子は親の故郷を語る。

心無き者は其親の舊郷などを妄に他人に語るとの義。卑しき本性の見ゆるを(おさと)が見える(と)云ふ。

心無き者には乞うて食へ。

心無き者とは氣のつかぬ者と、或は又吝嗇にして人に一飯の食を與ふるに惜むが如き者をいふ。さる者に對しては己の方より乞ひて、食し、促して請けよとの義なり。

心無しのかつたる。

心無き者を罵りていふ。「言海」(一)かたぬ(各)「路の傍居の義、或云偏坐の義と」(二)乞食(三)癩病カツタロ(かたぬ)病などの意にて乞食に此病多き故にいふ(か) (三)人を罵り呼ぶ語「此能取は日も得はからぬかたなりけり」心無しのかつたぬとは己れがやうなる者をいふぞかし。かつたぬとは、かたぬの音便。

心無しの人怨。

己の心の非なるを願みずして、却て人の己を非とする者を怨むとの義なり。「荀子」修身篇「小人反是致亂而惡人之非己也。致不肯而欲人之賢己也。心如虎狼。行如禽獸。而又惡人之賊己也。」

心につるゝ姿。

優しき心の人、容貌も優しく、心の荒きものは、姿も荒々しきか如く容貌姿態は其心に從ふとなり。

心に鏡を卸す。

心を制して物欲に惑はせられず、能く克己するをいふ。

心の仇は心。

「古今六帖」心こそ心をはかる心なれ心の仇は心なりけり。「正法念經」心是第一怨。此怨能縛人。送到閻羅處。汝獨地獄燒。爲惡業所食。妻子兄弟等。親族眷族不能救。

心の鬼が身を責むる。

一念邪なる心を起さば、其心惡鬼羅となりて、我身を呵責すとの義なり。「正法念經」閻羅獄卒。非實有情。以業生業力。故見之。古人の歌に「世の中の人はい知られど科あれば我身を責むる我が心かな」又「怖ろしき鬼の栖所を尋ねれば邪見の人の胸にこそすめ」新六

帖「かくれみのうきなをかくすかたもなし心に鬼をつくる身なれば」謙徳公の家集に「我がために疎きけしきのつくからにかつは心の鬼も見えけり。」

心の駒が狂ふ。

心の亂れ動きて、思慮分別の身を離るゝをいふ。次の諺參照すべし。

心の駒に手綱ゆるすな。

繋ぎたる馬の鞵絆を脱する時に狂ひ出すが如く、心が制する所なく、之を縱にするときは、邪道に陥るに至る故に心を制することを怠るなどの義なり。「瀉山醫徒」如惡馬不以轡將當率人陷於陷阱。必不相廉。古歌に「ひかれなばあしき道にも入りぬべし心の駒に手綱ゆるすな」

心の師とはなれ心を師とせざれ。

心には、私心と本心との兩方面あり、私心惡を起すと、本心よく之を止むるは、心の師となれるなり。此本心能く私心に打ち克ち、務めて私心の爲に回蔽せらるゝなどの義なり。「大般涅槃經」師子吼菩薩品願作心師。不師於心。陸象山の「語錄」に「學者大病在於師心自用師心自用則不能克己不能聽言」新撰六帖「おろかなる心の師にはなりぬとも思ふ思ひに身をばまかせじ。」

心は二つ身は一つ渡りかねたる二瀬川。
心は二身は一に同じ。
心は圓く爪は角。

心は面の如し。

人の心の同じからざることを、猶其面の異なるが如しとの義なり。

心は身のあるじ。

人は肉體が主たるに非ずして精神が主たりと云ふ義。即ち精神が肉體の支配者なりといふこと。

心は向ふ境涯にうつる。

人の心は境遇によりて、善きに悪きに移るとの義。

心は持ちやう。

心の持やうにて、樂觀を悲觀する事も得べく、悲觀を樂觀する事も得との事。

心二つに身は一つ。

欲する所二ありて、一方を爲せば、一方を廢せざるべからざるを云ふ。

心程の世を経る。

心の持ち方に従ひて、之に應じたる世を経る者なりとの義なり。人の心は清濁邪正あるを免れず、故に其の作す所の世務に就きて、千差萬別あるものにて、心清くして正しければ、必ず慶福を得て、安穩に世を経る者なり。『説苑』雜言篇「千路曰。凡人爲善者。天報以福爲不善者。天報以禍。」

心も憂る胸の闇。

思ひに沈みて、胸中亂るゝ時には、思慮闇くして物の是非善惡の辨別心がつかぬとの義なり。

心好の春風や花の散らぬほど吹け。

能狂言の言葉、満足の上に満足を庶幾ふ意。

心怯弱者が爺無子を生む。

氣のよい者爺無子を生む。(キの部)に同じ

五臟六腑に泌み渡る。

悲哀痛恨等の情態が、深く身に徹するをいふ。漢方醫の說に心、肝、腎、脾、肺、を五臟といひ、胃、腸、膀胱、大腸、小腸、三焦、を六腑といふ。

小姑一人は鬼千疋にひかふ。

心
小姑とは夫の姉妹を指す、此の小姑は嫁の厭ふ者にして、鬼千疋にも相應すとのことなり。
小姑には困らぬが八口に困る。
小姑よりは八ッ口とて口の多きが却つて厭ふべしとの義。
「言海」「幼童婦女の衣に、袖の腋下に合ふ所を縫はずして縫くこと、左右各四つなれば八口ともいふ。」とあり即ち八口とは口多き義なり。
腰が二重になる。
腰折りからめたる形容、老人の事。
乞食が馬もらつたやう。
有難迷惑の事。
乞食根性
人の物を孕頭る者なをいふ。他より物を貰ふことを知つて、人に物を與ふることを知らざるもの。
乞食小屋へ富の落ちたやう。
曾て豫期せざりし得る所ありて、望外の喜びに逢ふことをいふ。富は富くじにて無盡の事。

乞食に氏なし。

人に食を請ひて、生活をするも、もと己が其産業を治めざるの致す所にして、先天的に乞食たるものにあらずとの義。

乞食に筋なし。

西鶴の胸算用及び名殘の友に見ゆ。

乞食に種なし。

前の諺に同じ。

乞食に朱椀。

分に過ぎたる物を所有すとの義。

乞食に膳椀。

前の諺に同じ。

乞食に貧乏なし。

極端の極端と一致するを云ふ。乞食より以上零落する事能はず、されば天下至る所を我家とし、金殿玉樓を廣しと思へる貴人の心の憐れに思はるゝに至るなり。

乞食の朝祝。

如何なる身分の人にも、吉兆を祝ふを云ふ。

乞食の朝詣

一日の中、朝は最も心忙しき時にて、歌など歌ひ居る暇無きに、乞食は家も無く、仕事も無ければ、却つて氣樂なりとの意。

乞食の馬を買つたやう。

身分不相應なる物を買ひし喻。

乞食の大連

乞食は成るべく離れんに、ならざれば得物少き故、大連になる事は、施行杯非常なる事ある時に限る。

乞食の米をこぼしたやう

貧乏人灰撒けば風が吹くと云ふ如く、窮者の尙窮するをいふ。

乞食の斷食

悪しき事、醜なる事を強いて善美に言ひなす事。

乞食の友擇び

持つべきものは友なりと、兼好法師も言はれあるは友は自己の利益になればなり。乞食が乞食の友を持つ、何れも己を利するものなき様思はるれど、尙彼等の間

乞食の羨嫌ひ

死にたいと羨食ひたいと程大なる虚言なしと云ふ如くに、夢飯は乞食も嫌ふとの事にて如何に零落するも尙ほ好厭の情あるをいふ。又身分をも願みず氣まゝ榮耀をすするをいふ。

乞食のお粥

言ふばかりにて實行せざる事。乞食の粥は湯ばかりで實少し湯ばかりと、言ふばかりとを通はせたるなり。

乞食は長生の種

飽食暖衣は却つて命短しと云ふ反對の語。

腰巾着

人につきままとふとの義。阿附する者の異名にいふ。

乞食も場所

如何なる職業にても、都會にてなせと云ふ事。

乞食も米の飯を食ふ

「元曲選」馬陵道雜劇。「常言道、口設尊卑。」

乞食も世界よかれ

如何に零落するも、全く世を忘れず。世の善からんことを願ふとなり。

乞食を三日すれば止められぬ

賤しと思ふ事の却つて樂しく、人に厭はるゝ事の却つて人に好まるるを云ふ。

五七の雨に四八八風に九は病

俗に地震せる時刻五ツ時と、七ツ時とには雨が降り、四ツ時には早し、六ツ時と八ツ時には風が吹き、九ツ時には病人多しと、占ひ言ふなり。五ツ時七ツ時等は昔時の時刻の稱なり今の稱に對照すれば左の如し。

舊稱	今稱	舊稱	今稱
九ツ半	一時	九ツ半	一時
夜八ツ時	二時	八ツ時	未時
八ツ半	三時	八ツ半	三時
曉七ツ時	四時	七ツ時	申時
七ツ半	五時	七ツ半	四時
明六ツ時	六時	六ツ時	五時
六ツ半	七時	六ツ半	六時
朝五ツ時	八時	五ツ時	七時
五ツ半	九時	五ツ半	八時
四ツ時	十時	四ツ時	九時
四ツ半	十一時	四ツ半	十時
九ツ時	十二時	九ツ時	十一時

五十歩百歩

畢竟同一に歸すべしとの義。彼れも、此れも格別の相違なきをいふ。「孟子」「王好戰、請以戰喻。填然鼓之。兵刃既接、棄甲曳兵而走。或百步而後止。或五十步而後止。以五十步笑百步、則何如。曰不可。直不百步耳。是亦走也。」是より出でたる諺なり。五十歩を以て百歩を笑ふ如しといふ。

五十煙草に百酒

煙草や酒は少壯の時代に喫飲すべからずとの戒。五十歳にして煙草を喫するも可、百歳にして酒を飲むも可といふ。

五十になれば五十の縁あり

男女共に老年に至りても猶老人相照の配偶を求むることを得べしとの義。

後生大事

死後の冥福を得る爲に生前にすべき事を勉むるをいふ。

後生大事や金欲しや死でも命のある様に

金欲にして飽くことを知らざる者の義なり。湖上に魚を罾がず。

林下薪を賣らずと同義にして、湖上には魚多ければ、却つて魚を賣らずとの義なり。

後生願は、西枕。

人の死したる時、北むきの西枕に臥せしむ。

後生の種を蒔く。

死後の善果を得る爲に、現世によき事をなして其種を蒔き置くとの義。

胡椒の丸呑のやう。

事の状を辨へず、意義の深遠を知らずして、輕易に之を知りたる體を爲すに喩ふ。書を讀むに熟讀玩味せず義理を咀み碎かざるに喩ふ。胡椒は其味非常に辛き物なれ共、嚼み碎かすして丸ながら呑めば、其味の辛辣なるを知らざるなり。「朱子語類」「大凡讀書須是熟讀。熟讀了自精熟。精熟後理自見得。如喫菓子一般。劈頭方咬開。未見滋味。便喫了須是細嚼教爛。則滋味自出。方始識得道箇是甜是苦是甘是辛。始爲知味。」

小食ならうて家作れ

小食は小職にかけたるなり。小さな職業なりとも習ひ

覺えて家計を立てよといふやうの意と小食を爲し(節儉と衛生との二を兼ね)て家を保てとの意を兼ねたる如し。

小食は長生のしるし。

腹八合に醫者いらす(ハの部)に同じ。

御所内裏の事も蔭ではいふ。

かげでは御所内裏の事をもいふ(カの部)に出づ。

御所の御成は即速く半時。

運き喰。暇を費すをいふ。御所の御成はスハク言ひつゝ半時(今の一時間)を費すと成り、御所とは禁裏内裏のことなれ。後には借して公方大家以上にもいふ。

御成とは出で行くことの敬語。天皇の御出御をいひ。宮方攝家公方にもいふ。「尤草紙」「おそきもの、品々御所の御成は即速く半時。」

恭勢弓力馬に乗るまで。

よき運勢の至るまでとの義。

御前の日高に着いたやう。

後る、ならんと思ひし者の案外早かりしことにいふ。

御前とは醫女のことをさす。座頭の日高に着いたやう

ともいふ。

小僧と障子ははるほどよし。

ともいふ。

幼き僧、小童、丁稚、などは嚴しく教訓するがよし、障子は歴紙にて張るが新しくしてよしとの義なり。小僧をはるとは掌にて撃つことにて懲戒する義なり。障子をはるとは紙を張りつくる義なり撰ると張るとを通過せたるなり。

去年植ゑた柿の木。

成効せずとの謎。成らぬと柿のならぬとを通過せたる詞也成らぬといふ謎「京の町」「去年植ゑた柿の木ならぬ事仰せあれ、いやくならぬこそ、なるの本なれ。」

去年植ゑし柿の木、今年未だならぬ(結實せざること)ものなり、成らぬといふに通過せたるなり。

こそ〜三里。

こそ〜とは靜に音する義、私語するをいふ。小さき聲にて、私に語る所の事が遠くに聞ゆとの義なり。「文子」「附耳之語。流聞千里。」

子寶脛が細る。

子を多く生めば、其養育の爲に、資財を費すとの義。炬燵でふぐ汁。

炬燵でふぐ汁。

炬燵に入りて身を大切にしながら、危険なるふぐ汁を食ふとの義。

炬燵兵法。

燄水練杯(タの部)と同じ。

炬燵辨慶。

うち辨慶(ウの部)に同じ。

飯の頭を嫁に食はせ。

嫁をにくみていふことか。飯の頭は大きくして肉少く骨多し。

こちらの負さまでにはなす。

此方にて負けたる事は話さずとも、先方にて言ひふらすとの義。

凝つては思案に及ばず。

甚しく物事に凝り固まるときは、是非利害の思慮を失ふとの義なり。

こつとり五百目。

昔長崎へ唐船の來りし時、船頭等の言ひし謎にて、唐船へは、こつとり觸れても五百目の損なすると言ひしならん、未だ詳ならず。

小爪を拾ふ。

音句の上の些細なる醜態缺點を捕へて、せこましく抗言する義なり。

木葉武士。

木の葉の如く役にも立たぬ武士なりとの義。轉じて人を卑しむるにいふ。新聞杯に黄葉記者と云ふはこれより出づ。

木葉を嚼むやう。

無味なる喩。

碁で負けて將棋で勝つ。

彼事に失敗して、此事に勝利を得ること。

蝴蝶の夢。

此世の果敢なきことをいへるなり。「莊子」逍遙篇「莊周夢爲蝴蝶。栩栩然不知周之夢爲蝴蝶。蝴蝶之夢爲周」「堀川百首」「百とせの花に宿りて過してき此世はてふの夢にぞありける。」

蝴蝶の夢の百年目。

前の跡より出づ。

御殿極楽いて見て地獄。

評判の當にならぬ事。よいと聞きし事も、往いて實地に之れを親れば悪との義。

悉く書を信ずれば書なきに如かず。

書物を讀みても書中の言を過信する勿れとの義。是れは孟子の語に出でよるものなるが、孟子の所謂書は書籍の事を指したるが、後に一般の書を云ふに至れり。

今年に御馬來年御興。

甲斐の諺。今年より來年と順次に出世する義。

今年や南瓜の當り年。

醜婦の嫁する事多きをいふ。

琴柱に膠。

物事の變通を知らざる喩。琴を彈ずるには、琴柱を彼方

此方と處を選せば、調子も變りて面白けれども、若し之

を膠着にして、一處に置けば、緩急共立しきを失ひて、

少しも調子を變化することを得ず。「史記」兩相如傳、王

以名使括若膠柱而鼓琴耳。括徒能讀其父傳傳。

不知合變。「淮南子」齊俗訓、今握一君之法籍、以非

前代之俗。譬由膠柱而調琴。「揚子」先知篇、或曰以

往聖人之法。治將來。譬猶膠柱而鼓琴。

事成れば速に去れ。

「事をわれば速に去れ」の條に出づ。

事の洩るは禍の媒。

疎りし事の他に洩洩するは、失敗に陥り、禍を招くの

因となる者なりとの義。

辭多ければ品少し。

輕躁にして口數多き者は、威儀の品節少き者なりとの

義なり。「源氏河海抄」「辭多品少」「童子教」「謂多者

品少。老狗如吠友。「易」繫辭傳、吉人之辭寡。躁人

之辭多。「草根集」ほととぎす人も詞の多かるは品少し

とまたぞまうせぬ」

言葉に角がある。

音語温雅ならずして、圭角ありとの義。

言葉に花をさかす。

音語を麗麗にすること。「雲山雜記」「張祐苦吟。妻琴喚

之不響。以資祐。祐曰吾方口吻生花。豈恤汝輩。」

言葉に物は要ぬ。

言を發して、人に物事を問ひ試みる場合の如き、別に

金錢を要せず、いと容易きものなれば、宜しく問ひ試

みるべしとの義。

言葉の多きには品少し。

「ことば多ければ品少し」と同じ。

言葉の下に骨。

次の跡に同じ。

言葉の下に骨を銷す。

音語は巧に婉曲なれども、其實恐しき禍心をかくして

居るとの義。矢の中の劍(刃之部)ともいふ参照すべし。

言葉の先を折る。

人の音語をムサと打ちくづす義なり「小町踊」「さき折

るな人の詞の花さかり。」

言葉は國の手形。

音語は人の思想を通ずる機關にして、全國に通用する

ことと手形の如しとの義。

言葉は立居をわらはす。

物のいひ様によりて、其人の平生を窺知するに足ると

の義なり。

事は密を以て成る。

凡て物事周到隱密にして、抜目なく計り務むるときは、

成就する者なりとの義なり。「韓非子」既難篇「夫事以言葉は身の文。」

言葉は身の文。言葉の品よきは、其身の品よきを顯はすものにて、即ち身の文なりとなり。「左傳」僖公二十四年傳「介之推曰。言者身之文也。」國語定本「蘇氏曰言身之文也。」五斗米に腰を屈めぬ。

俸給の爲に漫に腰を屈めて、人に憐みを請はずとの義なり。「晉書」隱逸傳「陶潛爲彭澤令。郡遣督郵至縣。吏白應束帶見之。潛歎曰。吾不能爲五斗米折腰。拳拳事鄉里小人邪。即解印綬去縣。乃賦歸去來。」

子供が火なぶりをすると寢小便する。俗説なり解するに及ばず。子供喧嘩が親喧嘩。子供同士の喧嘩が遂に其親同士の喧嘩となる者なりとの義なり。親は各自に我子の方を負ふるを以て、子供喧嘩より親同士の衝突を起すなり。

子供正直。遠慮參酌なく、ありのまゝに言ふは子供の通性なり。子供だましのやう。

子供を欺くが如き淺はかなる動作をいふ。子供に神が付く。

子供に餓饑なし。子供は饑饉の憂を知らずとの義なり。子は親の貧をも知らず、食をられたれば、親は我身饑乏ても子を饑乏しめず。

小供には花。喝采を受けさす事を花を持たすと云ふ。小供の狂は泣き狂。大人の狂は死狂。小兒苦しきことあれば聲を立て、泣くと雖ども、其原因は單純なり。大人は苦しきことに逢うて始ると命限りに奮ひ働くとなり。

子供同士の喧嘩に親が出る。子供同士の喧嘩が其親をして關係せしむとなり。子供同士の喧嘩に親が出る。人立中立御醫者立。兩手の小指と小指、母指と母指と、を打合せて是を子供の喧嘩に親が出るといふ。然して自餘の人さし指、中指、薬指残らず立つ、是を人立中立(或)御醫者立といふ。子供喧嘩に親が出て、其末終に人が仲裁に立

子供も猫よりは優。子供も時として用に立つことあり、固より猫には優るとの義なり。子供も猫よりはましともいふ。

事畢れば速に去れ。凡そ何事にも、其用事の畢るときは、速に立ち去るべしとの義。功勞を立てし後には速に身を退けよとの義。李太白の詩集狹客行「事了拂衣去。深藏身與名。」

子ながなしても女に心ゆるすな。既に夫婦と爲りて、子を擧げし後にも、猶女には心をゆるすなとの義。(七人の子をなしても女に心ゆるすな)ともいふ。

子茄に年の寄りたるが如し。小くして黒くて、皺の寄りたる容貌を云ふ。碁に擬ては親の死目(死期)にも遣はれぬ。圍碁は目を争ふものなれば、親の死目といふに於いて、圍碁に精神を奪はるゝ者は、緊要の務、急用のことなも願みずとの義。碁打將棋さし親の死目にもあはぬといふは、十一月の寺社奉行役宅にての演技の時の事なり、轉じては本文の解のことくなれり。

つなどの噪ぎとなることを、指にて誤し諭すなり。子供の夜啼するには屋根の棟に鮑殻を挿せ。俗説。子供の枕頭へ犬張子を置くと能く生長つ。犬張子とは紙にて張り作りたる犬をいふ。犬の子は能く生長する故に言ひ出したる俗説なり。子供は風の子。小兒は風日にあはしむるがよし、暖衣すべからずとの義なり。「きのふは今日の物語」ある人申されけるはわらべを風の子と申すは、何と申したる事ぞと不審しければ、こざかしき者申すやう、フウフの間の子なれば、風(フウ)の子といふとこたへた。子供は教へ殺せ馬は飼ひ殺せ。子供は善く教訓すべし、馬は善く飼養すべしとの義なり。子供持つなり三人持て。子を育つるに、三人位が最も適度となすをいふ。

子に使はる、身こそつらけれ。

人は皆其子の爲に役々として、心を勞する故にいふ。
子に引かざる。

子の愛の爲に、他の決心したる事なども破る、如きをいふ。

粉糠三合持つたら養子に行くな。

男子出て、他家の姓を冒すは、獨立の趣旨に非ず、聊かにも其身に屬する資財あるものは、入贅養子となるべからずとの義。

粉糠三合持つたら入贅すな。

前の語に同じ。

粉糠よろこび。

雀の糞いろ、こび(スの部)の條に出づ。

五年や十年のくれるは夢の間。

歲月の過ぎ去ること速きにいふ。

此奥に目あり。

目の窪みたる人を指していふ。

木の下涼しけれど蟻のさしたに居らず。

一利一害の免れざる事をいふ。
木の葉天狗。

平凡にして人の下に驅使せらるゝ者をいふ。

此世は逆旅。

李太白の春夜宴桃李園圖序に「夫天地万物之逆旅。光陰百代之過客。後成卿の歌に「いづこなもたびならずや」思ふべきうき世ばかりのやどりこそきけ。

子は一世夫婦は二世主従は三世。

佛敎の靈魂輪廻説より出でし語。

恐い物見たし。

恐し、物を見んと欲するが人の常情なりとの義。

小坊主に天狗八人。

小坊主一人に八人の天狗が添ふとの意にて、何でも無き事に世話をやく者の多きにいふ。

牛蒡を多く食へば陽物立つ。

俗説。

琥珀塵を吸ふ穢を吸はず。

潔白にして塵を惡み、曲を受けずとの義。不正不義をにくむにいふ。「三國志」吳志虞翻傳「琥珀不取腐芥。磁石不受曲鍼。」琥珀塵を吸ふ穢を吸はず磁石針を吸ふ曲れるを吸はずとつけられていふ。

子は三界の首枷。

佛敎の既に欲界色界無色界の稱、これを苦本としこれを超悟して後に道を得たりとす。子が首枷となりて生死を脱離する能はずとの義。親が子に對する恩愛の情深きにいふ。

子は父の爲に隠す。

「論衡」子爲父隱。父爲子隱。直在其中。」

子は夫婦の間の鏡。

夫婦離縁せんとするやうの事ありとも、子に引がされて遂に連れ添ふ者なれば、子は兩方を離れざらしむる鏡の如き者なりとの義なり。

胡馬北風に嘶く。

人の故郷を慕ふに喩ふ。「文選」古詩云。胡馬嘶北風。越鳥巢南枝。是は胡馬は北狄の馬なれば北風を慕ひ、

越鳥は南國の禽なれば南枝に巢ふ、皆其本を忘れざる喩なり。

恭盤の足櫃子に象る。

恭盤の足は、くちなしに象るといふ。くちなしは口無にして助言を戒しむる義。

子はやい者は袴で越えても孕む。

「日本紀」易産腹者以禪胸體即便懷胎。跨げ越えても孕むといふ。

戀が重荷か重荷が戀か。

人が能く戀愛の爲に苦しむにいふ。

戀すれば安からぬ者。

「萬葉」十三の長歌「從古、言續、來口、戀爲者、不安物登、玉緒之、續而者雖云々」

小人島の鶴。

不調和の事。

戀に上下の差別なし。

身分の尊いものが、身分の卑しき者を戀ひ慕ひ、身分の卑しき者が、身分の尊い者を戀ひ慕ふ等、戀情には

身分の階級あらずとの義。
戀の歌。

人を戀ふよりして、遂に歌を詠むに至るとの義なり。盛
峰子の説に「人於色不能無思。其及思之。寤寐反
側不忘之。則發之。言爲和歌也。此是上古之朴質。
而感物所動者。所以爲自然之文也。云々。」
戀の重荷。

「非簡業平河内通」「是は古祖世乗物も戀の重荷にハイ
はいくく道をはやめて。」
鯉の漉上りを見ると運がよくなる。

俗賦、蛇の上るを見るに運がよくなるともいふ。
戀の山には孔子のたれ。

戀愛の爲には、孔子の如き人にも、身を誤るとの義。
孔子のたれとは孔子でものたれ死するとの事。
戀の病に藥なし。

戀の爲に病氣と爲りし者は、醫藥を以て治すべからず
との義なり。「職人盡歌合」「あはれ我が戀の病で藥な
きうき名ばかりを立ちものにして。」
戀の遺恨と食物の遺恨とは恐し。

色慾食慾の二は、人間の最大慾望なり故にいふ。而して
くひ、こい語呂の相似たるより、斯く懸けて言へるなり
戀は仕勝。

「末廣十二段」「戀は仕勝じや手ばしかう但一飛にゆか
つしやれ。」
戀は曲物。

戀の爲に心を失ひ、身を亡ぼすに至るものなるを以て、
戀は正しからぬ者なりとなり。「待賢門夜軍」「戀は曲
物の御心に任せぬ思ひわりなくも。」
五百八十年七回迄も生延させられやう。

愛立ない、とほうもない、といふやうな意。
五風十雨の日なみがやうて。

何事も好都合にゆくことをいふ(枝を鳴らさぬ御代)エ
の部参照すべし)
小舟に荷が過ぎたやう。

任とする所重きに過ぎたる意。
小舟の背をしらへ。

手廻し過ぎたる事。早計なる意。
夸父の目を退ふやう。

到底其かひのなき事を爲さんとする意。夸父は善く走
る人なり、日影を追ひて及ばず、遂に道に渴死せり
といふ。
小蕪と小娘。

油断がならぬとの義。又小娘を育つるに費用のいるこ
とをいふ。小娘は、費用がいらぬやうである。小袋
は、物が遣入らぬやうで、能く入るとなり。要ると入
るとを付けていへるなり。小娘と小蕪の條参照
御幣かつぎ。

神をいぢりまはすもの。迷信家の能く縁喜をいふもの
をいふ。
肥取に握り屍を嗅がせたやう。

其臭を感ぜずとの義。
肥取の握り屍。

臭い上に又臭いといふ意。事ある上に又同じ事を重ね
る義なり。
古木を移して枯を導くやう。

慰いに細工を加へて却て、之を害するをいふ。
五本の指で切るにも切られぬ。

兄弟は互に相扶助すべきものにして、見捨つべからざ
るものなりとの義。兄弟はもと同じ父母より生じたる

者にて、手一つに五本の指あるが如きに喩ふ。
五本の指は切つて捨てられぬ。

前の語の義に同じ。
氷と炭火とはいつしよにならぬ。

相合はざること、等類の物に非ずとの義、忠佞並び處
るべからざるが如き意。「楚辭」「氷炭不可相並」
今、「彼是不合、謂之參商、爾我相仇、如同氷炭。」
氷に鏝み水に盡く。

徒に機功を極む共、其功なしとの義なり。(勞して功な
きをいふ)氷に向ひ精を凝らして、巧に彫物を爲した
り共、氷は忽ち融け易き物なれば、徒に無益の業なるの
み。又水に對して心を碎き、繪圖を書きたり共、水は流
體にして、齒くに從ひ、消えゆく者なれば、畢竟徒勞た
るに過ぎ、故に喩ふ。「鹽鐵論」殊路籍「内無其質、而外
學其文。雖有賢師良友、若世脂鏝氷。費日損功。」
「山谷集」送主耶詩「鏝氷文章費工巧。」
氷に塗げた。

踏み留りも、取しまりもなきやうの事にいふ意。
氷は水より出で、水より寒し。

踏み留りも、取しまりもなきやうの事にいふ意。
氷は水より出で、水より寒し。

弟子が師の教を受け、却て師に優るに喩ふ。「茄子」勸學篇「青取於藍而青於藍、水氷爲之而寒於水。」

水を鋳め水に盡く。

（「水に鋳め水に盡く」に出づ）

こぼれ幸。

圖らざる幸福に逢ふ義。僥倖のことをいふ。

駒が勇めば花が散る。

咲いた櫻になぜこまつなぐ駒が勇めば花が散るといふ俗語より出づ。あまり得意になれば、失敗を招くとも云ふ教訓にも轉用す。

護摩の灰。

小盗の事。

胡麻磨る。

校習なる所爲ないふ。

護麻堂の本尊の雨に逢ふたやう。

解に及ばず。

小股取つても勝つたがほんぢや。

如何なる手段を取るとも勝利を占むるがつまり優るなりとの義。即ち結局の勝利を貴ぶこと。

困つた時の神だのみ。

平素神佛などに手を合せぬものも、進退維谷まる時に、俄に神佛に祈願するなふ。それより轉じて、平素は疎遠にして、相通せざる人の許へても、其の人の助けを請ふ爲に、叩頭依頼する類ないふ。司馬遷の屈原傳に「天者人之始也。父母者人之本也。人窮則反本。故勞苦倦極未嘗不呼天也。疾病慘憺未嘗不呼父母也」とあるは諺の意に同じ。

胡麻の遅蒔赤豆の速種。

胡麻は遅く蒔くをよしとし、赤豆は速きをよしとする

詔陽魚のはぎしり。

こまめは小魚なり。微力なる者が切齒扼腕すとも何の

芥溜に鶴。

物の不調和なる喩。芥溜は穢き所、鶴は潔きものなればなり。よからぬ群列中或はよからぬ所によきものゝあるないふ。貧乏の家に身分の貴き婦人の嫁し來る如きにもよくいふ。

小耳にはさむ。

小耳は小供の耳の事、小兒が他の話をきいてこれを耳朶に存すとの義。

言語道斷。

法華經より出づ。朱子陸象山の事を稱して、言語道斷、心思路絶といへり。言ふを要せずとの意。

香物に粉づき。

嘴んだりはれたりするといふ謎。香物は嘴むもの粉づきははれて食ふもの。

根性に似せて家を作る。

其身に應じ其分相應の事を替むとの義（蟹は甲に似せて穴を掘るハカの部分に同じ就きて見るべし）

根性の悪い者が擦ると芥がさく。

からしをすり下すに、心だての悪しき者がすれば、其辛辣なること頗る甚しといふ俗説。又おろし大根が辛

小娘と小張は油断がならぬ。

小張は子宮にかけ、何時子を孕むも知れずといふならん。小娘が能く親の知らぬ間に男子と情を通ずることある故にいふ。

小娘と小張は油断がならぬ。

小張は子宮にかけ、何時子を孕むも知れずといふならん。小娘が能く親の知らぬ間に男子と情を通ずることある故にいふ。

小娘と小張は油断がならぬ。

小張は子宮にかけ、何時子を孕むも知れずといふならん。小娘が能く親の知らぬ間に男子と情を通ずることある故にいふ。

小娘と茶袋。

すぐ色づくとの意。

小娘のかんざん老人の夜ありき。

物の反對なることをいふ。

小娘の呉服屋へ行きしやう。

目うつりのする喩。

蒟蒻で岩かく。

到底爲し遂ぐる能はずとの義。（無効なるないふ）

蒟蒻の市に立つ如し。

恐怖しながら群集中にある事。

蒟蒻の木のぼり。

蒟蒻はぶる／＼頭ひ居るものなり、蒟蒻の木のぼりとはふるひあがるといふ謎にして戦慄する義。

蒟蒻の楯つきたるやう。

頼むに足らずとの義。畢竟無効なりとの義。

蒟蒻の幽霊のやう。

瘦せたる人のアル／＼頭ひ居る形容。

蒟蒻は小供に蟲の毒。

蒟蒻は不消化物なれば、小供の食用に害あり、故に古來よりいひ傳へたり。

蒟蒻を馬に付けたやう。

ふりくする事。

蒟蒻を食ふと腹の砂を拂ふ。

俗説。蒟蒻は罌丸の砂拂と云ふ方適當なり。ふみてつくる物ゆゑにいふ。食ふことによりなせるは、あやまりなり。

紺は藍より出で、藍より濃い。

〔昔は藍より出で、藍より青し〕(アの部)に出づ

昆布を三年食へば癩落つる。

俗説。權兵衛が種蒔きや鴉が穿くる。

人の肝を發き出すことを鴉が權兵衛の蒔きし種を掘り出して啄むに喩ふ。功のなき事にもいふ。又た事を成し行くあとより破壊せらるゝなもいふ。

紺屋の明後日。

約束したる期日の外ること。(當にならぬこと)のびのびすること等をいふ。時を期して約束することの外れたるを紺屋の明後日でありきといひ、當にならぬを紺屋の明後日ならんといふ。染物屋が、染物を仕上げる期日を忘れては、明後日迄に間違なく仕上げますといひて、又其時期に後れては、更に又明後日までといふが常なり。故に此諺出でしなり「吾吟我集」「つれもなき人はこんやのあすあさてあひそめん日をのびく。いふ」細川狂歌集「こひころもそむる紺屋の片思ひあさてくといふばかりにて。」

紺屋の白袴

人の爲にして吾爲にせざる喩。「説苑」「良醫之子多死於病。良巫之子多死於鬼。」「骨董集」「山の井巻四にわらにふる雪や紺がき白袴といふ句あり。又崑山集にも此句をのせて貞徳の句とあれば古き諺なり、當時の紺屋は常に袴をはきたる故に此諺ありしならむ。いつでも出来ると思ひて遂に爲さずやむ事なもいふ。

紺屋の地震

相濟まず(藍澄まず)といふ謎にして、氣之海とか申

金輪際の玉も拾へば盡る。

如何に多くあるものにて、之を取りて止まされば終には盡くるに至るとなり。金輪際は地のはなのことなり。君父の仇借金輪際ゆるされず(クの部)の條参照。

米が上ると家賃が下る。

米價騰貴するに従ひ世上一般に不景氣となり従つて家賃が安くなるをいふ。

米搗はつたのやう。

常に叩頭する喩。米搗はつたの尻の方を叩ければ、類に叩頭するなり。

米櫃乾く。

生計の窮乏するをいふ。我國は米を食する國なるを以て渾て生計の基礎となるものは米なり。米櫃乾くは米の乏しくなる義にして生計の難ならざるを指すなり。

御免あれ兵庫の月に秋の雲。

此諺は御免あれ兵庫の者といふより轉じたるなり。

御免あれ兵庫の者。

昔平相國清盛兵庫の築島を作られし時に、人柱として行

路の人を捕へて海に入れて築立しめ、兵庫の者をば免されたり。よりに他國のもの、詐りて兵庫なりといひしとなり、因て此諺あり。

米屋と質屋は三代つゝかず。

俗説なり。其の儲かり過ぎて、冥利あしきないふなり。

米屋は三度目に變ろ。

だんくといふ品を賣る故なり。

米を粗末にすると思が悪くなる。

俗説。米を取扱ふことを粗末にせざらしめんが爲にいふ。

米をなまて噛むと口臭くなる。

俗説。

五目中手の十三手。

圓碁の辭。

子持になると瘡がものをいふ。

言語容易に口利かぬ人も、子を持つやうになれば、能くものをいふやうになるとの義。

子持の腹には馬のくつも這入る。

乳兒ある婦人能く大食するものなりとの義。

子持の腹に糞をこめ。

前の諺に同じ。

子持の腹へ馬のくつ。

前の諺に同じ。

子持女は荷附馬でも通る。

前とおなじ。

子持を雇ふより跋を雇へ。

子持の人を雇ふより跋を雇ふ方却て多く働きを爲し得との義なり。子持の者は其子を顧みる爲に労働を妨げらるゝこと多き故にいふ。

菰の上にも三年。

出産の費多きないふ義なり。

菰の寝衣や繩の帯。

粗衣の爲体ないふ。

御門徒宗の御持佛様を見るやう。

びかくてらくきらびやひなるをいふ。

粉屋の盗人のやう。

粉装の形容。

小屋より火を出す。

小屋からでも火事の起る事ありとの意。小事も忽にすれば、大なる禍を惹き起すべしとの意あり。

小指の爪を延ばすと言憶がよくなる。

俗説。小指の爪の長きをかくいふは長爪梵士の事よりいふ。

子故に泣けど子が無うて泣く人はなし。

人は其子の悪しき爲に患へ、或は其子の疾病を憂ふる筈、子の爲に泣くやうの苦みがあれども、子の無き人はさることなし。

子故の闇に迷ふ。

人の親たるもの、子の愛情に牽かされて、其愛に溺る時は、子の悪行あるを知らず其明を蔽はれて、宛ら闇の夜に方角に迷へるが如しとの義。『後撰集』雜歌

「人のおやの心は闇にあられども子を思ふ道に迷ひぬるかな」『大學』「諺有之曰人莫不知其子之惡。」

子よりも孫が可愛。

子の愛よりも孫の愛が特別なりとの義。

紙燃を上手に燃るものは良妻を持つ。

俗説。

御利生のなき神には參詣者少なし。

人みな利益の在る所に集り、權勢の下に奔るものにして、權勢の衰へたる所に赴かざるをいふ。

五兩で帯を買うて三兩でくける。

其主たる物の費用に伴ひて、之に附帯する費用の多きないふ。

これに懲りよ道西坊。

道西坊とは別に意義なし。唯之れに懲りよといふ事。

ころばぬ前の杖。

凡そ何事にても、前以て用意し、其始めに注意すれば後に轉蹶の患なかるべし、故に失敗せざる前に、用心すること、蹶き倒れざる先に、豫て杖を用意するが知くなるべしとの義なり。『潜夫論』「養壽之士。先病服藥。治也之君。先亂任賢。」「明心寶鑑」存心篇「有錢常記無錢日。安樂常思病患時。」とあるは諺の意に同じ。

轉んだ所で金を拾つたやう。

悲喜交々至ると云ふ事。

轉んでも徒手では起きぬ。

こり—これ—ころ—こら—こら

二一一

こけても徒手では起きぬの條に出づ。

衣の袖を裏がへして着て寐れば思ふ人に夢中に逢ふ。

「古今集」いとせめて戀しき時はねば玉の夜の衣をひへしてぞぬる。『萬葉集』十一「吾妹兒爾戀而爲便無。白細布之。袖反之者。夢所見也。」「吾背子我。袖反夜之。夢有之。眞毛君爾。如相有。」「十二「白細布之袖折反戀者香妹之容儀乃。夢三四三湯流。」

衣の紐の自から解くるは人に戀はるゝしるし。

「萬葉集」十一「眉根揺。鼻火紐解。待入方。何時毛將見。戀來吾乎。」「二十「伊波乃伊毛呂。和乎之乃布良之。麻由須比爾。由須比之比毛之登久良久毛倍盛。」

衣を解いて火を包む。

自ら災を惹く義。

聲なくて人を呼ぶ。

徳ある人は、言語を以て人をよびいたさずとも、人自ら其徳を慕ひ來らんこと、猶美なる花の下には、自ら人の

寄り集ふ如しとの義。「史記」桃李不言。下自成蹊。子を知るは父に如かず。

人の父たる者、我子の動止進退などを日夜親しく目撃する所なれば、其品質個性を知り、其適當の業を擇ぶ等は、到底他人の及ぶ所にあらずとの義。「左傳」眼公十一年傳「申無字曰。擇于莫如父。擇于莫如君。」管子「知子莫如父。知臣莫如君。」子を知るは親に如かずとの義。

子を捨つる藪あれど身を捨つる藪なし。藪は養父の轉ならん。子を捨つるとは娘を嫁に男子を養子にやる事ないひ、娘や息子は拾ひ上げ養ひ呉る、養父はあらんも年老いたる親をば世話し呉る、人なしとの義。又人の最も愛する所の者は子なり、されど其子を捨つることもあるが、我身をば捨て難しとの義なり。子よりは身を大切とする義。「金葉集」身にまさる者なかりけりみどり子はやらんかたなく悲しけれども。」

子を一人育つるとば、は一升食ふ。乳兒を持つ乳母杯の大食するをいふ。子を視るは親に如かず。

子を知るは父に如かずの條に出づ。子を以つて知る親の恩。

人は各自子を持ちて親となれる時に至り、始めて己が親達の養育せられし苦勞を、實地に經驗して、其愛の深きと、其恩の大なるを知り得べしとの義。「傳燈錄」養子方知父慈。明心寶鑑「孝行篇」養子方知父母恩。立身方知人辛苦。「徒然草」孝養の心なきものも子もちてこそ親のこころさしは思ひ知るなれ。」子を待つては七十五度泣く。子を育てあぐるに色々の心配苦勞あるをいふ。

40

才あれども用ゐざれば愚人の如し。才能抱負ありと雖ども、實務に之を用ゐて其伎倆を施さしむるに非ざれば、用を爲さずとの義なり。塞翁が馬。世の吉凶禍福、相輪廻して循環すること、すべて塞翁

が馬を失ひし故事に同じき者なれば、喜びも亦強ちに喜ぶに足らず、悲も亦た強ちに悲むに足らずとの義なり。

「淮南子」人間訓「夫禍福之轉而相生。其變難見也。近塞上之人。有善術者。馬無故亡而入胡。人皆用之。其父曰此何遽不爲福乎。居數月。其馬將胡駿馬而歸。人皆賀之。其父曰。此何遽不能爲福乎。家畜其馬。其子好騎。墮而折其髀。人皆用之。其父曰。此何遽不爲福乎。居一年。胡人大入塞。丁壯者引絃而戰。近塞之人。死者十九。此獨以之敵之故。父子相保。とあり。此故事より。總て吉凶禍福の運命が、循環し來るを塞翁が馬とはいひそめしなり。元暉機禪師寄徑山虛谷禪師詩。人間萬事塞翁馬。推枕軒中聽雨眠。」

細工は流々成効を御覽じろ。

何事を爲すにも 其方法は種々あるものなれば、漫に其方法をあげつらふことなく、結果を見て品評すべしとの義なり。

細工貧乏人寶。

細工するもの利己な利せざるをいふ。用巧貧乏村寶と

さいふ。

西國で百萬石も取るやうな顔。尊大倨傲の容體。西の國で百萬石もといつて居る(二の部)参照。最後の一念にて生をひく。「吉野郡女楠」そもく最後の一念に由りて、善惡の生くといへり。

財逆つて入る者は逆つて出づ。惡縁身に、つかず。(アの部)の條に出づ。才子多病。

才ある者多く病にかゝるとなり。在所住居の喜三次。

土佐の諺。城下を離れ在郷に居れば氣散じなりといふ義なり。氣散じを人の名の喜三次にいひなせるなり。在所育ちの麥飯。田舎に生長したる者は、多くは麥飯を食ふに慣れ居るものなりとの義なり。

さいする佛鼻をくぐ。

さいとは添の意にして、物の少しく或缺は磨滅したるを添へ補ふ事に云ふ。されば如何に渴仰せらるゝ佛體と雖もこれを修復するには、其の鼻を削り落すを憚らずとの意なるか、未だ詳ならず。

槌で蝸牛を撃つたやう。

槌で庭掃くやう。

力めて追従することをいふ。(槌で庭を掃く、ツの部の條に出づ)

槌で猫を撃つたやう。

猫の尻をさいづちで撃つやう(ネの部)を見るべし。

采配を振る。

衆人を指揮する義なり。

財寶より子寶。

財寶より子を貸しとすといふこと。千の倉より千は寶(セの部)の條を見るべし。

財布の尻を押へる。

財布を掌握する義なり。

財布の尻をたたく。

囊中 錢の空しくなりたる義なり。
財布の尻を結ぶ。

浪費せず節儉を守れとの義。

財布の紐を首にかけんよりは、心にかけてよ。

財布を首にかけたまゝにては、盗み拘らるゝ虞もあれば、用心怠るなかれとの義。又轉じて漫に金錢を費さず、能く節儉に注意すべしとの義。

財を積む千萬、薄枝の身に在るに如かず。

多く財を積み蓄へたるよりは、身に技藝を有するが優れりとの義なり。「顔氏家訓」「積財千萬不如薄技在身」より出づ。

さう甘くはいかの罌丸。

さやうに甘くはいかぬものなりとの義。いかぬといふにかけて、いかの罌丸といひなせるなり。

糟糠の妻は堂より下さず。

貧困の時より、連れ添ひたる妻を棄てざる義。(共に貧苦の中より苦勞しあひたる妻は、後に富貴に至りて結構に安樂ならしめて、見捨てざれといふことなり。堂

とは奥の座敷のこと。「後漢書」「貧賤之友、不可忘、糟糠之妻、不可下堂。」

霜下の花。

萎れて勢のなき喩。

さうか門院の別當。

圓慧の師。皇嘉門院別當にかけたるしやれなり。

雑巾で顔を拭くと、愛嬌が出る。

俗説。

雑巾で顔を拭くと人目せず。

人目とは小兒の他人を見て恐れ泣くをいふ。

桑田變じて海となる。

世事の變遷多きをいふ。昨日の滄海は今日の桑田となり、今日の桑田變じて明日の滄海となるが如きなり。

さうは問屋で卸さぬ。

請求通りに應ぜざる義なり。卸賣の商店に於て購買する者に、さう請求通り安直に卸し賣らずといふ義なり。りたるなり。

相馬御殿。

大風の荒涼たるをいふ。葬禮過ぎて、醫者はなし。

死したる人を葬り畢りたる後に、其人の蘇生すべくもあらぬに、猶葬禮の濟みたる後に至りて、早く彼の醫者を迎ふべかりしになど、返らぬ愚痴をこぼすをいふ。「碧眼集」第六十四則頌下着語「喪者背後懸藥袋」爭論は一方の堪忍に畢る。

爭論起らんとするにても、一方だに堪忍すれば必ず無事に畢るべしとの義なり。「中阿含經」偈々「若以靜止靜。至竟不見止。惟忍能止靜。是法真尊貴。」晋書「朱何傳」兩敵共對、惟當忍之。彼不能忍、我能忍之。是以勝耳。

さかしき者は腹膨れ、懈怠の者は面膨れ。

伶俐にして能く働くものは食を得て満足し、懈怠者は得る所なき結果不平の態度ありとなり。

杯の中にアト蟲が湧く。

杯に酒をつがれしまゝ、久しく開きて、飲みほさるる人を揶揄する語なり。早く飲みほせとの義なり。南部の配つき、津輕の手長、と云ふ事もあり。

逆蜻蛉のやう。

低頭平身するに喩ふ。

肴籠や豆腐箱念掛くる薦もある。

何か利得を占めんと油断なく窺ひ居る者に喩ふ。

肴は上臈にやかせよ、餅は下衆に焼かせよ。

肴は物しづかにやくをよしとし、餅はたびくかへし

くやくを佳とするをいふ。

境に入ては禁を問へ。

他の國境に入れば、先其の國禁の如何を問ふべしとの

義。孟子の語に出づ。

相摸女に播磨鍋。

相摸女の尻はやきをいふ。播磨鍋は薄手に出来て尻が

早し。故にいふ也。

相摸女に陰莖見すな。

相摸女は多情なる故にいふ。

盛んなる者は衰ふ。

盛者必衰(セの部の條に出づ)。

酒屋へ三里豆腐屋へ二里。

土地僻陋にして、頗る不便なる所を指す。

下り蜘蛛縁喜よし。

下り蜘蛛なれば人が来るを見よ。

下り蜘蛛なれば人が来る。

蜘蛛が網を垂れて、下り来るは人の来る前兆なりとい

ふ古代よりの俗説なり。衣通姫の歌に「我背子がくへ

き背なり、さゝがにの、くものふるまひかれてしるし

も」「垂穂録」(採蘭雜誌)に昔有母于離別每見瑞

蛸無絲著衣則曰子必至也」

盛りの花を野で暮らす。

妙齡の女子が、人目に觸れぬ田舎に生長する等に喩ふ。

善き器量ありて、人に知られざる義。

驚足をつかふ。

驚の歩む如く、ぬき足、さし足して、徐歩するをいふ。

先勝は糞勝。

勝負事をして、最初勝つは未だ眞の勝にあらず、後の

勝が實しとの義。初勝は糞勝ともいふ。

驚か鱒を踏むやう。

驚は靜に歩みて鱒を踏みこれを捕ふるなり。靜に拔足する形容。

驚にせられた。

閉門せられたといふ義なり。驚の孤立したる如くなり

たるに喩ふ。

驚の深入。

孤立して敵地に深く入りたる義なり。

向きはさほどに思はぬ。

先方の人が、己の思ふほどに思はずとの義。

驚は起つとて、跡を濁さず。

とぶ鳥いあつた濁さず(トの部)に出づ。

先んずれば人を制す。

人に先だちて事を處理すれば、人を拘束する事を得とな

り。「史記」項羽本記「會稽守殷通謂項梁曰。江西皆反

此亦天亡之秦之時也。吾聞先則制人。後則爲人所制。

驚を鴉といふやう。

脆辯を弄して、理を非に、非を理にまげていひなすを

いふ。驚は白く、鴉は黒し。即ち白い者を黒いといふ

櫻の木を砕いて見ても花は無し。

解剖しても見ると能はざる無形の者を指す。道歌に「年

毎に咲くや吉野の山櫻木をわりて見よ花のありかた」

櫻の花を柳の枝にさかせて、梅が香を持た

せし。

すべての美を、一時に併せ得んとするをいふ。櫻は其

花辦が美に、柳は其枝根がやさしく、梅は其清香の幽

なる各長所あり。

櫻は花にあらはるゝ。

櫻は其花の未だ開かざる時、雜木と相伍すといへど

も隨陽三月花時に至りては、人其美を賞して已まず、

是れ其の花にあらはるゝ所以、人の玉石相混濁すれど

も、能あるもの途に世にあらはるゝをいふ。「金葉集」

「深山木のそのこずゑとも見えざりし櫻は花にあらはれ

にけり」

酒極つて亂となる。

「二谷嫩軍記」酒極るときは亂る、樂極るときは悲し

むとや。酒と朝寐は貧乏の捷徑。

飯酒に耽ると、朝晏起するとは、其家を貧にする尤も
ちみちなりとの義。

酒と女と賭博とはは錠卸せよ。

酒、色、賭博の三は嚴禁すべしとの義。

酒なくて何の己が櫻かな

酒なくては櫻を見てもつまらぬとの義。

酒に酔うた時、蘇鐵に凭るゝと醒る。

蘇鐵は酒好むものなり故にいふ。

酒に酔うて、水に這入る者でなし。

酔ひて後、水に游泳する者は、往々死を招くことあり
故にいふ。

酒に酔うて泥となる。

東國の語に、酒に酔ひたるものを泥とよぶ。大酔した
る者は、實に煩く醜汚に堪へぬものなれば泥といふに
か。泥酔などいふ熟字もあり。「李太白詩集」「三百六
十日、日日醉如泥」

酒飲は半人足。

酒を飲む者は半人分の仕事しか出来ぬとの義。

酒は憂をはらふ玉帯。

飲酒家の常語なり。酒の憂を掃ふことは、帯を以て塵
を掃くが如くなればとて、釋語には掃憂帯といへり。
即ち酒の名とす。高駢が詩には、「漁竿消日酒消愁。
一醉忘情萬事休」とありまた東方朔が傳にも銷憂者
莫若酒とあり。また古語にも、酒は是愁を治するの
薬。昔は是れむりを引くの媒とあり。また古樂府には

「何以忘憂、唯有杜康」とあり。

酒は煖、肴は刺身、酌は端婦。

酒は煖を良とし、魚は刺身にするを良とす、酌はわか
き酌婦にさすが良しとなり。

酒は酒屋に、茶は茶屋に。

皆其専門とする所に就いて求むべしとなり。

酒は三厭にかざる。

酒を少量に飲むべしとなり。三厭以上は甘からず、三
んまでがうまきなり。

酒は諸道の邪魔。

酒を飲む者は萬事を放擲にするを常とす。故にいふ。

酒は知己に逢うて飲むべし。

酒を飲むに、善く氣心の知り合うたる親しき友と相對
して獻酬するが愉快なりとの義。「處堂錄」「酒逢知己
已飲。詩向會人吟」

酒は微醉。

花は半開(ハ)の部の條に出づ。

酒は百毒の長。

酒の毒は、多くの有毒物中、尤も酷しとの義。「涅槃
經」「酒爲不善諸惡之根本、若能除斷則遠衆罪。」

酒は百藥の長。

酒は適度に之を飲めば、血液の循環を促し、精神を壯
快にする等、實に諸種の藥を飲むより優る者なりとの
義。「前漢書」食貨志、夫鹽食肴之將、酒百藥之長。

酒は本心をあらはす。

平素は謹み居りて、心に思ふことも、深く秘して外
にあらはさざる者も、酒機嫌に乗じて、之をあらはす
に至る者なりとの義。「檀薺抄」「龍眼示本體。人醉顯
本心。」

酒醉本性は遠はず。

酒に酔へば前後を忘却し、殆ど狂人の如く亂暴するに
至れども、全く其本心を失ふことなしとの義。

酒醉本性を忘れず。

前の語に同じ。

酒盛つて尻切らる。

酒を買つて尻を切られるやうと言ふに同じ。

酒盛つて尻ふまれた。

「菅原申」「エ、どんな所へ給仕に来て、酒盛つて尻ふ
まれたと袴の腰の痛い顔。」

酒を買つて尻を切られるやう。

阿諛迎合さまとくと、心を盡せども、結句機嫌を損ふ
種となるをいふ。酒を買つて飲ましめ却て酒によりて
事を度にし大に心を損くものなどあるこれ程勘定に合
はぬ話はなしとの義。

酒を飲むとも飲するゝな。

酒を適度に飲むべし亂に及ぶなかれとの戒。

雑喉の魚交り。

ざことは小き魚の種々雜れるものをいふ。人間の或國

體に微力なるものが、雜り居る喩。微弱ながら猶其群を離れざる義。

笹葉へ火が付いたやう。

多辯なる形容。

サ三十薩埵。

薩埵を笹に作るをいふ。

座敷へ狗を上げたやう。

迷惑がるのみにて能無し。

ヒ加減が巧い。

鹽梅をよくする義。醫者が藥を調合するに、ヒを用ゐるより起りたるなり。

坐して食へば山も空し。

布も働かずして坐食するときは、如何なる富を有すとも遂に空しく費消し盡くるに至るべしとの義。

ヒの先より、口の先。

庸醫の治術に拙にして、便佞に巧なるをいふ。

ヒの廻し工合。

手加減によりて如何やうにもなるとの喩。ヒを投げる。

物事成功の望みなくして、遂に之を放擲するをいふ。醫者が病人を治する能はずして七を投ぐるといふより起る。

させば傘。

傘を使用すれば、乾すべしとの義。

誘はれ易きは女の水性。

女は其性分誘惑にかかり易しとなり、水性といふは淨かるゝことないふ。小野小町歌に「わびぬれば身は淨草の根をたえてさそふ水あらばいなんとぞ思ふ」。

砂糖の無い葛餅のやう。

水臭いとか、味が無いとかいふ義。相手なしにては事うまくゆかずとの義。

砂糖船に甘草の帆柱。

至極甘しといふ義。

砂糖餅に羊羹。

前に同じ。

砂糖屋の前を駈けて通つたやう。

砂糖の利がざるをいふ。

沙汰のかぎり。

以ての外的事なりといふ義。

薩摩飛脚。

肥後の加藤と、薩の島津と、不和、肥の使、薩に往いて遂に歸來せず故に此語あり。

座頭行儀。

饌菓などを包みて、かへるをいふ。

座頭根性。

猜疑心深き者をいふ。座頭とは、もと盲人の髪を剃りて平家琵琶等の歌曲をなし、又按摩鍼治を業とする者の稱なるを、一般に盲人を指していふに至れり。

座頭に沸湯をわびせたやう。

盲人猜疑心の多き者なり故にいふ。

座頭の足駄に、物のはさまりたるやう。

まごつて途方に暮れたるをいふ。

座頭の索麩を食ふやう。

見ぐるしき喩。

座頭の杖を失ふやう。

其馮依する所を失ふ義。「俗語録」別居惘然如盲者之失杖。

座頭の寝入ると、月夜の明るは人知らず。

盲人は、常に目を閉ぢ居りて、寢る時特に瞑するものに非ず。又月夜は明るきま、曉となるものにて月光の明と曉且の明と、判然區別つかず故にいふ。

座頭の日高に着いたやう。

御前の日高に着いたやう(コ)の部の條に出づ。

座頭の晝寝もあてく。

ぬすびとのひるいあてがある(メ)の部の條に出づ。

座頭の夜這杖をつく。

「嬉遊笑覽」江戸町名俳諧に、座頭は杖につく竹屋町、夜這には、油町なる火をしめし、今も大津繪に裸の座

頭は牛七匹ほどすねる。

頭つけるは、此諺なり。

盲者の狗屎なる、とわく我意を報りて、くれくする者なり、牛も亦狗屎なる動物なり。故に喩ふ。座頭も京へのぼる。

身分の卑しき者が、案外に出世するに喩ふ。座頭を川中で刺ぐ。

無力なる者を苦しむる義。制し易き義。惨酷なる所業なりとの義。此他猶數義あり推知すべし。廓の金につまるとは習。

放蕩して金に差支ふるが常なりとの義。里腹三日。

里歸りして、食事するは非常にうまきものにて、食進むこと多しといふ義なり。實家にて食事するは、能く進むを以て、三日間食はずとも凌ぎ得といふほどの意也。里歸とは嫁したる婦人、嫁して後始めて己が父母の家に歸來するをいふ。又丁稚小僧等、奉公人が、主人より少しの暇を得て、其實家に歸るをいふ。悟らうと思ふも迷。

悟りを得たしと願ふは、猶迷たるを免れず、眞の悟道

は無意無心にて、得らるゝなりといふほどの意。悟る者は稀にして、知りたる人は多し。

理を知るばかりの人は、多くして大悟徹底したる人は少しとの義。揣摩つたことをいふ。

揣摩憶測の言を爲すとの義。讀肢圓坐。

圓座とは藁にて造れる坐蒲團の如きもの。噪海人。

古代の諺にして、かしがましく罵りさわぐ者を嘲りいひし如し。「日本書紀」應神記「處々海人訕味、則遣阿曇連祖大濱宿禰。平其訕味。因爲海人之宰。故俗人諺曰「佐國阿摩者其是緣也」。鯖の生腐。

鯖は既に腐り居りても、外見猶生鮮なるが如し。故にいふ。さばらぬ神に祟りなし。何事にて、己之に關係することなければ、害を受く

ることなし、漫に人の事に手出しすな、係累を避くべしとの義。一び拜せし神ならば崇りあるべけれども、拜せぬ神ならば崇らるゝことなしとの意に偲る。「既苑」「非所言則勿言。而以避其患。非所爲則勿爲。而以避其危。」とあるは諺の意に同じ。

觸らばひやせ。觸れたならば、切つてしまへといふ義。ひやすとは刀にて斬ることをいふ。

觸り三百。商品などに手を觸るれば三百文價值を落すとの義なり「毛吹草」「落す葉やさばり三百木々の風」。

觸るに煩惱。觸接する爲に煩惱起るといふ義なり。「吾吟我集」「かまはしな、是もさばるに煩惱の犬ははげしく人に吠え

つぐ」

錆に腐らせんより砥いで減らせ。物事其儘に放置せんよりは、適當の法を以て之を處置すべしとの義。刃物を放置せば、錆を生ずるに至る。故に之を砥ぎて、用に供すべしとなり。

さば さば さば さば

さば さば さば さば

さば さば さば さば

さまくいりの武邊話。己の不得手なることを巧者らしく喋々と語り、或は己失敗しながら得意らしく吹聴すること。さまくいりと

は城中より亡命する者ないふ。亡命する如き卑怯の徒が、武邊の話は片腹いたしとなり。さまは狭間にて矢

さま杯云ふ。寒い時に穢き物なし。飢ゑたる時に味無きものなし。(ウの部)を見るべし。

山雨來らんと欲して風樓に満つ。事ある前に必ず其徴候のあるをいふ。

三界の火宅四苦の露地。三界安き事なし猶火宅の如し。衆苦充滿す、甚だ怖畏すべし。といふ法華經の句より出づ。現世は苦しとの義。

三界は水の上。世の頼まれざる事、佛教の語より來る。

三かくの法を行ふ。三かくとは、事をかく、耻をかく、義理を缺く、ないふ或は又義理をかく、人情をかく、法をかくといふ。

さば さば さば さば

さば さば さば さば

慳吝暴富の所行なりとの義。

三月下り風。

三月の下り風といふ。就きて見るべし。

三月庭訓公治長。

是は物事に倦きやすく、或は中途に止むることをいふ。庭訓往來を手習ふに、三月のあたりにて止め、論語を學ぶは公治長の篇にて止め、全篇を終ふるに至らずとの意にとる。隈公左傳、桐壺源氏と同意。

三月庭訓須磨源氏。

前の諺に同じ。須磨源氏とは、源氏物語を讀む者が須磨の巻あたりで止むるが常なり故にいふ。

三月庭訓やの加減。

前の諺に同じ。やの加減とは止めの加減といふことにて止むる義なり。

三月のかづら雪。

三月三日には尙ほ雪の降るあり。

三月の下り風。

江戸にて正月より二月まで風を説ふ、三月に至つて紙落あがらざる故にいふ。

三月の花曇り。

陰曆三月花の盛りなる頃、曇天多し。故にいふ。

三月平目犬も喰はぬ。

三月に至れば、平目といふ魚の味、頗るまづくなる故にいふ。

三ヶ日晴天續けば豊年。

農家にて、舊正月一日に晴天なれば、早稲によしといひ、二日晴天なれば、中稲によしといひ、三日晴天なれば晩稲によしといひなし、三ヶ日すべて晴天つゞけば早中晩みなよくして、豊年なりとするなり。

三月綿を蒔ぬ馬鹿四月綿を蒔く馬鹿。

信濃の諺。綿の蒔三月にある時は出来よく、四月はわるし故にいふ。

三桂あつて勝たぬことなし。

將基の語。

懺悔は罪の半を滅す。

己が身に犯したる過去の罪惡を述べて、悔い改むる者は其罪を半滅せらるとの義。「言海」懺悔、懺は梵語懺摩

の略悔過と譯す重言なり。懺悔話をすれば三年の罪が亡びる。

前の諺に同じ。

三五の十八。

心中にて事をばかり、其あやまれるを知らずして自ら得たりとするを嘲りていふ。乗算九九の喚聲三五は十五なり。無茶になることをいふ。三五の十八ばかりと逸つて云云。

三歳の翁あり百歳の童子あり。

幼年にして老成人の如きあり、老人にして幼年の如きありとの義。

寒さ小便ひたるさわくび。

寒き爲に小便を催し、空腹の爲に欠伸を生ずるをいふ。

産三兩に子五兩。

出産の費用は三兩、子の産れた上は更に五兩を要すとの義。

産三兩に死五兩。

人生るゝ時の費用よりは、死する時の費用を要するゝと多し故にいふ。

三十歳の尻据り。

三十歳になれば思慮定まりて放蕩などの亂行も自然に止むとの義。

三十九じやもの花じやもの。

三十九と四十とは僅か一年の相違なれども、四十といへば如何にも老年に聞え、三十代といへばまたわかく聞ゆ、故に三十九じやものまだ年が若いぞといふ義に用ふ。

三十振袖、四十島田。

婦人年老いて猶若化粧するをいふ。

三十六計逃るに如かず。

にぐるが上計なりとの義。「唐語彙要」三十六計。走

爲上計。

三十六計を出す。

にげ出すこと。前の諺を見るべし。

三尺退つて猿ねむり。

飯を焚くの法。

三舎を避くる。

三日路程違けて宿るとの義にて、當るべからざるを云ふ。辟易すること、數歩を人に譲ることにいふ。

三疎み。交。相制するをいふ。蛙は蛇を畏れ、蛇は蛙を畏れ、又昔時妾は殿様を恐れ、殿様は國家老を畏れ、國家老は妾を畏れたり、是も三すくみなり。「關尹子」「蜘蛛食蛇。蛇食蛙。蛙食蜘蛛。」

三寸息絶ゆれば萬事休す。人死すれば萬事廢せざるべからず。三寸息絶ゆるとは死することをいふ。

三寸狙見抜くやうな人。炯眼なる人を指す。

山椒胡椒は小うても辛す。次の條の解を見よ。

山椒小粒でもひりりと辛す。軀幹の短小なるに似ず、偉器材能あるに喩ふ。山椒の實は甚だ小し、されど食すれば頗る辛し。即ち喩とす。

三途の瀬ふみ。一び死に翻したるをいふ。

三傳の市虎。無根の風説も、多數の人が展すれば、終に信ずるに至るをいふ。市中に虎の出づる筈はなければ、三たび傳ふるに至れば遂に信ずるとなり。初め一び傳ふる時は信ぜず、二度目には若しくは事實ならんかと半信半疑になり、三度目には全く信ず。「戰國策」「龐葱謂魏王曰。今一人言市有虎。王信之乎。王曰否。二人言市有虎。王信之乎。王曰寡人疑之矣。三人言市有虎。王信之乎。王曰寡人信之。龐葱曰。夫市之無虎明矣。然而三人言而成虎。願王察之。」

三度目の神は正直。事を數回重ねて演じても、猶同一轍に出づる時は、其事が確實なりといふ義。三度目は定のものともいふ。三度の食を一度に食ても。求め得んとする事の切なる時に、三度の食事を一度に減食しても、厭はず、必ず之を得たしといふなり。

三度飛脚に三度あり。昔三度飛脚といふがあたりたり。三度ありとは詳ならず。

三度目が大事。「須磨郡源平隠居」「丁ど兄が二度弟は三度三度目が大事云々」三度目は定の物ともいふ。

三人あれば公界。三人あれば善界も渡り得とのこと。

三人寶引の獨乞食。三人にて寶引するときに、一人は必ず負くるものありとの義。

三人でありくと、仲間外れが出来。三人の時は一人は必ず離れものとなるをいふ。

三人で蚊帳をつると化物が出る。俗説。

三人並んで小便すると猫が化。俗説。

三人ばくちの一人負。三人寶引の一人乞食に同じ。

三人寄れば公界。三人あれば公界に同じ。

三人寄れば文珠の智慧。凡そ三人集りて評議すれば、よき智慧が浮び出づるものなりとの義。文珠の智といふは、文珠は智慧を代

表したる菩薩にして、智慧を司るを以てなり。「論語」

「三人行必有吾師」

三年醬油で煮染めたやう。白布の類等の甚しく汚れて、垢つきたるにいふ形容。

三年たてば三ツになる。三年経過すれば舊時の觀を改むといふ義。

三年にして子無き妻は去る。夫婦となり、三ヶ年連れ添ふ間に子を生まざれば妻を去るべしとの義。

三年の戀もさめるやう。至極愛相の盡くることにいふ。一朝一夕の戀にあらで三ヶ年の久しき間の戀もさむるといふことなれば、餘程愛相の盡きたるをいふなり。

三年の古疵を探るやう。人の舊惡をあばき出すをいふ。

三方の藥物。讀書、算術、習字、など必要の學藝を知らざる無學の人をいふ。

三把つけて臥牛八把つけて起牛。

此は甲州にての占候也。正月三日に、丑の日あれば、其年豐作也。大指、人さし指、中指と、三風して、五指中に臥指多ければ是を臥牛といふ。正月八日に丑の日あれば元日より數へて、五指の中伸る指、三ツにて多ければ是を起牛といふ。是年凶年なりとなり。

産は女の厄。

産の爲に病を引き起し、或は死に至ること往々あり、故に女の厄といふ。

三百文持つたら片足踏こめ。

此は千住在にていふ鄙語なり。六百文の妓ある故なり。三平二満。

おたふくのことを指す、江戸にてはおかめといふ、黄山谷詩「三平二満過即休」といふに二説あり一休が脱なりといふに醜婦をいふ三平とは額と鼻と腮と三所平らかなるをいふ二満とは兩頬のふくらかなるをいふとあり又一説には曆法一月の中に平といふ日三ツあれば満といふ二ツあり平と満とは代謝して一月つゝを無事に過ぐるをいふとあり。建除縮平云々と云ふ事歴にあり、こはおたふくの事に非ず誤るべからず。

三遍をばりて煙草にせう。

對話の際非常に其説話の遅く緩りなるを譏りていふなり。算命さがし。

士と犬の糞と恐くては、江戸へ來れぬ。

往時徳川時代に、江戸に犬と士と、多かりし故にいへり。

士と金とは朽ちて朽ちせぬ。

武士は死しても、名は不朽に垂るゝとなり。

三里皿の文はり。

三里の灸點は、皿のまはりほど灼膚して妨げなしとの義。「言海」「三里」灸穴の名、膝の下の外傍の、稍凹みたる處。

さやうの糸が切れた。

唯唯語として首肯することをさやうくといふなり。さやうの糸がきれたといふは、さやうくといふはなくなりしことにて、即ち首肯せざる義なり。

鞆ばしらより杖ばしら。

未詳。

皿背めし猫科を負ふ。

現に他に其犯罪者あるにも拘らず、いさゝかのかり合から、全く身に其罪をさせらるゝをいふ。

皿に桃をもつたやう。

溢るゝばかり、多く盛り上げたる形容。

猿が木から落ちたやう。

瀕依する所を失ひたるにいふ。又己が能とする所の事に失敗したることにいふ。

猿樂の後七日面白し。

非常に面白きことを感じたるときは、長く忘れ難きをいふ。

猿が梢を渡るやう。

非常に得意に事を爲す形容。巧なりとの義。

猿が筒を折つたやう。

我爲したる事に吾驚くをいふ。

猿が人參を貰うたやう。

貴重なるものを得ても、之れを使用する道知らざるをいふ。

猿が佛を笑ふ。

いふ。

智の淺きものが、智者を測り知ること能はずして、却て之れを笑ふをいふ。

猿が繪馬を控たやうにして買った貨物。

得意になりて買ひし品物を云ふか疑はし。

申酉あれて戌あがり。

申の酉の日に天氣あれて、戌の日に晴天になるといふ義。

猿と鶴との交を絶つ。

山人の世に出づるをいふ。

猿に冠。

猿に烏帽子を見よ。

猿に水。

尻からぬけてしまふといふ喩にて、忘れ易き事。

猿に木昇りを教ふるやう。

巧者に向つて其事を説明するをいふ。

猿に烏帽子。

人の其外觀を装へども、其心の陋劣にして取るに足らざるに喩ふ。(猿に衣を着せ烏帽子を冠せたらば一見

人間の如くなれども、到底猿たるる免る、能はざるなり。「漢書」者稱傳「韓生曰、人謂、楚人沐猴而冠。果然。」

猿にも衣裳。

衣裳を着飾れば如何なる者にても立派に見ゆとの義なり。猿に衣裳を着くれば、宛然人間の如く見ゆる故に

猿の雀亂したやう。

顔を赤うして苦むものを罵りたる形容語。

猿の木上り。

其事を巧にする形容。過誤なし、取り外しつこなし。

又物の能く適合したるにいふ謎なり。きしりあふと木へ尻あふとをかけたるなり。

猿の牙。

白き米の形容。

猿の尻はざんがりこ。

至極明白なる事をいふ。

猿の尻笑。

我身亦他と同様の缺點ありながら、漫に他を笑ふこと

をいふ。猿が己の尻の赤きを知らずして、他の猿の尻の赤きを笑ふが如しとなり。

猿の水練、魚の木上り。

見當違ひの事を爲す喩。

猿の空虱。

人の執務するが如き容態を爲して、其實一も處辨する所なきを、猿が毛を掻き分けて蚤か虱を索むるが如き事をなすも一も捕捉し得ざるに喩へいふ。

猿の面笑。

猿の尻笑といふに同じ「日本振袖始」「誤なりとは猿の

猿の花見。

つらわらひ。」

花見に出て、花下に泥酔し顔の赤くなりたる者を嘲りていふ。「醉吟集」「木のもとに呼びつれたる酒醉はさるの花見る心地こそすれ」

猿の人真似。

猿は能く人の真似する故に、人にして徒に他人の真似をする者を嘲りていふ。

猿の餅かゝやう。

右から左といふ義。

猿の傳。

小供につきもる者が、小供の機嫌を取ること能はずして、能く泣かすをいふ。

猿は人間より三本毛が足らぬ。

俗説。

猿舞腰。

腰伸びぬ形をいふ。

猿も木から落つる。

能者功者といへども、時に失敗過誤あるをいふ。「淮南子」嘗矣訓「猿狢顛厥而失三木枝。」

去る者は日々に疎し。

此諺は人情の短所を表白したる者にして、如何に親しき間柄にても、遠く隔り去つて、月日の経過する間には、漸次に疎むやうに成るものなりとの義。「文選」古詩「去者日以疎、生者日以親」川柳に「さるものは日々にと後家はさかんなり」

猿を冠ると頭に腫物が出来る。

俗説。

猿を冠ると長が伸びぬ。

俗説。

棒が三年櫓が三月。

船乗りの語。操船の稽古をするに、櫓は三ヶ月にて習ひ得れども、棒を扱ふことは三ヶ年を要すとなり。

竿竹にて星を打つやう。

竿竹を以て星を打たんとすとも、到底打つこと能はざるべし、己が力を盡らずして成し遂げかたき事を爲さんすること。徒勞無効に屬すとの義。「無門關」棒、棒打月、隔靴爬痒、有甚麼交涉。」

竿の先で鈴をならす。

事に臨んで人を畏怖せしむるをいふ。音に怖れて近きこと能はざらしむとなり。轉じて自ら畏怖することに

竿の先で星を打つやう。

竿竹にて星を打つやうの條に出づ。

竿の先へ鈴を付けたやう。

用にもたぬことを、口がましく喋舌する者をいふ。

し

仕合は袖つまにつかず。

人間の幸福は、天性に具はり居る者ならずとの義。「狂言記」「ソック／＼仕合というて袖つまについてある物でなし。」
宗旨違ひ。

酒を好む者の葉に於ける、葉を好む者の酒に於ける、が如き類、其事とする所の、其本領に非ざるをいふ。神徒の佛教に於るが如く、佛徒の神教に於るが如き、宗旨の違ありといふより起りたるなり。
姑に氣に入る娘は世が早い。

姑の氣に入る娘は稀なるものなり。若しあらば早く死する娘なりと云ふ義。
舅の十七見た者が無い。

得意に過去の自慢話をすれども、誰かすべきなしとの義。舅姑が其婿たり娶たりし時の事を語れども、聞く

者一向其當時の事を見たることなしといふ意に出づ。
舅の門と麥畑は踏むほど善し。

麥畑は踏むほど麥がよく出来、舅の家を屢訪問すれば喜ばるゝとなり。

姑の涙汁

至少の噺。
姑の涙は無い。

姑は嫁に對して涙はなし、即ち同情心なしとの義。

姑の場ふさがり。

姑のよく嫌はれてゆく所のなきをいふ。

舅の物で友婿をもてなす。

解に及ばず。

舅は親。

舅は親同様心得て事ふべしとの義。

姑は年が寄るほどひがむ。

姑は一年一年益々ひがみ心が出るものなりとの義。

舅は我親より大切なり。

解に及ばず。
柔能く剛を制す。

溫柔なる者却つて剛強なるものに勝つ義なり。「三略」
「柔能制剛、弱能制強」「老子」「柔勝剛、弱勝強。」

四海兄弟。

世上の人すべて皆兄弟の如く親しむべきものなりとの義。「論語」君子敬而無失。與人恭而有禮。四海之内皆兄弟也。「道歌」まことほど世にたふときものはなしまこと一ツで四海兄弟」「顔氏家訓」風操篇「四海之人皆兄弟」

鹿三代に松一代、松三代に鳥一代。

鹿と松と鳥との壽を比較して、鳥が最も長壽なるをいふ。「埤雅」「鸞鳥性極壽。三鹿死後、能倒一松。三松死後、能倒一鳥。」

鹿つきの山は獵師知り、魚つきの浦は網人知る。

各其専門とする所の事に精通するをいふ。已に密接の關係あるもの、縁故の深き者は、能く之を詳知すとの義。「洞房語圍」序文に「古の諺に、鹿つきの山は獵師知

り、魚つきの浦は網人知るといへば、予が子孫をして此里の來由と昔物語をも知らせんと、獵に筆を執りて此一冊を綴り云々。「論衡」魚鼈雁淵。漁者知其源。禽獸藏。收獵者見其脈。」
叱つたら鹿噉ませう。

兒童の語、惡戯などしたる時に、他の者が其様なことをすると叱らるゝぞといへば、叱つたら鹿噉ませうとて、誑言を畏れず豪氣にいふなり。

鹿の角を蜂がさすやう。

蛙の面に水(カ)の部といふに同じ。

鹿は射手の前に来る。

獲得せんとする者が眼前に來る義。「家語」「好勝者、必遇其敵。」

鹿まつの所の狸。

大なるものを得んと期待する所へ、小なるものゝ來りたる噺。

鹿見て矢をはぐ。

事に臨みて俄に其準備せんとする義。時機既に後れたることないふ。いくさ見て矢をはぐ(イの部)といふ

參照すべし。
鹿を追ふ獵師山を見ず。

欲利にのみ目を着けて、世の道理を顧みざるを恰も鹿を追ふ獵師が、鹿のみを見て山を見ざるが如きに喩へたるなり。「淮南子」既林訓「逐獸者目不見太山。嗜欲有外。則明所蔽矣。」古語「攫金者不見人。逐鹿者不見山。列子ノ註ニ「志在攫金而不見其人。是逐獸不見太山也。盲心有所迷。故至此。」劉子新論「貨美錦于市。盜於衆中竊之。吏執而問。汝何盜。錦于衆中。對曰但見有錦不見有人。故取之耳。」是亦諺の意に同じ。欲の爲には目も見えずといふ。

鳴が看經したやうな顔して居る。
鳴は田澤に居る時、閑然なるを以て、閑居と看經と通はしていふ。「吾吟我集」羽根かきの敷を所作にや澤の看經をする曉の夢
食にあひては友を忘る。
己が衣食に奔走する爲に、友人の情誼をも忘るゝとの義。

鳴の看經。

鳴が看經の條に出づ。
色慾は身を倒す病

解に及ばず。
敷居が高くなる。
何事か面目を失することありて其人の家に出入しがたきといふ。
敷居に踏くは足下を見ぬから。
失敗は聊かなること、不注意なるより起るとの義。
四貫相場に米八斗。
今より四五十年前往時の米の相場錢四貫にて米八斗を買ひ得しなり。

自業自得。
自分が爲したる業因に依りて、自分に夫丈の果を求むるなり、何處へも小言の言ひ所なきをいふ。「正法念經」地獄品「非異人作惡。異人受苦報。自業自得果。衆生皆如是。」同經十善業道品「自作惡業。自得惡報。」同經觀天品「自作善業。自得樂報。」

四國猿。

四國より出でし人の事をいふ。四國には猿多きより同地の人を卑めて云ふなり。又は四國の地圖の形猿に似たるが故なりともいふ。
仕事は多勢で爲て、食物は小人數で食へ。
労働を多くして、食事を少くすべしとの義。

仕事は神田で、飯は越後。
江戸の神田人は仕事が早く、越後の人が飯を食ふこと早し、故に早く済ます事をいふ。

仕事は仙氣。
仕事は爲さる氣といふを、仙氣としやれたるなり。

仕事は道具にあり。
仕事は出来、不出来は、其器具の良否によるとの義。

仕事幽霊飯辨慶其癖夏瘦寒細り、たまさか肥えたり腫病。
怠惰なる者仕事の時には姿を隠して、其業に勤めず、食事の時には饗くまで大食し、其上に夏時暑を憚り、冬則寒を畏れ、たましく太りたるは、肉肥えたるにあらで、腫病にかゝりたるなりとて、始末にならぬ人間を

冷罵したるなり。
仕事をせうより廻しをせよ。

仕事を爲すより工面するがよしとの義。
仕事をば追うて、仕事に追はるゝな。
仕事を能く抄取らせて餘裕あるやうにすべしとの義。

獅子身中の虫。
内より災害をなすに喩ふ。恩とすべき所に仇する類をいふ。獅子は獸中の王と稱する程の者なれば、假令其身死すとも、百獸猶其威を恐れて、敢て其肉を食ふ者なし。されど其獅子の身内に生ずる蟲ありて、反りて其肉を食ひ果すといふに喩ふるなり。「蓮華面經」佛告阿難、未來之世有諸破戒比丘(中略)譬如獅子命絕身死。若空若地若水若陸。所有衆生不復食。彼獅子肉。唯獅子身自生諸蟲。還自食獅子之肉。云々。「仁王經」唵累品「如獅子身中蟲自食獅子非外道也」

死しての長者より、生きての貧人。
死後に巨萬の富を重ねるよりは、假令貧なりとも生存の樂みに如かずといふ、寧ろ未來觀の無き性情を表現したる俚諺なり。「白詩文集」身後堆金柱北斗。不

「如生前一樽酒」「評書」張翰曰使我有身後名不如
即時一杯酒。

獅子の子育てのやう。

子の愛に溺ることなく、嚴なる教訓を加ふるをいふ。

四四の十六小便のはたち。

小兒の小便をしといふよりの洒落なり。野猪は四季

に十六疋の子を産むより出づとも云ふ。

獅子は生れて三日にして虎を食ふ氣あり。

幼稚の時より氣骨のある喩。

獅子は子を谷へ落して、其勢を見る。

子を窮厄の境に置きて、之を試みるに喩ふ。獅子子を

生めば、之を谷に墜して、能く出づる者は、之を育て、

出づる能はざる者は、すて、順みずといふより起る。

獅子は小虫を食はんとしても先勢を爲す。

小事に取りかゝるにも之を慎重にするに喩ふ。

獅子は我子を谷へ落す。

子を嚴に取り扱ふ喩。

四十腕。

人四十歳に至れば腕力衰へ、腕の痛みを覺ゆるものな
りとの義。

四十九口の餅は七里趁ひても食へ。嫁入餅

は七里逃げても食ふな。

七回忌のくばり餅を食ふは吉なりといふ俗説。

四十九日迄魂が家の棟に居る。

人の死後四十九日は、其魂が家を離れずといふ佛説。

四十くらがり。

人四十歳にして眼力衰へ、初むる故にいふ。老視とて

近い處が見にくくなるもの。

四十くと人言ふけれど、三十九じやもの

花じやもの。

三十九じやもの花じやもの(サの部)の條に出づ。

四十二歳の二歳子は捨てないと親を食ふ。

四二に子の二を加へ、四四となる、死の音に通ふもの

重なる故に思む。

四十二の物争。

散子の目は廿一あり二個にて四十二あり、因て賭博な

四十二の物争ともいふ。又一説に物を争ひて己が意見

を推し通すをいふとぞ。「難波江」「日尾荆山の曰く四

十二章經に爲道者如牛負重行深泥中。疲極不敢左

右顧視。といふことあり物を争はんには、おのが立て

たる趣をおし、ひたすらたて、いふべきこと、そのた

とへの如し。

四十二の厄年に芹を食はぬもの。

芹は四十二年目につくるといふ俗説より出づ。

四十坊主は鹿の角、廿坊主は牛のふぐり。

落ちさうで落ちぬものは(オの部)の條に出づ。

四十八たか揃ひて。

諸役人打揃ひたるなどにいふ。鷹の類四十八種あり故

にいふ。たかば縁高の事か。

獅子奮迅の勢

氣勢の強盛なる形容。「大智度論」「譬如獅子奮迅大

吼。

四十男と七下りの雨は止まぬ。

四十代の男の色に耽りては止まらぬもの、又セツ下り

の時刻に降り出したる雨は、容易に降り止まずとなり。

蜺が上下を着たやう。

倭服なる者の衣裳につけたる風體の不恰好なる形容。

蜺貝で井戸凌をするやう。

如何に骨折り辛勞すとも遂に其功なしとの義。

蜺を川へ放すと痰が癒る。

俗説 痰とは喘息の病をいふ。

獅子も頭のつかひがら。

神樂獅子、頭の使ひやうと云ふ事にて。總て頭たるも

のの使ひやうによりて人を働かすとの義なり。

支證なき手柄話。

得意に己が手柄談をすれども、他に其證據とすべきな

きないふ。「吾吟我集」「支證なき手柄をばなす音をこ

そ、から鐵砲と人の聞くらめ」。

師匠の出し後れ。

「故事要言」「人に物を教へ導く程の人として、常の嗜

を疎に心懸なき事は耻を蒙り徳を失ふの端となるそと

いふ心也。出しおくれとは、當座に答ふべきの事に後れ、赤面に及び、退いて悔ゆるの様子を云。

磁石針を吸へど、曲れるを吸はず。

琥珀塵を吸ふ穢な吸はず(口の部の條に出づ)。

獅子王狐を捕ふるに虎を捕る勢を以てす。

小事に臨みて、猶大事に於るが如くする喻。

獅子を食つた報。

女色に沈溺して、梅毒を得たる等をいふ。獅子身中の蟲が獅子を食ひ盡して己も亦死する故にいふが、或説に猪肉を食へば、腸が痛み出すことあり、故にいふと、如何にや。

死すべき時に死せざれば、死に勝る恥あり。

「二谷嫩軍記」死すべき時に死せざれば死に勝る耻あり。

時節を待てよ柿の種。

時機の至るを待ち居るべしとの義。

死せる孔名生ける仲達を走らす。

是は支那三國時代に魏の孔明が、死後に魏の司馬仲達

を走らし、故事より出でたるなり。餘威を以て能く敵を畏怖せしむる如き場合をいふ。

下いびりの上諂。

下に對して苛酷なる者は、上に對して諂諛する者なりとの義。

舌三寸に、胸三寸。

舌は小なりといへども、如何なる言を吐くか測るべからず。胸は小なりといへども、如何なる思慮を蔵するが知られざるなり。

舌三寸の嚙にて五尺の身をはたす。

口舌の禍遂に五尺の身を亡ぼすに至ることありとの義

「童子教」車以三寸轄。遊行千里道。人以三寸舌。

破損五尺身。「鶴林玉露」聽諷詩。堂堂八尺軀。莫

聽三寸舌。舌上有龍泉。殺人不見血。

親しき中には垣をせよ。

親睦に過るは、却て疎遠の基なれば、親睦なる間柄にて、和して流るゝことなきやうに注意すべしとの戒。

「省心雜言」隣里欲高墻。親情欲遠方。

下地は好なり、御意は好し。

其好む所のものを勧められたる義、得る所のこと其の希望せる所になひたる體にいふ。飲酒家が酒をすめられたるが如き場合。

舌つゝみをうつ。

美食する時、舌を鼓するをいふ。

下手に組む。

人と共に事を執るに當り、己不利益の地位に立つをいふ。相撲より出でたる語なり。

舌長。

多言のものをいふ。「詩經」大雅「婦有長舌。維厲之階。」毛傳に「長舌能多言者也。」

下に有り付いた候の字、俄に上へあがりしやう。

卑賤の者が意外なる出世したる喻。卑賤の者は人の上に立つこと能はず、常に下に付いて使役せらる。彼輩

簡文の候の字の、常に下に付くが如し。故にいふ。

下にあり付いた候の字、俄に上へあかれれば

した。

した。

一家中の人可候候になる。

卑賤の者俄に出世すれば、一家族を擧げてみな心いそぐとして狂喜せんばかりなりとの義。前の諺参照。

舌に塵もつけぬ。

口給の達者にして、巧にいひわけなどを即坐にするを

下の下。

「伊達染手綱」勤めの身にもおじやれの身は下の下といふは、このこと。

舌の長い者は盗人。

俗説。

下腹に毛の無い狼。

大森なる者を老狼に比していふ。老狼は腹下に毛なし。

舌は禍の根。

言語の過ちより、禍を招く者にして、禍根は實に舌にありとの義。「老子」「夫舌禍福之門」。

下へも置かぬやう。

お世辭の巧なる形容。

舌を出す。

かげにて嘲笑すること。

舌を一枚につかふ。

同一の事について、善後異なりたる言を爲すをいふ。

二枚舌つかふといふ。

舌をまく。

感ずること深くして語に述べがたきをいふ。警歎の義。

駭き怖る、義。「史記」楊雄傳「香儻碩老。抱其書而

求遊。禮官博士卷其舌而不談」。

質がわらば金貸さう。

抵當物として差入る、物あらば、金を貸すべし、信用

上にては貸さざる義。

七月のわかれ鳥。

鳥は春雛兒を生み、長して後に反哺して、七月には他

所に別れ去るといふ。

七字の口傳。

足るを知る事。あるにまひせし(ア)の部の條を見るべ

し。

七十の三歳兒。

老いて再び若いことなる(オ)の部を見るべし。

七尺去つて師の影をふます。

弟子たるもの、師を尊敬して其影をだに踏むべからず

との義。「沙彌威儀經」「入城乞食時。當隨師後。不

得_レ以_レ足踏_レ師影」「教誡律儀」「若隨師行。不得_レ喧

笑。不得_レ隔_レ師影。相去可_レ七尺。」。

七艘船のやうな面。

長崎の諺不人相の者をさしていふ、此は昔長崎へ唐和

蘭の舶多く渡ひしに、一年に七艘着きたりし事あり。

長崎困窮して人々の面、不人相なりし故に、不人相の

ものをいふ諺となれりとぞ。

七頭八起。

種々逆境に困むことあり、又順境に立つことありと

いふこと。

七頭八倒。

種々の困苦に逢ふをいふ。

七度尋ねて人を疑へ。

ないたひ尋ねて人を疑へ(ナ)の部の條、疑心暗鬼を生

ず(キ)の部の條参照すべし。

七難九厄。

俗に男女七九に當る年に禍にかゝるといふ。

七年の病に三年の艾を求むる如し。

到底之を得がたしとの義なり。「孟子」「今之欲_レ王者、

猶_レ七年之病。求_レ三年之艾也。」

征知らずの碁打かな。

圍碁に平凡なるもの征に迫はるゝを知らずして強に

逃れんとするを嘲りていふ。征知らず碁を打つなど

しといふ。

質屋の看板。

知つとると云ふ意。質取るより轉じたるなり。

質屋は壘の上の車力。

車力は家を動かすものなり。故に云ふ。

七里さがる。

事に後るゝことをいふ。

瑟琴調はず。

夫婦中の惡しきをいふ。調は和することなり、瑟琴の

音調相和するを夫婦の和合するに比す。調はずは和せ

七十の三歳兒。

老いて再び若いことなる(オ)の部を見るべし。

七尺去つて師の影をふます。

弟子たるもの、師を尊敬して其影をだに踏むべからず

との義。「沙彌威儀經」「入城乞食時。當隨師後。不

得_レ以_レ足踏_レ師影」「教誡律儀」「若隨師行。不得_レ喧

笑。不得_レ隔_レ師影。相去可_レ七尺。」。

七艘船のやうな面。

長崎の諺不人相の者をさしていふ、此は昔長崎へ唐和

蘭の舶多く渡ひしに、一年に七艘着きたりし事あり。

長崎困窮して人々の面、不人相なりし故に、不人相の

ものをいふ諺となれりとぞ。

七頭八起。

種々逆境に困むことあり、又順境に立つことありと

いふこと。

七頭八倒。

種々の困苦に逢ふをいふ。

七度尋ねて人を疑へ。

ざるをいふ。「詩經」「妻子好合。如鼓琴瑟。」成語考

「如鼓瑟琴」とは夫婦和合の訓、琴瑟不調とは夫妻

反目の詞。

日月六合を照せども曲れる穴を照さず。

明智なりといへども、察知すること能はざることある

をいふ。「葛氏外篇」「日月不能_レ播_レ光於曲穴」

濕濃坊主に檀那がない。

勸進寄附しつゝ言ふ坊主には檀那なしとの義。

疥癬三年又三年。治つて三年又三年。

疥癬にかゝれば其全治する迄、非常の年月を要する故

にいふ。

知つた同士は涼しい。

能く知り合ひたる中の人は氣持がよしとなり。隔意心

なき故にいふ。

知つて知らざれ。

知つた振をせずに、成るべく知らぬ體にして、己を虚

しくせよとの義。「老子」「知不知上。不知知病。夫唯

病病。是以_レ不病。」

知つて知らぬ顔。

知りたる事を知らぬ振に装ふことなふ。
知つて知らぬ顔が眞の物知り。

眞の物知りは、知れる事を口に出さず、深く蔵して知らざるが如くすとなり。
室に怒りて市に色す。

やつあたりの義。怒を人に移すこと「左傳」昭公十九年「謗所謂怒於室、色於市者、楚之謂也註靈王怒吳子、執其弟、猶怒室家、作色市人」

室に入つて戈をとる。
自分と自分を害する義。

賤の女は形に似せて巻をまく。
其志す所其爲す所皆身分相照なりとの義。

十把一からげ。
かれこれの區別を立てず一括する義。

十遍さがして人を疑へ。
七度尋ねて人を疑への條に出づ。
十遍讀むより一遍寫せ。
書を讀みて書中の事項を記憶せんとするには、之を十

遍讀返して讀まんより、一遍寫し取るべしとなり。「鶴林玉露」唐張參爲國子司業。手寫九經。每言讀書不如寫書。高宗以萬乘之尊。萬機之繁。乃亦親臨宸翰。遍寫九經。靈章爛然。終始如一。自古帝王所未

有也。又嘗御書漢光武紀。賜執政徐俯曰。卿勸朕讀光武紀。朕思讀十遍。不如寫一遍。

尻尾をあらはす。
其詳れる事の露見するをいふ。次の諺を参照すべし。

尻尾を見せぬ。
種々の悪事を働きて、首尾よくかくして、人の發見する所とならざるをいふ。陸遊が姚平小傳「四子入五湖。姚平仲入背城山。它年未必不死。直是不見末後一段醜境耳。故諺曰神前使。人見首而不見尻沈めば浮ぶ。

世の浮沈定めなきものにして、今逆境に立つとも後亦順境に出づべしとの義。異本「保元物語」爲朝爲義を諫めて世間のならひ心一様ならず、沈めば浮ぶ理あり。

四斗を八斗にいふ。

事を倍にしていふ義。俵の中に四斗の者を入れて八斗あるやうに結ふとの意にとる。結ふと言ふと相通はせたるなり。

四斗を八斗に病む。
輕症の病氣にかゝりて、大病の如くに心配するをいふ。

品川女郎衆は十女。
往時十女を出せば、品川の娼妓を買ひ得し故にいふ。

品川海苔は伊豆の磯餅。
品川にては海苔といひ。伊豆にては磯餅といふ。

死なぬ者なら子一人。へらぬものなら金百兩。
死せざることに定つて居るものならば子は一人にて十分なり、又使つてもへらぬものならば金は百兩にて十分なりとの義。

信濃には産後にも雉子や蕎麥を食ふ。
解に及ばず。

信濃者の大飯食ひ。
解に及ばず。

品物をほめた人に買うた例なし。
解に及ばず。

品をやる。
巧に藝を演ずること。

死一倍の手形。
親の死後には一倍にして返済すべしといふ證文を入れて金をかゝるをいふ。

死馬に鍼をさす。
無効なる喻。死馬に鍼治を加へたりとて何の効もなし。

死神にさそはる。
到底死せざるを得ざる運命なるをいふ。

死神に取つかる。
前の諺に同じ。

死錢を使う。
役にも立たぬ無益の事に金錢を消費するをいふ。

死にまざる生辱。
死するより尙苦しき生前の恥辱なりとの義。

死人生鼠に及ばず。
解に及ばず。

人死するときは、生きたる鼠にも及ばずとの義。
死人に口なし。

死したる人の事を彼是批評すれども、死亡したる人の
来りて之を証明することなきをいふ。
死人に妄語。

言うて其効なきこと。
死もの狂ひ。

死する前に狂ひ動くこと。轉じて決死の體にいふ。
死ぬ死ぬいふ者に死んだ例なし。

解に及ばず。
死ぬ者の損。

未來の觀念に乏しき我國民の情性を表白したるものに
して、死する者は其當座だけは人にも痛惜せらるれど
日を経るに従ひ、遂に忘却せらるゝに至るなり。故に
死ぬ者の損といふなり。

死ぬる子は容貌美し。

「昔原傳授手習鑑」「死ぬる子はみめよしとつづくしう
生れたが可愛や其身の不仕合」

師の影を踏まされ。

七尺去つて師の影を踏まされの條に出づ。

四の卷の師匠いらす、二の卷の小僧殺し。

日蓮宗にいふ諺。經文の四の卷は解し易く二の卷は
解し難しとなり。

しのをつく雨。

雨の繁く降る形容。篠とは竹の小さく細く叢生するもの
總稱なり。篠をつかれたるが如く降る雨といふ義。

歌に「むさしの、篠をたばれて降る雨に笠ならではな
く蟲もなし」

死は鴻毛より輕し。

人の命は重く大切なるものなれども、義の爲に捨つる
ことは鴻毛より輕く見るべしとなり。「史記」荆軻曰死
有重於太山。有輕於鴻毛。「司馬遷が報三少卿書
に「人固有二死。死或重於泰山。或輕於鴻毛。用之
所趨異也」

師は三世の契夫婦は二世。

師恩の忘るべからざる教。
まはざれば喧嘩の基。

強敵は遂に喧嘩となるとの義。
師走地蔵は目を煩ふ。

師走の月に地藏詣をすれば目を病むといふ俗説。
師走に油をこぼせば火に祟る。

俗説なり。冬時火の早きもの故火の用心を戒むる爲に
出でし。

師走の蛙。

物を考ふる謎なり。考へると寒蛙と相通はせたるなり。
師走坊主、師走浪人。

妻やつくしく傾りなげなるものをいふ。坊主は盆に
は檀家より諸種の贈り物あれども、冬はなし、故に師
走坊主といへばやつくしくしきことないふ。「川捨箱」妻
やつくしく傾りなげなる者を指して師走坊主師走浪
人といふ諺の昔ありし故か、近松門左衛門の夕霧の淨
るりは、傾城阿波の鳴戸と題す、吉田屋の段伊左衛門
の詞に、「紙子さはりがあらいく、引けば破れる、摺め
ば跡に師走坊主師走浪人」とあり。盆には僧の物もち
ふこと、常なれども、歳暮にはさることなきをいふ。

師走浪人冬編笠。

師走浪人冬編笠。

師走浪人冬編笠。

前の諺を見るべし。
師走女に目なかけろ。

十二月は忙がしき月なれば、女に目をかくるやうな
とを爲すなかれとの教か。

師走女の化粧には山の神もこはがる。

十二月は人心の忙がしき月なれば婦女が化粧をするに
ものどかに出来ぬ故。其化粧の煩る醜きないふ。

柴船の宵ごしらへ。

小舟の宵ごしらへ(コノ部)の條に出づ。

死は易く生は難し。

慷慨死に就くは易く、從容義に就くは難し、の罪より
出づ。

芝居蒺藜芋南瓜。

女の好むもの。

芝居は無學の早學問。

芝居は無學のものに道理を教ふる方便となるをいふ。
慈悲が仇。

好意に出でたる事が。却て害と爲るをいふ。

好意に出でたる事が。却て害と爲るをいふ。

好意に出でたる事が。却て害と爲るをいふ。

慈悲の殺生。

殺生することは、もと慈悲の行にはあらざれども、人を害し世を害するものを殺すは、大なる慈悲にして菩薩行となるものと云ふ。

慈悲は上より下る。

富者の者が貧乏人を賑はし、長上が下僚の者を顧みることが如きなむ。「顔氏家訓」夫風化自上而行於下者也。自先而施後者也。

慈悲を垂るれば災をたると。

人に慈悲を施して、實際己れの不利となるをいふ。四百四病の病より貧苦苦いものはなし。

病苦よりは貧苦が一層堪へがたしとの義。「維摩經」是身為災。百一病惱。僧維註曰一大增損則百一病生。四大増損四百四病。一同俱起。「官幽寶積經」百一風病。百一黃病百一痰病。百一總集。總有四百四病。從内而生。「百緣經」人死之時。四百四病。同時俱起。「諺草」

「人の病四百四病あると云事、世に云事也。千金方八十二卷調氣法曰。百病不離五臟。共有八十一種疾。冷熱風氣。計成四百四病。」

十月狸は寝たあとも百する。

十月頃の狸の價貴きをいふ。

十月の木葉落し。

十月に至れば木葉飄零するをいふ。

十月の木葉髪。

十月木葉飄零の頃、人の頭髮も脱落するものなり、故にいふ。

十月の小六月。

十月の頃は小春日和といひて暖きものなり。故にいふ。「荆楚歲時記」十月天氣和暖似春。故曰小春。

十月の戸閉隣者。

十月頃病人少く醫者の家賑はしからずとの義。「丹鉛錄」批批黃。醫者忙。橘子黃。醫者疲。羅術上。揚醫者。同。言夏多疾冬自平也。

十月の投木。

十月に、樹木を移植すれば能くつく、縦ひ投げすても、つく者なりとの義。

十月の中の十日は心なき人を頼むな。

次の諺を見よ。

十月は心なき人を頼むな。

十月は日の短き月にて、心怠がしき時なれば、精勤の念なき人に物を頼むなどの義。(仕事の拙らぬ故)

澁皮がむけぬ。

事に未熟なる喻。又女の容貌の美ならざるをいふ。

澁皮がむけて居る。

女の容貌や、美なるものをいふ。物の巧者なるをいふ。

十九たちまち二十日宵闇。

陰曆十七日の夜の月を、たちまちの月といひ十八日の夜の月を居待月といひ、十九日の夜の月を寢待といふ。

十九厄なら二十五も厄。

女は十九を厄年とし、男は二十五を厄年とす。

十五六歳の處女は、箸の倒れたも可笑がる。

妙齡の女子は何でもない事に、可笑がるものなり。

十五六歳の小娘は糖の崩れたのも可笑がる

前の諺に同じ

十三ばつくり毛十六。

女子の十三歳頃には、はや春情發動の前あり、十六頃既

に陰毛を生ずるをいふ。

十三ばつちり。

十三ばつくりと同じ、ばつちりは、花の蕾の開きかゝるをいふ。

十時わがりに傘はなすな。

午後十時頃に止みし雨は、又直に降り出すとの義。

十七八は寝濃いもの。

十七八歳の頃は睡眠を欲するものなり。

十七八は箸の轉んだも可笑がる。

妙齡の女子は、かりそめなる事も、可笑がるものなり。

十七八は敷力。

十七八歳の頃腕力強しとの義。

十八十色。

十八人が十人ながら、各自皆心の同じからざるをいふ。

十八十腹。

前の諺に同じ。

十八寄れば十色。

前の十人十色に同じ。

十人寄れば十腹。

十人十色に同じ。

十年一昔。

凡そ十年の星霜を經過すれば、幼者は成童となり、壯者は漸く老境に入る等大に變遷する所多くして、時代の異りたるが如き觀あり。故に十年を一昔といひ來れるなり。蓋し昔と今と時代を異にするよりいふ。十年立てば一昔ともいふ。

十の字の尻を曲ぐる。

典物を置く謎なり。十の尻を曲ぐれば七となる七と實と音相通ずるを以ていふ。

十のしま。

あほといふ隠語なり。十のを合すればあひの字と爲り、しまを透としまを旁すれば、ほの字となる。

十八の後家は立つが三十後家立たぬ。

女子十八九歳にして嫁婦となりし者は、能く寡を守りて貞操を立つるが、三十歳頃後家となりし者は寡を守

りがたしとなり。

十八の後家は立つが四十後家は立たぬ。

前の諺を見るべし。

十八の女二階の下に立つ。

櫻の字を指す。十八は木なり、二階は二具に遊ばせたるなり、女が二具の下に立てば櫻となる、木邊を遊ばれば櫻となるなり。

自分で自分の重みが知れぬ。

己れの本は己れ知らずとの義。

十分はこぼる。

満を戒めたる諺にて、物の十分に盈ちたる場合には覆れ出づる者なりとの意なり。「家語」「孔子曰吾聞宥坐之器虚則敬。中則正。滿則覆。明君以爲至誠。故常置之于坐側。顧謂弟子曰。試注水焉。乃注之。水。中則正。滿則覆。夫子喟然嘆曰。嗚呼夫物惡有滿而不覆者哉。」

十目の見る所。

多数の人の視る所。皆同一様ならば、其事確實なりとの義なり。「大學」「曾子曰十目所視。十手所指。其體

乎、

十王が勸進も九王(食はう)が爲。

十王とは開闢の事にて、寶主坊主杯、開闢王の像を安置すると言ひて、其の半身だけ造り、尙不足額を勸進しあるく者も、つまり自己が生活の爲なりとの義。十王と九王(食はう)と面白く言ひなせるなり。

鹽賣も手を嘗める。

鹽賣の手鹹き苦のものなり。然るに知らずく手を嘗むるといふ程の義なり。

鹽から食はうとして、水の飲み置きはならぬ。

後に富貴利達を得るからとて、現今は其氣になりがたしとなり。鹽からを食し喉渴するに及びて水を飲むべし。之を豫期して今より水を飲み置くことはなりがたかるべし。

鹹き物の好きな人は腎張。

俗説。

鹽で洗ふと如何な汚い物も清くなる。

解及ばず。

鹽にて淵を埋むる如し。

淵に鹽(フ)の部に出づ。

鹽を賣れば手が鹹くなる。

人は爲す所の職業によりて、其性質の選り行かないふ。鹹くなるは心の辛くなると通はせたるなり。

鹽を撮んで水に入る、やう。

徒に費すのみといふこと無効なる喻。

鹽を踏む。

辛きを踏り忍べるをいふ。「毛吹草」「旅だちて鹽のしほふむ山路かな。」

節儉は臭い。

節儉といふは、容易ならずとの義。

島原の女郎に吉原の張を持たせて、大阪の揚屋で遊びたい。

京都島原の女郎は、容姿を以て優り、東京吉原の女郎は、意氣を以て優り、大阪は揚屋を以て賭遊廓に冠れば、すべてのよいところを併せ得んと欲することにいふ。

自慢高慢馬鹿の内。

自慢するは愚なりとの義。

自慢の糞は犬もくはぬ。

自慢するはつまらぬものなりとの義。

自慢は智慧のたらぬ大馬鹿。

自慢するは愚の極なりとの意。

自慢は智慧の行き當り。

行當りといふは夫にて止まるといふこと。自慢すれば

智慧が進まずといふ義。

信あれば徳あり。

信仰あるものは徳行あるといふ。

人家千軒あれば相持に生計せる。

千戸以上の都邑にありては、彼我互に有無相交易して

生計を立て得べしとの義。

神祇、釋、教、戀、無事。

神道、佛法、戀愛、無常等は、和歌又は院本小説等の

骨子たるものなりとの義。

辛苦萬死の苦の世界。

人世痛苦のこと多きをいふ。

辛酸を嘗む。

艱難辛苦を爲すこと。

信州のむく鳥。

是は信州の人が、冬より春にかけて東京に出働きを爲

し、春氣候の暖なるに至りて、又信州に歸るを、むく鳥

が暖を趁ひて、一定の時期間出づるに、喩へていふなり。

信心過ぎて極樂通り越す。

信心過ぐる時は却て迷信となる。凡何事にても過ぎた

るは猶及ばざる如き者となる、中庸を守るが肝要なり

となり。

人心の同じからざるは其面の如し。

人心の異なるは猶其面の各異なるが如しとの義。「左

傳」襄公三十一年傳「子產曰人心之不同如其面。晉

豈敢謂子面如我面乎。」五雜俎「一尺之面像兆殊

形。此造物之巧也。方寸之心億兆異向此人之巧也。」

信心も徳のわまり。

信仰の心も徳義心の餘裕より出づとの義。

仁者に敵無し。

仁者として同情に富み、慈悲憐憫の心厚き人には、害を加

へんとするものなしとなり「孟子」梁惠王篇「仁者無敵」

人世行路難。

處世の難きことをいふ。

人生は朝露の如し。

人の生命のはかなきを朝露の消え易きに喩へていふ。

人世は白駒の隙を過ぐるが如し。

世の過ぎ行くことの速かなるをいふ。白駒の隙を過ぐ

るとは、善の過ぎ行くことなり。いふは日月の早く過ぐる

は、白馬の馳せ行く物を透き間より見るが如く、い

と速に去るとの義なり。「史記」「魏豹曰人生一世間

如白駒過隙耳。秦隱に莊子曰無異騏驎之馳過隙則

謂馬也小顏曰白駒謂日影也隙譬隙也。以言疾速若

日影過隙隙一也。ひますぐる駒の如ともいふ。

人跡繁げれば山も凹む。

人の通行頻繁なれば、道路橋梁等能く破壊するをいふ。

深大寺蕎麥。

人の通行頻繁なれば、道路橋梁等能く破壊するをいふ。

人世痛苦のこと多きをいふ。

辛酸を嘗む。

艱難辛苦を爲すこと。

信州のむく鳥。

是は信州の人が、冬より春にかけて東京に出働きを爲

し、春氣候の暖なるに至りて、又信州に歸るを、むく鳥

が暖を趁ひて、一定の時期間出づるに、喩へていふなり。

信心過ぎて極樂通り越す。

信心過ぐる時は却て迷信となる。凡何事にても過ぎた

るは猶及ばざる如き者となる、中庸を守るが肝要なり

となり。

人心の同じからざるは其面の如し。

人心の異なるは猶其面の各異なるが如しとの義。「左

傳」襄公三十一年傳「子產曰人心之不同如其面。晉

豈敢謂子面如我面乎。」五雜俎「一尺之面像兆殊

形。此造物之巧也。方寸之心億兆異向此人之巧也。」

信心も徳のわまり。

信仰の心も徳義心の餘裕より出づとの義。

「積江戸砂子」「江戸より七里中野の先當所の蕎麥は潔

白にしてすぐれてかるく好味なり」

身代に尾が見ゆる。

無限なりし資産減じて人に數へらるゝに至るといふ。

「八百屋お七」「然に目が光るやら身代に尾が見ゆるや

身代は火の事。

生計の窮乏なるをいふ。

身代を棒にふる。

家産を失ふに至ることなをいふ。身代とは所有の土地家

屋財寶一切の物の稱。棒に振るとは失ひ盡すといふこ

となり。棒にふるは(ホ)部参照。

身代を餅に搗く。

一家財政の紊亂して整理しがたきをいふ。餅につくと

はメチヤクチャにしてモチアマスノ意。

死んだ龜さん咄にならぬ。

咄にならぬといふ義。

死んだ子の年を數へる如し。

死んだ子の年を數へる如し。

過去の事を回顧すれども其効なきをいふ。
死んだ子は賢い。

釣り落した魚は大きいと同じく、人間の愚痴未練を離るゝ能はざるをいふ。

死んだと思はれた者は長命する。

俗説。

死んだら褒めらるゝ。

生前よりは死後に善き評を得るが、常なるを以ていふ。

新漬好の身上つふし。

食事に贅澤なるものは産を破るとの義。

死んでは一文にもならぬ。

死しては一向つまらないとの義。「遊仙窟」「九泉下人一錢不直。」

死んで花寶がさくものか。

死しては何にもならぬとの義。

眞の闇より無やみが畏い。

理非を分別せざる暴なる者は眞に畏るべきなりとの義

眞のやみといふよりみやみと語呂の柏子なとりたるなり。
心配は身の毒。

心配は身體に害ありとの義。

辛抱する木に金になる。

忍耐して業を勤むるものは、やがて好結果を成むる、とあるべしとの義。

辛抱は物事成就の根本。

忍耐は事を爲すの本。

信は莊嚴より起る。

かうくしい所あるより、信仰心が起るといふ義。即ち我信する所のもの、若し莊嚴を缺けば敬虔心は起らざるなり。

親は泣集他人は食集。

人の不幸あるに際し、親類血族の人は、來りて眞情より泣けども他人は唯酒食の爲に來るとの義。「珍書考」此諺は古來訓傳へると見へたり。併近來明の李青甫が書たりし望雲録の第二卷の三丁目に、肉族以親泣食集、他家以疎會酒樂。」と書たり。併此書は近來の書なれば出所にはあてがたし、日本の俗語は明代より以前に

云ふと見えたり、明の李青甫も昔より訓ひ傳へし語を望雲録に書きしや知りがたし。

神佛たゞ廻して自他ともに活きたがるも愚痴。

神佛に加持祈禱を爲して、延命息災を願ふも、畢竟愚痴未練にして、悟道の開けざるが故なりとの義。

心棒は金。

石臼の眞中なる心棒は金なるより、之に通はせて辛抱はかれなりとて忍耐刻苦することの貴重なる義にいふ。

神明に横道なし。

鬼神に横道なし(キの部)に同じ。

心も凝もない。

かざる所なく、極めて天真爛漫なるをいふ。

進物を呉れる人に油断するな。

進物を贈る人は何が要求せんとする所ある故なり。

神力も業力にかなはぬ。

神の力も因業の力には及ばずとの義。

新を迎ふる千里、故を送る門を出でず。

しん——しめ——しも

人情の輕薄なる、新に來るものを歓迎して、遠くまで出迎するが、去る人には疎にして門外にまでも送らず。

ベ子の鬼

しめたといふ地口。

ベ子のきんちやく。

前に同じ。

注連焼の水で團子を焼き食せば風引かぬ。

俗説。

しめり茶臼笠の雪。

重きことにいふ。「尤草紙」おもきもの 品々の段に「おもきは父母の恩、ためしのかぶと、具足、くさり袴、古布子、年買袋、商人の海道荷、下手の謡、上手くすし、しめり茶うまいに京のおつばねのり物、ぶしやうものいたちね、笠の雪、」

下總の食倒れ常陸の衣倒。

下總の人は食物に金を費し、常陸の人は衣服に金を費す故にいふ。

馴も舌に及ばず。

一び口に發したる言は、馴馬を馳せて追ふとも追ひ付

くこと能はざるべしとの義にて、失言の取がへしがたきをいふ。「論語」先進篇「棘子成曰、君子質而已矣、何以文爲、子貢曰措乎夫子之說。君子也、駟不及舌。」

下すばり。
淫を食はるものなをいふ。
下として上をはからふことなけれ。

下位に立つ者は上位の事に嘴を入るべからずとの義。「論語」「子曰不在其位、不謀其政。」

下の膏を絞る。
爲政者が下民に對して重税を課することをいふ。「晉書」「劉民脂膏。」

下は上に倣ふ。
上に倣ふ下(カ)の部)の條に出づ。

麝あれば香し。
麝は香氣の高き獸なれば、其居る所自然に知らるゝに至るが如く、人も身に智徳を備ふれば、自ら人に知らるとなり。「金剛經」川老注「頌曰蚌腹隱明珠。石中藏碧玉。有麝自然香。何川臨風立。」「明心寶鑑」香

心篇「有麝自然香。何必常風立。」

生あれば死あり。
生者必滅の條を見るべし。

生あれば食あり。
生ある者には必ず食物の用あり。

正月ある事は五月ある。
俗説。

正月詞をつかふ。
我本心になきことを、徒に口に出して言辭上の御馳走をすとなり。「聖學自在」「正月には己が心中には苦しく悲しき事あれども、人に對しては御日出度と時の宜しきに應ずるを以て、正月ことばといふ。」

正月の三つある時に許さる。
到底許すべからざるをいふ。山中にて狼に逢ひたる時斯く言へば、狼は其の正月の三ある歳を待つ爲め去り行きて害をなさずとの俗説あり。されど今は大陽曆の正月と大陰曆の正月と同圓の正月と三ある事なしとも限らざれば、正月の四つある年と云ふ。

將棊倒し。
一列に皆倒る、噓。

將棊は早馬の如く、棊は牛の如し。
將棊は早く勝負片付き、棊は遅し故にいふ。

正五九月はたゝり月。
俗説

生國は兵庫の者御免あれ。
御免あれ兵庫の者(コ)の部)の條に出づ。

城狐社鼠。
他の勢をかりて攻撃を免れ、安佚尊横を恣にする者に喩ふ。狐を捕らんとすれば城を壞たんとを恐れ、鼠を捕らんとすれば社を灼かんとを恐れ、之を惡みつ

上戸のひたひ盆の前。
い制すること能はずとなり。

あつきことをいふ。「民のかまと」「酒のみのひたひに

は陰曆六月の末より七月上旬頃をいふ

上戸は毒を知らず下戸は藥を知らず。

飲酒家は酒の害あることを知らず、飲酒せざるものは酒の藥となることあるを知らずとなり。酒は百藥の長ともいへば、百毒の長ともいふ。

上戸本性をあらはす。
酒の酔本性をあらはす(サ)の部)に出づ。

障子一枚外は乞食。
如何なる高貴の身分の人と雖も、一度其位を失へば窮境に陥るをいふ。

上州の長脇差。
古上州のもの標悍にして、常に長刀を帯びたるもの多かりしよりいふ。

上州無宿。
上州に無賴漢多しとなり。

上州名物は女房天下に唐つ風。
上州は風強きこと、主婦の権利の強きこと、を以て有名なり。

正嗣の種が取れた。
嫡男を擧げたるをいふ。

常上着の晴衣なし。

平常に美服して、晴の場所に着る衣なしとの義。
生者必滅、會者定離。

生あるものは滅あり、會ふことあれば離るることあるは、自然の常理なりとの義。「涅槃經」壽命無常、一切諸世間。生者皆歸死。壽命雖無常。要必當有歸。「性靈集」表白文「有始有終。是世之常理。生者必滅。即人之定則」一休和尚が狂歌に「生れては死ぬるなりけりおしなべて釋迦も達磨も猫も杓子も」。

上手ごかし。

便依を巧にして人を陥るゝ義。

上手な偽よりは下手な實意の方がよい。

上手の猿が手を焼く。

巧者の失敗したる喩。

上手の手から水がもる。

前の諺に同じ。

正損益徳、報恩つく。

門徒宗にいふ諺。正月は出費多く、入貨少し。七月は出費少くして、入る事多し。報恩講出入相當るとの義なり。

じやうだんにも程がある。

戯言にも定度ありて、過ぐるときは害ありとのことな

掌中の珠を取られたやう。

最愛の者を失ひたる喩。

正直の頭に神やどる。

心の誠なる者は自然に幸福を享くとの義。菅原道真の歌に「心だに誠の道にかなひなば祈らずとも神や守らん」倭姫世記「日月雖照六合須照正直頂」。

正直の儲は身につく。

「博多小女郎浪枕」菜大根屑に置いてても正直な儲は三文でも身につくといひ聞かせた詞反古にして。

正直は一生の寶。

正直の頭に、神宿るの條見るべし。

上田五段に味噌醬油柴船澤山に小者一人。

農家にて、上田五段を有し、味噌醬油に不自由せず、柴船澤山に小者を一人使ふほどの身代は、最も面白き生計なりとの義。

上の作に下の秋收穫。

作りはよく出来てしかも却て收穫の少きをいふ。

生は死の基。

生るゝはやがて死ぬる基なりとの義。

常八月常月夜早稻の飯に鮎汁女房十八吾

二十。

愁心の際限なきこと。

正法に奇特なし。

正しき法門に異變奇蹟あらずとの義。

正法に不思議なし。

前の諺に同じ。

醬油で表染めたやう。

白き布の垢染みたる形容。

漿を請うて酒を得たり。

得る所のものの豫て望みしよりはよしとの義。

上臈が立てば匂ふ、下臈が立てばほこりた

つ。

同じ動作にても、上臈と下臈と非常の相異なるをいふ。

麝香もかげば脳にはいる。

鹿じやう、麝香等嗅げば、小き蟲ありて腦に喰ひ入ると云ふ俗説あり。善良なるものも、あまり手に取り近

くれば慣れて身を害せらるゝとの意ならん。

釋迦が祖父の姉を尋ぬるやう。

方外なる事。途方もなき事。

蛇が蚊をのんだやう。

一口にも足らぬとの義。

蛇が出さうで蚊も出ぬ。

何事か大業なるものを現出しさうにして、實際小事も

出さずとの義。

釋迦に經孔子に悟道。

其道に達したる人に對して、其道のことを説くをいふ

猶釋尊に對して出離解脱の法を説き、孔子に對して仁義道德の教を爲すが如しとなり。釋迦に説法。

前の諺に同じ。釋迦に提婆、太子に守屋。

何如なる人にも、敵有るものなりとの義。釋迦に提婆達ありて佛を害せんとし、聖德太子に守屋大連ありて反對せり、故にいふ。

釋迦にも經の讀みちがひ。

其道に達したる人にも、時には過誤あるを免れかざとの義。

借金を質に置く。

赤貧にして一の典物とすべき資たになく、唯借金を有するのみとなり。

杓子馬も主が使へばあるく。

亂暴にして御しがたきものも、其事ふる主人には能く服従すとの義。荒く曲れる馬も、其主人が御すれば之に順ふないふ。

杓子定規を守る。

法則に拘泥して實地に運用するの妙を知らざるないふ。(一定の形式より外に應用するを能はざるなり。)古の杓子は其柄甚だ曲りたりしなり。言海には曲れるを以て則とす、飯杓子の形よりしていふとあり。又「處世規箴」には、杓子を定規にして物を裁ちたるが如く、凡て中正を得ざるなり、事理を辨へずして事を判決するなどは、是なりとあり。「梅園叢書」「物の直からむ事を欲せば、準繩規矩を用ふべし。これをばさしおきて杓子を取りて、定規とせんに、千萬年を歴るとも、直くはなるまじきことなり。今の人悪しきを取りて、身の過を覆ふは、これぞ誠の杓子定規なるべき」。

杓子で芋をもる。

コロコロとして盛り難し。

杓子で腹を切る。

櫛木で腹を切ると同じ。

杓子は耳搔にならず。

大は小をかなふといふに反して、大なる者は大用すべく、小き所に用ゐ難しとなり。

杓子を渡す。

姑が鳩に、世帯をわたすをいふ。

積善の家に餘慶あり。

善行を積みし家には、後來幸福を享くとなり。「易經」繫辭傳「積善之家、必有餘慶。積不善之家、必有餘殃。」借錢の淵で首も廻らぬ。

多く借錢したること。

尺蠖に頭から足まで尺を取らるゝと死ぬ。

俗説。尺蠖はなきむしなり。

しやくて鯛をつる。

土佐の諺しやくは蟲の名。えびで鯛つるに同じ。

尺も短き所あり、寸も長き所あり。

尺と寸とは比較して、尺は長く寸は短きものなれども、所によりては其一尺も短しといふべきことあり。一寸も場合によりては長き事ありとの義。

車軸を流す。

大雨の降る形容。

蛇の口に蠅。

大食者に少き物を與ふるが如きに喩ふ。

蛇の道蛇。

其道の者は其道の事を能く看破すとの喩。蛇の歩したる道すぢは、蛇が能く知るとの義にとる。「大智度論」「智人能敬智。智論則喜。智人能知智。如蛇知蛇足。」蛇は一寸にして其頭を知り、人は一言にて其志を知る。

其志を知る。

蛇はたとひ小くとも其頭を見れば直に其蛇たることを知り得べく、人は一言を以て其志の如何を知り得べしとの義。

蛇は一寸にして大海を見る。

倥傯なる者は幼時より非凡の志を抱くをいふ。

邪は正に勝たず。

邪道は遂に正義に打ち勝つこと能はずとなり。

娑婆て見た彌次郎。

面識のある人を知らぬ振にするをいふ。

沙彌から長老に飛ぶ。

下位の地より階段を經ずして、一躍して上位に登ることに喩ふ。
沙彌から長老にはなれぬ。

社會の事すべて、階級順序のある者なれば、其階級を經ず一躍して上層の地位に達することかたしとの義。
洒落るには金が費る、じやれるにはひまが費る。

解に及ばず。
主愛ふれば狗瘡す。

解に及ばず。
衆口金をとかす。

衆人の口に出づる力の強きをいふ。「文選」「衆口鑠金」積毀消骨。
殊勝なる狂言にをかしま談義。

狂言はおかしきもの、談義は殊勝なるものなれば物の反對なることにいふ。

出家侍。

出家と侍とは何れも不生産的のものにて相似たるものなりとの義。「狂言記」毘陀「なう御坊出家侍といふて、

いかにも似合つた物で御ぢやる程に同道申さう。」
出家の弟子は子も同前。

難僧の實子の如く扱はるゝをいふ。
出頭鼻をつく、座頭目をつく。

出頭は出頭人にて權勢ある人。座頭とは金貨の事。權勢のある人の許には鼻をつく程多人數集り、金貨の家には目をつく程人の群り來るをいふ。

主と親とは無理なる者と思ふべし。

解に及ばず。
主と親には勝たれぬ。

我事ふる主と親とは従順ならざるべからずとの義。
朱に交れば赤くなる。

白き物を赤き物と一所に交へ置けば、自然に赤くなる者にして、之を人が其交る所に人に感化せられやすきに喩ふ。「明心寶鑑」交友篇「太公曰近朱者赤。近墨者黑。近賢者明。近才者智。近疑者愚。近良者德。近智者賢。近愚者暗。近佞者諂。近偷者賊。」

主の子養ふも身助かる爲じや。

我身の爲にとて主の子を養ふなりとの義。利己的情性

を表はしたるなり。
主の太刀は右に持ち。我太刀は左に持つ。

自分の事よりは、主の事を大切にするの義。右は左より貴きなり。

主の臍を探るやう。

主人の臍を探るとは無鐵砲なる事を試むるをいふ。大膽不敵の事。

主の前とすべり道は早く通る。

目上の人にはかいはる勿れ、敬して遠くとの留意。

主の門は泣いて通れ。

前の証と同じ。

須彌山と丈くらべ。

到底比較にならぬ義。(力足らずとのこと、相違あること)。

巡の拳にも外るな。

手の内に機物の物を握りて、片端より列座の人に施して來る時、慎みて一人も殘すべからず、若し誤りて一人も洩らさば、其得ざる人怒りの心を發して、終には闘争の端をも發すべき事ぞといふ義なり。

鐘馗大臣の棚から落ちたやう。

強勇らしきもの、不意に失策したる状をいふ。

勝負事すきな者は身がもてぬ。

解に及ばず。

勝負は時の運。

勝つも負くるも其時の運命次第と云ふ義。

諸行無常。

世の中の一切の萬象は、變遷流轉する者にして、一瞬間も常住なるものなしとの義。「涅槃經」の語に見ゆ「平家物語」「西園精舎の鐘の聲諸行無常の響あり」我國の平假名は此の諸行無常、是生滅法、生滅々已、寂滅爲樂てふ經文を釋空海の和譯せるなりといふ。

職敵。

同職の者互に訕り憎むこと仇敵の如しとの義。「亢倉子」同道者相愛。同藝者相嫉。「素書」同道相成。同藝相規。
食後に臥して牛となる。

食後に臥するは無作法なれば、作法を教へん爲の方便

にいふ。
職人貧乏他人寶。

職人は貧なるものにして、常に他人の爲に働くを以て他人の爲に寶たりとの義。

食に餅をさくらふ。

未詳。

食は玉の如し。

食物は細くべからざるものなりとの義。

諸國諸大名は弓矢で殺す、京都糸屋の娘は目で殺す。

諸侯は弓矢を以て人を殺すが京都糸屋の娘は秋波を以て人を憐殺せしむとなり。往時京都の糸屋に美人ありしならん。頼山陽子弟に詩の作法、起承轉結を教ふるに常に左の俚語を以てせりと。

(起)大阪本町糸屋の娘。(承)姉は十六妹は十四。(轉)諸國諸大名は弓矢で殺す。(結)糸屋娘は目で殺す。

所帯と火焚とは小さい所から始めよ。

家を立て、生業を成すは、最初に小さくして、漸次大き

く披露すべし、火を焚くに初め小柴などにチロロくもやしつけ、後大なる太き木をさしくべる如くすべしとなり。

所帯を潰す。

家産を落盡し生計しがたきに至るをいふ。

所帯を上手に持つ。

家を巧に治むることをいふ。

所帯を持つ。

男女互に其配偶を得て、新に家を立て生業を爲すをいふ。

庄屋の娘も口説いて見なければ。

假令難事と思ふこと、到底聞き入るまじと思ふことも斟酌なく説いて見るがよしとの義。庄屋の娘を口説くことは難き事といふ意。

庄屋の齒尿。

未詳。

白川夜船を漕ぐ。

坐睡することはいふ。何事をも知らずに睡り込むといふ。

知らぬ顔の半兵衛さん。

故ら知らぬ顔をなし居る事。

知らぬ小歌を誦ふ。

「和漢故事要言」多く世の戒めとなる事の端は、必ず民の口説とする謳歌にあり。

知らぬ米商より知つた小糠商。

知らぬ金商より知つた小糠商の條に出づ。

知らぬ道も銭が教ふる。

金錢によりて何事も辨じ得らるるをいふ。

虱の皮を槍ではぐ。

雞を割くに牛刀を用ふ(ニの部)に同じ。

尻上つて居る。

其處に居らず、他に去らんとするをいふ。

尻馬に乗る。

人の唱ふる所に、雷同附和するをいふ。

尻重。

舉動のまめ／＼しからぬをいふ。容易に立たぬをいふ。

白紙も信心次第。

白紙も信心次第にて守札と同様との義。即ち守札の功驗をいへるなり。

知らざるを知らずとせよ。

己が知らざる事は、知り顔せずには明白に知らぬといひて、人の教を乞ふべしとなり。「論語」爲政篇「知之爲

知らぬ金商より知つた小糠商。

縁故もなき豪商よりは、知己の小商人が却てたのみとすべきをいふ。

知らぬが佛。

其事の様子を知らば、必ず不快に感じ、或は立腹すべきなれども、知らざれば一向無頓着なるものなりとの義。佛とは忍辱如法の者にて怒らぬものなり、いるは短歌のかるたに此諺を記し、石佛の頭に蜻蛉の止まりし様を畫けり、其頭に發すれども、尿すれども、怒らず、是佛の佛たる所以なり。」

尻落ちつかぬ。

何か氣にかゝる事ありて、心の解まらざること。又は其處る所の未だ定まらざるをいふ。

尻瘡の痒さと獨智の可愛はやるせがない。

其情の切にして禁へがたしとなり。

尻が据らぬ。

他に動かんとする心ありて、其處に安んぜざるをいふ。

尻からけて走るやう。

事を爲す精緻ならず、疎策にしてズン／＼飛び進む義。

尻からこき出したやうにいふ。

口きたなく誹謗することをいふ。

尻軽い。

尻重いの反対。

尻くらしい観音。

物事をやりすてにして據はざるをいふ。薬師の前地蔵

後とて暗夜にいふ俚諺あり、其れに同じく後闇い観音

とて観音の縁日十八日より廿三日間に終る故に、闇夜

のことをいひしなり。然るにあとくらしいが、訛して尻く

らいとたり、其意味も亦轉じたるなり。「珍書考」史通十五卷に周靈王の太子晋といふ人能く籥を吹き玉ふ。或時市中に入て遊ぶ、座中に司李と云商人あり、此者常に勢利愚俗にして風雅らしき事會て知らず。唯賢買の所作のみ賢くて有けるが、太子晋の籥の音、風凰の啼く聲の如く面白きを聞けども、更に面白しとも思はず、却て此籥の金玉を以て飾るに意を用ひ、いふやう、晋は此籥の風凰の音より金玉の飾を貪り、市中に賣らば假百金ならんといひければ、太子晋答へて曰、嘆香司李暗ニ賢音。選賢食利。といへり此司李暗音といふ文字よりいひ習はしたる俗諺なり。此語より見れば、物の眩惑なる事を譬ふべきなるに、俗諺りてやり捨にして據はざることをいふは、大に取違なり。」

尻暗い事をする。

私に悪事をなすことをいふ。

尻こそばい。

何となく心の安からぬ義。

尻付小馬の細目。

「鎌倉三代記」姫に見入れた藤三郎、尻付小馬の細目し

てゝいる目の事。

知りて知らざれ。

知つて知らされの條に出づ。

後手をつかふ。

物事遣りばなしにせず、後の取締あること。

尻といふとも口といふな。

食事について卑しき事を言ふなけれ。

尻長い。

人の長居するをいふ。

尻にしく。

蔑視する義。

尻に手が廻らん。

前の一方にのみ力を用ひて、後の一方は行届かずとの義。

尻に火が付く。

火急切迫の場合。

尻に挽臼。

尻重いこと。

尻に帆を揚げる。

退去すること、逸散に逃げ奔ることをいふ。

尻に帆をかける。

前に同じ。

尻に目薬。

見當違ひの義。何の効もなしといふこと。

尻の大きい女は子を多く生む。

俗説。

尻の毛まで抜かれる。

人の爲に馬鹿にせられ嘲着せらるゝをいふ。

尻剝けた。

詐り隠したることの露見するをいふ。

尻短い。

長く留らぬとの義。

尻もむすばぬ糸のやう。

縮くゝりのなき形容。衣を縫ふに針に糸を付し其糸尻

を結び置かざれば、糸伸しの時抜けてしまふをいふ。

尻を据ゑる。

長く居りて、や々に其所を去らざるをいふ。

尻を剃ぐ。

人の詐り隠せることをあばくこと。

尻を引ひく。

尻をはぐに同じ。

汗くひ看經親孝行、長い頭に長左衛門。

越前の諺。のどかに長きことをいふ。

汗くひ看經、唐がらし、熱湯順禮、長左衛門。

門。

前の諺に同じ。又轉じて馬鹿々々しきことにもいふ。

知る人に細をうつたやう。

せればならず、爲るには氣の毒なりと云ふ意。相知る人の罪を犯したるを捕縛する時の心持。

知る者は言はず、言ふ者は知らず。

物事を深く知る者は、口に出さず、知らぬ者が却て多辯なるものなりとの義。「老子經」「知者不言。言者

汗を吸うても同罪。

いさゝかにても、悪事に關係すれば主動者と同様に罪ありとの義。食物を煮たる汁を吸ひしのみにして其の肉を食はざれども、其汁を吸ひたる以上は其の肉を食ひしに同じといふ意に取る。「禪林句集」四言部「呷汁

汁をたく。

共謀することはいふ。

白鼠。

福の神なりといふ義にて、商家の番頭手代が、主人に長くよく勤め上げたる者をいふ。「廣小路」「酒蔵の白鼠

白鼠。

なり上野の花。花さく故に酒よく賣るゝをいふ。花は酒屋の福の神といふ意なり。「抱朴子」「鼠壽三百歳。滿百歲則色白。善惡人而下名。仲。能知三一年中吉凶。及千里外事。句に曰く「白鼠大福帳へ穴をあけ」

士別れて三日當に活目して見るべし。

吳下の阿蒙(コノ部)參照。

詩を作るより田を作れ。

詩を作るより田を作れ。

風雅な事とするより、實利實業に従事するがよしと戒めたるなり。

す

好いた同士は泣きても連る。

互に思ひ思はれた男女は、泣くほどの苦みをなめつゝも、離るゝこと能はずして、連れ添ふといふ義。

酸いも甘いも承知。

處世の眼きことを熟知し盡せりとの義。

酸いも辛いも御存じ。

前の諺に同じ。

無音屁を放つた者の舌は黄色い。

俗説。

姿は俗性をあらはす。

人の風姿舉動によりて其人と爲りが知らるゝとなり。

酸が戻る。

老人の思想の幼兒に返ることをいふ。橙子の既に熟したる時期を過したらんには、其酸味また未熟の時の如く變ずる故にいふ。

好かれて難義。

人に慕はれて、却て迷惑するをいふ。俗諺「いやて辛ひすかれて困る御氣の毒がた外にある」

好きこそ物の上手なれ。

好むに依つて其事が上達すとなり。

過ぎたるは猶及ばざるが如し。

及ばざるは宜しからざれども、過ぎたるも亦同様に宜しからずとなり。「論語」先進篇「子貢問師與商也孰賢。子曰師也過。商也不及。曰然則師愈與。子曰過猶不及。」

好きな物に崇なし。

己の嗜好する食物は、やゝ多量に食すとも、害なしとの義。

數寄に赤烏帽子。

様子の可笑しきをいふ。數寄とは天性の偏僻をいふ。

「瓦礫雜考」鹽尻に義教將軍の時、松浦肥前守、數寄も
の赤烏帽子を着して参りしかば、將軍其姿を自圖して
賜ひした、肥前守難染の後、彼像を南禪寺におさめしと
かや。當時の諺にすきに赤烏帽といへるはこの故事な
りといへり。芭蕉が門人乙州といへるものゝに好の赤
烏帽子上林の赤手拭はおかしけれどもとあり。」

好には身を砕く。
己の好む所の道には、寢食をも忘れ、其身の勞苦をも
顧みずとの義。
好には身を扮す。
女子の身をやつすをいふ。

生計は草の種。
草の種の培養如何によりて、花實に其否有るが如く、人
も生計の方法如何によりて、貧富様々の相違あるをい
ふ。

好は身を透す、芥子は鼻を透す。
己の嗜好する所の爲には身を粉にし之が爲に辛苦する
者なりとの義。芥子は鼻を透すとは唯對句に押韻した
るまでなり。

隙間から来る風は寒い。

室外の寒さよりは、寧ろ戸障子のすき間より入り来る
風が却て寒し、人は大なる事よりも、却つて小事に一生
を誤るとの義。

宿禰さへ高が知れた壽命、今時の人に九十
が關の山。

武内宿禰長壽なりといへども、五百年も生き存らへた
るにもあらざれば、今時の人は、八九十まで生きるが、
長壽の極なるべしとなり。

過ぐれてよきものは、すぐれて悪し。

過ぐれてよきと思ふ者は、また過ぐれて悪しき者とな
りて、災禍を招くの媒介たるべしとの義なり。老子の
所謂「美者、不祥器」との義なり。「事文類聚」叔向欲
り娶申公巫臣氏。其母曰、吾聞甚美必有甚惡。夫有尤
物足以移人。苟非德義。則必有禍。

鮓をおしつけたやう。

物の抑壓せられたる形容。

珠數ばかりで和尚が出来ぬ。

實力なければ他の事情を備ふとても、職務を完うする
こと能はずとの義。
進み立つ方に障りなし。
凡そ事を爲すに當り、其吉日たると、悪日たるとを論
ぜず、唯九思一行正道に法つて之を爲せば變異の事あ
らずとの義なり。

進むと早きものは退くと急なり。
急速に進歩するものは、また急速に退歩すとの義。
涼んだ。
ものを分配する時など、獨其機に洩れて得る能はざる

雀海に入りて蛤となる。
俗説。
雀が鷹を生む。
親より優りたる子を生みし喙。鷹が鷹を生むに（下の
部）同じ。

雀の上の鷹、猫の下の鼠。
己れより下の者に對しては、雀の上の鷹の如く威張り、
上の者に對しては、猫の下の鼠の如く恐れ入つて居る

雀の子飼。
遊里に用ゐる隠語なり。「言原經」雀の子飼或人間ひて
いづれの傾城も、初對面には飯くはぬなり、それにて
夜食までは無食か如何、初山の云、雀の子飼と申す
事あり、日暮方に揚屋の居間にて、髪結直す其時の揚
屋の娘が、又やりてか草枕に湯漬いだしぬるなり。是
を名づけ食すると見えたり。されば飯のほどいたるに
てそだつ故、雀の子飼と申侍り。

雀の嘯るやう。
喋舌する者の形容。
雀の千聲より鶴の一聲。
無勢力の者が多人數集りてがやくいふとも、心服せ
ぬが、一人の勢力ある者の制する一言には、服従する
との義。「淡香」那陽傳「鷺鳥聲、百不如一鶴。墨子禽
子問曰多言有損乎、對曰蝦蟇日夜口乾、而人不聽之。
鶴雖三時夜而鳴、天下振動。」

雀の涙ほど。
至て些少なる喙。

雀の糞悦すずめのかうりこび

折角悦びしことの徒なりしなふ。雀の糞を見て喜びたるに、米なくして失望なりとの意にとる。

雀百文で躍忘れずすずめひゃくもんてうたがわすれず

幼稚の時より習慣となりしこと、習ひ覚えし事は、年老いても猶失せやらぬものなりとの義。

硯に文字書くとさかしらごとく逢ふすずりもじか

俗説。

硯へ文字を書くと手が上達らぬすずりもじ

俗説。

硯を洗はぬと手が上達らぬすずりもじ

俗説。

筋骨をぬかれたやうすねぼね

力ぬけしたる義。

すつぼんが時を告ぐるやうすつぼん

難いこと、或は無きことの形容。

すつぼんが塗桶へのぼらうとするやうすつぼん

すつぼんにも上られずとの義。

すつぼんが蓼食つたやうすつぼん

未詳。

捨つる神あれば助くる神ありすつ

捨つるものもあれば助くるものもあるをいふ。

捨つる神あれば捨ふ神ありすつ

前に同じ。

捨賣に相場なしすてうり

捨賣として物を捨つるが如くに安く賣却する際には一定の直段といふものはなしとの義。

棄兒は世に出づるすてこ

棄てらるゝほどの者は、困苦する所多きが故に、其身心を鍛ひ、以て身を立つるに至るものなり。

己にかみ己は下につきにけり、己はみなはなれ己はみなつくおのれ

是は小野篁が歌にて己己己の相似なれども異なる所があるを指示したるなり。

鮓でも蒟蒻でも食へぬやうす

制御しがたきもの形容。

捨鉢をいふすてばち

悪口すること、自暴自棄の言をなす事。

捨てる子も簀の下すて

親の子を愛する情の切なるをいふ。

砂地に小便すなち

溜まらぬといふこと。

砂嘴ひやうすなか

無味乾燥なる形容。

砂の中の黄金すな

群列中に卓越せるものあるをいふ。

砂を絞りにて油をとるやうすな

木に練りて魚を求むるやうといふに同じ。

砂を炊いて飯にしやうとするやうすな

前の語に同じ。

脛に疵ある者は、竹藪に入る能はずすね

悪事を働きたるものが人中に出づる能はざる喻。

脛に疵持ちて笹原歩行かれずすね

前に同じ。

脛に疵持つすね

弱點を有すること。曲事のあること、などをいふ。

脛より火を出すすね

困窮甚しきこと。

酔の蒟蒻のといふす

「室町千巻歌」酔の蒟蒻のといふ付けて「

すばくれ者遠くより腰を屈むすばくれ

外面溫柔を粧ひて、阿諛するものをいふ。

滑つたの轉んだのといふすべ

彼是と言ひかけたをいふ。

滑り道と御経は早いがいすべ

すべり道と御経は早いほどよいともいふ。

相撲の果は喧嘩になるばくちの果は盗になるすま

解に及はず。

相撲馬鹿取る伶俐見る。

愚者は常に事の渦中に没し伶俐者は之を傍観すといふ譬。

隅から隅まで。

行届きたるをいふ、洩らす所のなきこと。

角に雀。

人の居住など其住み易きにいふ。歌に「住吉のすみに雀がすなかけて、さぞや雀は住みよかるらん。」

墨は鬼にすらせよ、筆は鬼にとらせよ。

「遊筆録」唐墨如病兒。把筆如壯夫。墨をするには力を入るゝこと少きを貴び執筆の勢は力多きを貴ぶをいふ。

墨繪にかく白鷺。

墨にて白き者を書くこと能はざる者なれども、繪師は墨色の濃淡の妙きを以て、白鷺をも書くなり。

墨を逆にすると雨が降る。

寸陰を惜む。

時間を空費せざる義なり。「晋書」陶侃傳「侃嘗語人曰、大禹聖者、乃惜寸陰。至故衆人。當惜分陰。豈可逸遊荒醉。淮南子」原道訓「聖人不貴尺之璧。而重寸之陰。時難得而易失也」

寸善尺魔。

善は早く爲せ、一尺ほど躊躇する間に、魔が生じて隙罅となるに至るべしとの義。

濟んだ事をいふと鼠が笑ふ。

濟んだ事を彼は言ひ出すものを嘲りていふ。

寸鐵人を殺す。

僅かの刃物も、鋭きは能く人を殺すに足る如く、言辭文章等至て簡短にして、其要を盡すことあるに喩ふ。

「鶴林玉露」宗果論禪曰。譬如人載一車兵器。弄了一件。又取出一件。來弄。便不是殺人手段。我則只有寸鐵。便可殺人。朱文公亦喜其說。蓋自吾儒言之。若子貢多聞。弄一車之兵器者也。管子之守約。寸鐵殺人者也」

濟むも濟まぬも水屋の喧嘩。

濟むも濟まぬもなしといふほどの意。すむといふから

水屋のけん嘩としゃれていひかけたるなり。住めば都。

何如なる僻陬の地なりとも、住み馴れたればよしとの義。

酔屋の看板。

上手(上座)に通はせたるなりといふことの謎。

榎木で芋を盛る。

物各其の器にあらざれば、事自ら無効に歸するをいふ。

榎木で重箱を洗ふやう。

すみぐくに行渡らぬをいふ。

榎木で腹を切る。

其實なくして儀式だけの事をなす喩。

榎木に羽が生えて、天上するやう。

卑賤なる者が意外の出世する喩。

榎木に羽が生えるやう。

前の謎に同じ。

榎木の穴へ糸を通すやう。

すり—する—すぬ

容易きをいふ。

榎木の年は後へとる。

榎木は年数を經るに従ひて、後の方へ減りゆくものなり故にいふ。

摺衣着たりと夢見るはわが事を人に言ひは

やされん前兆。

「萬葉」摺衣者有跡夢見津解者執人之言可將繁。」

榎鉢の尻を洗ふと姑が早く死ぬ。

俗説。榎鉢の尻を能く洗はしむる方便に出でたるならむ。

駿河の富士と一里塚。

高低非常の相違あるをいふ。

爲る事なす事いすかの嘴。

いすかの嘴(ハ)の部を見よ。

爲るは一代名は未代。

人は一代名は未代(ヒの部)に出づ

水魚のおもひをなす。

「諺草」「三國志」諸葛亮傳云先主遂詣亮。凡三往乃

見。固屏人與計事善之。於是情好日密。關羽張飛等不悅。先主曰。孤之有孔明。猶魚之有水也。願勿復言。及稱尊號。以亮爲丞相。此故事により、今も人の交むつまじきを水魚の思を爲すと云。水魚の交といふ。

水魚の交

前の諺を見よ。

西瓜船の着いたやう。

坊主の多人散集りたる形容。

水品は塵を受けず。

潔白なるもの、不義を厭ふ喻。

水品のたまは魔除になる。

俗説。

水精を灰汁でみがいたやう。

潔白なる喻。

水天宮の縁日には雨が降る。

俗説。

粹は身を食ふ。

粹とは俗にいふ通人の所爲なり。通人は其粹の爲に終に資産を失ひ、身を滅ぼすに至るとなり。

粹は悋氣せぬもの。

「傾城酒香童子」「何と粹は悋氣せぬものとはどこからの法度ぞ」

水風呂桶で午勞を洗つたやう。

大なるものの中に、小なるものを入れたる形容。猥褻なる事にいふ。

水泡に歸す。

水の泡の消滅する如く無効に歸すること。

末四十より今三十。

未始終よりと四十とを通はせて今三十といひなせるなり。後の四十の儲けよりは今の三十が貴しとなり。

据膳食はぬは男にあらず。

女の方より情を運ばれて、應ぜざるは男にあらずといふなり。

据膳食はぬは男の恥。

女より情を運ばれて、之に應ぜざるは男の恥といふ義。

聖人は皆正夢にして、雜念より起る夢を見ることなしとの義。「淮南子」「夫聖人用心杖性依神相扶而得終始。是故其寐不夢。其覺不寤。」莊子「古之真人。其寤不夢。其覺無寤。」

末の百兩より今の五十。

「宇治拾遺物語」「今日の命物喰はずば生くべからず、後の千々の黄金更に益なしとぞいひける。それより後の千金といふこと名譽せり」

末の松山波こそさじ。

將來其契を破らざるべしとの義、百人一首「契りきなかつたみに袖を絞りつゝ、末の松山波たさじとは」とあるより出づ。

末は雨。

土佐の諺 病人などの終には死ぬるをいふ。

せ

生ある者は死あり。

「しやう者必滅(シの部)の條に出づ。

生計は草の種。

「さいきはひは草の種(ク)の部)に出づ。

聖人に夢なし。

急いては事を仕損ずる。

物事急速にせんとすれば、却て失敗すとの義。「論語」子路篇「子夏爲莒父宰。問政。子曰。無欲速。無見小利。欲速則不達。見小利。大事不成」程子曰「事以急敗而者十常七八。」古歌に「いそがすばぬれざらましな旅人のあとより暗る、野路の村雨」

急いでば危相もゐるもの。

青天白日。

冤罪の雪ぎ得しこと潔白なるをいふ。

小尉貧乏やりくり中尉。

軍人生活の少尉時代は貧乏にして、中尉時代は多くの交際費を要すと云ふ義。

小寒の氷大寒に融く。

大寒よりは小寒の却て寒きをいふ。

小人間居して不善を爲す。

孔子の語に出づ小人徒然なるまゝに悪事を爲すとなり。

小人罪なし玉を抱いて罪あり。

小人は慾の爲に心のくらむをいふ。

小人と女子は養ひがたし。

女子と小人とは養ひがし(チの部)の條に出づ。

小人の心を以て君子をはかる。

己の卑しき心をもて君子の心を付度するをいふ。

小人の腹は肥し易し。

小人は利を以て導き易きをいふ。

小智は菩提の妨。

人の短少なる智力、却て事を害し或は宗教上の信仰を妨ぐとの義。「和漢故事要言」世智辨なる智、偏屈なる思慮、僻案の才は、世に用ゐる所なしと也、五維粗に云果報を圖るの念を以て佛を學びば成佛の日無けん佛を學ぶ者は悪眼を以て入る時は易しといへり。「莊子善性」小識傷徳、小行傷道。「說苑」小快害義、小慧害道。

小敵と見て侮るな。

小敵なりとも、決して油断すなどの戒。「左傳」嚴文仲曰、國小不可易、無備不可恃。

小の虫を殺して大の虫を助ける。

小敵者の利害を機性に供して、多数の幸福を計るべしとの義。

勝負はさほひのもの。

勝負は競争なりといふ義。

勝負は時の運。

勝つも負くるも其時の運次第といふ義。

小便三町糞八町。

行步中兩便をたすために後ろ、路程の割合。小便二町飯一里ともいふ。

小便する。

破約すること。

小利大損。

「說苑」敬慎篇「小利大利之殘也」

急いでば事を爲損ずの條参照すべし。

小を捨て大につけ。

小事よりは大事に心がくべしとの義。

瀬音高く聞ゆれば雨近し。

解するに及ばず。

急かねば事が間に合はぬ。

愚圖くせず速になせとの教。

積羽船を沈ましむ。

小事も積れば大事と爲るに至るとの義。「史記」積羽

沈舟。群輕折軸。衆口鑠金。積毀銷骨。

積毀骨を銷す。

前の跡を見よ。

石生の露は目の薬になる。

俗説。

石菖蒲は目の薬となる。

花譜に見ゆ。

積善の家には餘慶あり。

「詩經」常棣「脊令在原、兄弟急難、每有良朋、況也永歎。」

石田を得る如し。

物を得て用なきをいふ。石田は苗を立つるに所なし、有りて用なし故に喩ふ。

鶴鶴の親しむやう。

兄弟の相親しむに比していふ「詩經」常棣「脊令在原、兄弟急難、每有良朋、況也永歎。」

長くらべなら横て来いといふやう。

肥満したる體。

世間師。

諸所に旅行し世故に通じたる者をいふ。

世間知らずの高枕。

諸所に旅行し世故に通じたる者をいふ。

世間知らずの高枕。

唯家のみありて、旅行をも爲さず、世間の事に通じ

ざる者が無頼者に世を送るをいふ。

世間に鬼は無し。

世に不情のものは無しとの義。

世間に人鬼はなし。

前に同じ。

世間は廣いやうで狭いもの。

解に及ばず。

世辭で丸めて浮氣で粉塗る。

解に及ばず。

せいなげさがせば蚯蚓出る。

きたない所はちくれば蚯蚓出る(キの部)と同じ。

節季の感胃は買つても引け。

俗説。

節季の悪銭と見ともない女房のわまりたる事もなし。

節季に金融通塞して餘剩あることなく、又醜女といへども餘らずそれく嫁して夫を持つとなり。

節季のからくり。

節季には色々工面するをいふ。

節季の病氣は平日の不養生。

大晦日に支拂に困難するは、平日不經濟なりし罪ぞといふほどの意。

切ない時の神だのみ。

困つた時の神だのみ(コ)の條に出づ。

節は時をさらはず。

季節は時に關せずして、到来すとなり。

節分の豆を初雷に食すれば雷に打たれぬ。

俗説。

雪隠で槍をつかふやう。

十分に働くこと能はざるをいふ。

背を知らぬ女の智慧。

目前の事にばかり氣が付きて、後の思慮なきが女の智なりとの義。

背に眼はなし。

後の事を見ること能はずとの義。

背に腹は代へられぬ。

物事には、緩急輕重の別ありて、眼前切迫の事の爲には、未來高遠の事を顧みる遠なしとの義。腹内臟腑を治めたる大切なる所なり、されば腹部に病ある時は、背に炎をすえても、之を治せざるべからず、腹はもと背にかへがたしとなり。

錢ある時は鬼をも使ふ。

金錢ある者は、何如なる人をも雇使することを得べしと義の。

錢ある時は錢無きの日をおし。

錢ある時は、浪費し易きものなれば、錢無き時の苦しみを思惟して之れを慎めとなり。

錢金に親子なし。

金錢の事に關しては親子の間柄も他人と同様なりとの義。

錢金は他人。

前の跡に同じ。

錢金は湧き物。

金錢は働きて之を得ること難からずとの意。

錢無き男は帆なき帆前船の如し。

活動すること能はざる義。

錢無しの市立。

目的を達すること能はざる事に奔走するが如きに喩ふ。「論衡」手中無錢之市。貨主問曰。錢何在。對曰無。

錢貨主必不與也。夫胸中不學猶手中無錢也。

錢は足無くして走る。

金錢はそれからそれへと渡りゆきて、遍く世に流通するものなりとの義。

錢は耳なくして聞く。

金錢は何事をも辨じ得らるとなり。錢は何事にも効能あり、効くと聞くとを道はせたるなり。

錢持たずの閑子擇。

自己の義務を果さずして、勝手な事を通さうとするを

錢金圍うも姫を圍うな。

金錢は貯蓄するとも、姫はいつまでも函入娘となし置

くなけれ、早く嫁がせよとの義。
但歌に「錢や金こそ圖てもよけれ、姫を圖ふなお婆になら」とあり。外妾を圖物ともいへど、これは其義にあらず。

錢を噛むやう。

高價の食物を食ふにいふ。
是非は道によりて賢し。

其道に熟練せる者は、經驗に富むを以て、自然に其是非を判ずること、すぐれたりとの義。

善悪は友による。

人は善悪の友にふる(ヒの部)の條に出づ。
善悪は友を視よ。

其人と爲りの善悪を知らんと欲せば、其交る所の友を視るべしとの義。「家語」六本篇「不知其子。視其父。不知其人。視其友。」孟子「萬章章」一郷之善士。斯友二郷之善士。天下之善士。斯友二天下之善士。」

線香もたかず尼もひらず。

沈香もたかず尼もひらず(チの部)の條に出づ。

せんかやすりか。

利を占むることの非道なる者ないふ。
千金の子は市に死せず。

次の諺を見よ。
千金の子は堂に垂せず。

身を慎しむ者は危きに居らずとの義。「史記」千金子不垂堂。百金子不騎衡。「堂に垂せず」とは、堂の外邊に坐せざること、衡に騎らずとは樓殿の邊の欄楯にもたれぬこと。

千金の子は盜賊の手に死せず。

前の諺に同じ。蘇軾の留侯論「千金之子。不死於盜賊。何者其身之可愛。賊盜之不足以死也。」

千鈞の弩は驪鼠の爲にはなたず。

小を制するに大を用ゐざる義。魏志「千鈞之弩。不爲驪鼠一發也。」

千金の幣。

吾身のほどを見知らざる誤なりとの義なり。魏の文帝の典論に「里語曰家有數幣。享之千金。斯不自見之患也。」

千金萬金より一遍の回向。

死後墓前に金を積むも益なし、唯其冥福を祈れとなり。

疝氣もつり方。

罌丸もつり方(キの部)と同じ。

千句一句。

千言も一致といふに同じ。

千軒あれば友ぐらし。

口すきより友すき(ハの部)と同じ。家多き所は仕事多きを云ふ。

千言も一致。

言葉多く設せども、結局理の至極は、一言に過ぎずとの義なり。天台の釋文に「一目之難不能得鳥。得鳥之難唯是一目」此文の義は一目の難にては鳥を得がたけれど、鳥の得る所は唯是一目なりとなり。
戦功ある人の系圖末孫まで可の字で下に置かずわけ用ゐらる。

消息文にて、何々すべしと書くには、可の字は可被下、可被成と必ず上に用ゐらる。戦功を立てたる人の子孫わけ用ゐらるといふいひかけなり。
千石を取れば萬石を羨む。
慾に際限なき義。

千石萬石も食一杯。

俸祿萬石の大家も食する所は一杯に過ぎず、飽く所は貴賤同一なり、欲を少くし、足ることを知るを第一とせよとの義なり。「韓詩外傳」北郭先生妻曰結駟列騎所安不過容膝。食前方丈所甘不過一肉之味。魏清老子經解「諺語有之。羅綺千箱。不過一饜。食前方丈。不過一飽。」趙清獻公座右銘云「良田萬頃。日食二升。大厚千間。夜臥八尺。」

詮索者目の前に在り。

「史記」秦始皇本紀「野諺曰。前事之不忘。後事之師也。」

前事の忘れざるは後事の師。

「文選」勸進表「前事之不忘。後代之元龜也。」

前生よりの約束事。

宿世の縁なりと云ふ事。
前車の覆るは後車の戒。

前に行く車、悪しき路に入りて、顛覆するときは、後に行く車、之を見て戒めとなすとの義にて、前人の失敗が、後人の鑑となる喩とす。「說苑」善說篇「公蠶不仁

日用舟曰前車覆後車戒。蓋言其危。戰場にて命を惜むは大卑怯者。

解するに及ばず。神僧の索麵食ふやう。

善立ちて名流れ寵極めて禍多し。

善を積めば芳名が世に知れ渡り。人の寵を極むれば、禍にかゝること多しとなり。梅檀は二葉より香し。

非凡超群の人は其幼時より勝れて著しき所ありとの義。(梅檀は二葉の時より香氣高し故に喩とす)「源平盛衰記」梅檀は二葉より芳くして四十里の伊蘭林を破し類伽島は卵の中にてあれども其聲諸島に勝れたり。雪隠で餓頭。

人知れず己一人にて利を占むるをいふ。又た旨し穢しとの意も言ふ。

雪隠で槍をつかふやう。

とつゝぬんで槍をつかふやうの條に出づ。雪隠でし。

三上吟といふ故事より出づ。車上、馬上、厨上は詩を考ふるによし。しほ小便の事、をかく掛けて曰へるなり。

雪隠の錠前

咳拂の事。厨中にありて咳拂すれば外より人の入り来らざる故に曰ふ。

雪隠の鼠は一生涯を食ひて命をたもつ。

如何なる卑しき事をなしたも生活の出来る事をいふ。千丈の堤も蟻の穴より崩る。

大害の小事を忽にするより起る義。「韓非子」喻老篇「千丈之隄以蟻蟻之穴潰。百尺之室以突隙之烟焚。故曰白圭之行隄也塞其穴。文人之慎火也。塗其隙。是以白圭無水難。文人無火患。」

千疊敷で寝ても疊一枚。

千石萬石い食一杯又千疊に寝かぬいふに同じ。雪隠をきれいに掃除すると美しい子を生む。

雪隠の掃除を怠らざらしめん爲の方便に出づ。千疊に寝るも一疊。

廣い家に住むにも、寝る所は一疊にて足るとの義。

船頭多くして船山へ上る。

人数多き爲に却て其事の進歩を妨ぐるをいふ。「時經」小曼篇「謀夫孔多。是用不集。」丹鉛錄「中潭之歇枴公多舟必破。四公子機棋必不勝。」

船頭の一時槽。

一時槽を出して溜ぐをいふ。

船頭のそら急ぎ。

船頭がよく空に急ぐ故にいふ。

千日に刈るかやが一時に亡ぶ。

積日の經營功勢を一朝にして亡失するをいふ。

千日の功名一時に亡ぶ。

前の語に同じ。

千日の勤學より一日の名匠。

千日獨學せんより一日名匠に就くが優るとの義。「楊子法言」「務學不如務求師。師者人之模範也」「桓譚新論」「三歲學不如三歲擇師矣。」

千日の早魃に一日の洪水。

千日の早魃と一日の洪水と匹敵すとの義。早魃の害よりは、水害の恐るべきをいふ。

善に強い者は悪にも強い。

悪に強いものは善にも強い(アの部分)に出づ。

先入主となる。

先最初に腹裏に入りたる事が、主となりて、後に道理を聞きても信じがたきをいふ。「前漢書」息夫躬傳「唯陛下親覺古戒。反覆參考。無以先入之語爲主。」「楊子家訓」「養其良知良能。當以先入之言爲主。」

千人の指す所は違はず。

多数の人の指す所に誤あらずとの義。「前漢書」「偃師曰千人所指無病而死。」

千人の諾々は一士の謬謬に如かず。

「史記」商君傳「千羊之皮不如一狐之腋。千人之諾々不如一士之諾々。」

千人持の蕪弱。

いどの大木といふに同じ。

千年の田地八百の主。

財産の保ち難きをいふ。千年間には一の田の持主轉々

千の倉庫より子は寶たから。

多くの財寶より子を貴しとする義。山上憶の歌「白けれも黄金も玉も何せむにまされる寶子にしつめやも。」善は急げ。

善き事は早く行へとの義「左傳」成公八年傳「君子曰從善如流注如流。喻速。」

善は小なりといへども爲さるること勿れ。小事と雖とも善き事はまざるべからずとなり。

煎餅蒲團せんぺいぼたん。うすき蒲團の事。煎餅の如くうすしとなり。「太平記」一の直なる猿が九の鼻缺猿に笑はれて逃げ去るに異ならず。

煎餅に金槌せんぺいかねづち。何の造作もなく直に毀さるゝとの義。煎餅のやう。

膳へ小皿をふせて食ふと貧乏する。蒲團等の薄き形容。俗説。

千篇一律せんぺんいちりつ。

凡て一様の形式に出て、毫も變化なき義なり。先鞭せんべんを着く。

人に先ちて事を爲すをいふ。「書言故事」東晉劉琨。與祖逖爲友。與祖逖故書曰。吾枕戈待旦。志氣壯。常恐祖生先吾著鞭。」

千羊の皮は一狐の腋せんやうのかはいつきよのえきに如かず。虚言をいふこと、千に三つ位倍なる事ありとの義。

千里の馬はあれど一人の伯樂せんりよのうまはあれどひとりのかくらくはなし。千人の語々は、一人の語々に如かずの條見るべし。

千里の行は一步より始まる。才能の士はあれども之を識別して用ふる人なしといふに喩ふ。韓退之の雜説に「世有伯樂。然後有千里馬。千里馬常有。而伯樂不常有。」

何事にて近きより遠きに及び、小より大に至るものにて、千里の遠き道も一步づ、運びて遂に達すとなり。「老子」合抱之木生於毫末。九層之臺起於累土。千里之

行始於足下りやうしはつたすげ。

千里の道も一步より始まる。前の諺に同じ。

千里の道も足下よりせんりよのちみちもあしもとより。前の諺に同じ。

千里一はねせんりよいちはね。一時に飛び踰えて急進すること。

千里も一里せんりよもいちり。遠き路程をも苦とせずとの義。千里も猶一里の如しとなり。俗歌に「思うて通へば千里も一里、逢はず歸れば又千里」

千慮の一失せんりよのいちしつ。種々思慮する中には、時に過誤なからずとの義なり。千兩あれば壹萬兩に殖ちかさんことを願ふ。

千兩の方へ編笠一つせんりよのあたへあみかさひとつ。人欲の際限なき義なり。大金を償ふに微細な物品を以てするをいふ。千兩の應もはなして見ねば分らぬ。

そ

千兩八百十三年せんりよはちひゃくじゅうさんねん。

中古祝儀の詞として用ひたるなり。常に千兩箱ありて壽命も八百十三年永らへる様にとの意なり。

宗祇の蚊帳そうぎのかや。

昔連歌法師の自誇りて、我は宗祇の蚊屋に三年寝たりといひしは一種の諺となり、今俗に見えなむ程の事を宗祇の蚊屋といふ。

宋襄の仁、尾生の信そうじやうのに、びせいのしん。役にだぬ仁、守るに足らざる信をいふ。「左傳」宋襄公與楚戰也。公子目夷曰。擊之於敵未陣。公曰。君子不困人於厄。不攻。遂却爲楚所破。世笑謂宋襄之仁矣。尾生の信は尾生の信(ヒの部)の條参照。

漱石枕流そうせきしんりゅう。まげ娘の事。石に漱き流に枕す(イの部)の條に出づ。

象のやうだ。

泰然として不動の姿勢なる人をいふ。

底脱ひしやく。

記憶の悪しき者をいふ。押してもく足らぬなどもいふ。

總領の甚六。

長男にして愚なる者をいふ。或は總領の順縁ともいふ。總領は縁を順に受くるをいふとぞ。

粟散邊士。

「諺草」小國を粟散邊地と云事佛書にあり、楞嚴經會解溫陵曰粟散即小國の小主天下に散する事粟の多きが如し。

底ぬげ。

飲食物の嗜好甚だしきをいふ。轉じて總て底止する所を知らず、事々好むに云ふ。

鹿相が御意になふ。

愛寵せらるゝ事の深くして失誤したることにて却て氣に適するとなり。「淵鑑類函」失誤「夏侯勝、質撲見時、謂

上爲君、誤相字上前、上以是親信之也。」

鹿相にも取得あり。

同じ鹿相にても取り所ありといふ義。

鹿相者と悪銀。

鹿相者と悪銀とは孰れも世間に多しとの義。

「心中二腹帯」鹿相者と悪銀はいかさま世間に多い物」

廉相も時の一興。

廉相を想するにいふ。

楚辭に梅なく、萬葉に菊なし。

楚辭には梅の文なく、萬葉に菊を詠したる歌なしとの義。

鼠首事を破る。

人の決断力に乏しく左に右に迷ひて何れとも決する能はず遂に其事を失敗するに至るをいふ。鼠の性疑心多く穴に入らせんと欲するに其首を左右して進退定まらざるをいふ。首鼠兩端を持すともいふ。

袖の下をつかひ。

賄賂を取ることを。袖の下とは賄賂をさす。

袖は長くとも手は伸ばされぬ。

人の物は盗むべからずとの戒。

袖振り合ふも多少の縁。

人の途中往來にて袖と袖とすれ合ふのもいくらが因縁ありといふ義。袖の振合他所の縁ともいふ。

卒塔婆を見れば三惡趣離る。

卒塔婆を見れば、人生の無常を感じて、菩提心を起すをいふ。

其罪をにくんで、其人をにくまず。

「孔叢子」孔子曰可哉。古之聽訟者、惡其意而不惡其人。

其手は食はぬ。

其計略には陥らぬとの義。

其身正しければ令せずとも行る。

「論語」子曰其身正。不令而行。其身不正。雖令不

從。蕎麥かす女と、にきび男。

二つながら青春の頃にある皮膚病なり。青年男女の事を並べて言へるなり。

蘇民將來子孫。

「諺草」今俗符章に記し、又諺の如くもいふ事也。神代直指抄に、神代外縁を引て云。素戔鳴尊根刀國に降りたまふ時、雨にあひ風にふかれ、辛勞甚し、よりて宿をもる神にはかりたまへとも、諸神ゆるされず。時にみた、い乃國に、蘇民將來巨且將來といへる兄弟の者あり、蘇民は家貧しけれども心憎愛甚なり、巨且は家富みけれども心憎不仁なり、素戔鳴尊先宿を巨且にかりたまへり、こたんかし奉らず、蘇民にかり給ひしかば、かし奉りぬ、且又奉養費進分の及ぶところを盡せり。素戔鳴尊いといたうよるこびおほし、いかにしてか恩を謝せんとおぼしめす、其夜あさわの國より暴疫鬼來りて國民を亡さんとす。尊あらかじめ其事をしるにめして、蘇民に告げて宣く、此夜此所に惡神來るべし、ふれんもの亡敗すべし、我其禍を除く方しれり。汝等及家の内の者等、布輪を帯ぶべし、しからば禍も染着する事能はじ、蘇民命に隨ふ。其夜果して暴風通りぬ、明日所の人民盡く病瀕して、或死、或は病みき。尊蘇民に告げて宣く、後世疫氣流行せん時、汝が子孫も家門に懸して蘇民將來子孫宿と誓し、且布輪を門楣にかくべし、然

らば疫氣のわざはひなまぬかるべしと。世俗今に門楣に蘇民將來子孫處とかくは、此故事なり。」
損して徳取れ。

眼前の小利に損せざらんと欲して、却て得失相償はざる大損を招くことあり、されば現在に小損を忍びて、後の大損を防ぐべしとの義なり。
孫は笛を吹く。

祖先の遺教、其子孫に及ぶ義なり。名人の門に名人出づるをいふ。「誣草」此誣は其先祖笛を吹かば其子孫も亦必笛ふく者あり、是祖先の遺教に係る也、國史纂異云唐閻立本見張僧繇畫曰名下定無虛士是異言同意のみ。」
損を爲なけりや儲はない。

商業上の語。
孫を引く。
祖先の才能子孫に遺傳するをいふ。其血筋の者に其事ありとの義。
ぞめき學問。

學問しても、徒に名號を邀むるのみなるをいふ。

「淮南子」哀世漢學不知原心反本。
抑々の始。

事の起るをいふ。文章中一落段を告げ更に書き起す時、抑と云ふ語を用ふるより來れるならん。
空耳をつかふ。

聞えども聞えざる體を裝ふ者をいふ。
空似。

縁なき人の容貌の肖たるをいふ。
空向いて唾はくやう。
空向いての唾(アの部)の條に出づ。
空向けに石を投げるやう。

前に同じ。
空を使ふ。

とほけて、知れることも知らざる眞似をするをいふ。
反が合はぬ。

相拂りて合はざるをいふ。
反うたす。

刀を落しきしにしたる形容。朱綯の大小に反うたせ云

剃立三つ。

「和漢故事要言」敵と思ふ人は、たとひ出家したりとも討つを本意ぞといふ心なり。」
そりつむりに綿帽子。

ひつかゝる事の形容。頭髪を剃りたる後直に綿帽子を被らば引かゝりて容易に外れず。

反るかのるか。
うんかばちかに同じ。のろは伸るなり。反るか伸るか宛に角やつて見るとの意。乗るか刺るか(ノの部)の條参照。

それなりけり。
其れ限りといふ義。
それべく候。

候べく候の轉。それなりけりに同じ。

た

大隠は市に隠る。

市の中の君子(イの部)に出づ。

大海芥を擇ばず。

大事を爲す者は、玉石を擇ばず、廣く衆を容れて捨つることなしとの義。「史記」李斯傳「李斯上書曰、臣聞地廣者粟多。國大者人衆。兵強則士勇。是以太山不讓土壤。故能成其大。河海不擇細流。故能就其深。王者不却衆庶。故能明其德。」
或は又大海は塵を擇ばず名人は人を毀らずと續けていひ、大海は衆流を受けて汚となさず如何なる者にして之を受け入る、如く名のある人、心廣く量寛大にして人を毀らずとの義にいふ。

大海を手にて堰く。
至難の事に喩ふ。力の及ばざる事を爲さんとするに喩ふ。到底成し遂ぐる能はずとの義なり。庾信賦に「長河一決不可可障之以手」「沈書」何武傳「以一貫障江河一決不可障之以手」「沈書」張儉傳「儉以一區區一掌而欲獨埋江河終嬰疾甚之亂。多見其不智。豈東坡集註曰諺有側手障江河之語。類書要「張德云以一掌一埋江河。」

そり—そる—それ—たい

大行は細瑾を顧みず。

大義大節を完うせん爲には、些細の謹格を顧みるに違
あらずとの義なり。「史記」項羽本紀「樊噲曰大行不顧
細瑾。大禮不辭。小讓。」
大孝は孝ならず。

大賢人は愚の如し、と尊しく、大孝は却て不孝の如くに
見ゆとの義。
大厦の覆らんとする一木を以て支へがた
し。

大勢既に崩れおられる時、到底獨力を以て如何ともし
がたしとの義。「文中子」大厦將覆。非一木所支也。
對岸の火事。

此方に延焼する憂なしといふ義にて、痛痒を感じざる
に喩ふ。
大奸は忠に似たり。

腹に禍心を包蔵する奸臣、能く君に諂諛して、其意を
迎合し、大に君の歡心を得、如何にも忠義らしく装ふ
故にいふ。
大義親を滅す。

國家の爲に一家を捨て、君の爲に親を捨つとの義。
大器晩成。

偉大なる人間は其發達すること晩けれども後に大成す
となり「老子」「大方無隅。大器晩成。」
大魚は小池に棲まぬ。

大事業を爲さんとするもの、遠志を抱く者の小地位に
居らざるをいふ。「古今談」「井水無大魚。新林無長
木。」
大賢人は愚の如し。

思慮深き者は一見愚の如しとの義。大石瓦雄は並行燈
と神名せられたり。
大言は俚耳に入りがたし。

理を盡くしたる至大の言は、世俗の耳に入り難しとな
り。「抱朴子」「至言逆俗耳。眞語必違衆。」
太鼓のやうな判を押す。

必ず間違なし、斷言すること。
大黒天に供へたるものを食へば縁が遠し。
俗説。
大黒の脛に味噌。

未詳。

大黒の袋持

富者に隨從するの意か。

大黒柱
家の主なる柱を大黒柱といふ、此柱なければ家を支ふ
る能はず。故に一國一家に於て、其盛衰に關する人を
國の大黒柱とし、家の大黒柱ともいふ。

大黒柱と腕押しは出来ぬ。

至難の義。力足らずして成すこと能はず。

大黒柱を蟻がせゝるやう。

至難の義。力の及ばざることを計るに喩ふ。

大根と女房は盗まると程よい。

解に及ばず。

太鼓も桴の當りやう。
前方の仕向け一つにて、此方の感じやうも異うとの義。
大事の前の小事。
何事によらず大事を思ひ立たんには、用意周到にして、
決して小事の爲に、其事を破らざるやうにすべしとの
義なり。

大事は小事より顯る。

小事の油断より、大事の秘密顯るゝに至るとの義なり。

大事は小事より起る。

小事より大事を起すに至るとの義。「老子」天下大事必
作於細。

大事は油断がもと。

油断、大敵(エの部)の條参照すべし。

大人は大耳。

大人は些細なることを耳に入れず、心に掛けぬものな
りとの義。大名は大耳といふより出でしか。大名は大
耳の條参照すべし。

大蛇を見るときも女を見るな。

女色を戒めたる諺。

大食知命

大食することを戒めたる衛生上の訓なり。

大食は命の取越。

前に同じ。

大食は脾胃を損ふ。
解するに及ばず。

大食腹に満つれば學問腹に入らず。

十分飽食するときは、精神作用の活動衰ふる故にいふ。大聲は俚耳に入らず。

見識の高き人の説く所は、凡庸卑俗の人之を聞きても理解する能はずとの義。大石は死せず。

圍碁の語。橙子が赤くなれば醫者の顔が青くなる、橙子が青くなれば醫者の顔が赤くなる。

橙子は秋冬に赤くなり、夏時緑色となるものなり。醫者は秋冬には患者少く(醫者の顔色青くなる)、春夏には患者多き(醫者の顔色赤くなる)を以て醫の顔色と、橙子の色と、時期相反對の相を呈すとすなり。

橙 赤くなれば正月が来る。正月の前に橙赤くなるなり。正月には橙の必要なるより云ふ。大地に槌。

はづれの事をいふ。大智は愚に似たり。

次の諺と同じ。諺公和尚の領に曰く「衆生與佛無殊。大智不異於愚。何須向外求寶。身田自有明珠。」大智は智ならず。

大賢は愚の如しと同義、大智の者は、一見した所では、智者の如くならず、之が即ち大智の大智たる所以なり。大丈夫剛鐵の脇差。

憂ふるに足らずと堅く受け合ふ場合にいふ。自己の保證する所の安全にして鞏固なること剛鐵の脇差の如しとなり。剛鐵の脇差にて、ものを切り得ること確實なり故に喩とす。大地を見貫く。

烟眼なるをいふ。大敵と見て懼るべからず、小敵と見て侮るべからず。

油断すべからずとの義。大敵を欺き、小敵を畏れよ。

戰場にて大敵を畏れず小敵に油断するなどの義。大の蟲を活して小の蟲を殺せ。

小の蟲を殺して大の蟲を活かせ(その部の條に出づ)。大は小を兼ねる。

大物は小物の代用を爲し得らるべしとなり。「春秋繁露」夫已有大者。又兼小者。「王充論衡」程材篇「牛刀

可以割鶏。鷄刀雞以屠牛。」大は小を兼ねるも長持は杖にならず。

大なるもの小なるもの、用に代ることを得べしといへども、如何なる場合に於ても必ず然りといふべからず、代用しがたき場合もありとの義なり。

大福長者。「諺草」俗に大に富める人を云、諸國に長者屋敷の址とてあり、是皆富貴大賈の徒の居たりし宅址なり。「神相

全編」云手仇如「福至」必作「大富長者。」大物は斫取。

「諺草」この諺は萬の事功を積み久しきを經て成就すべし、速には成りがたしといはん爲に大なるもの少つはつり取れとは云也。枚乘傳曰、泰山之巔穿石。單極之統斷。水非石之鑽。索非木之鋸。漸靡使之然也。是も久しく積で自然なるの喩なり。大木一本の弱みは、小木千本の痛みとなる。有力者一人の失敗が、其部下或は其下に働く者の不利

益となる喩。大木の下に小木育つ。

大勢力者の下には、衆人其庇蔭に預り利便を得。大木はころべども地につかず。

大勢力者困敗することあれども、尋常の者の蹉跌せるが如くならずとの義。大木へ蟬がとまつたやう。

相撲等にて勝者の大なる者に小なる者が取り組みたる大名の一人子。

必定用ゐらるとの義。「枕草紙」用ゐらる物の品々鳥なき里のかはほり一大名の一人子」大名の火にくばつたやう。

爲す所を知らざる形容。大名の病は行倒同前。

往時行仆れ人ある時、其家各之を隣家へ隣家へと途に隣町へ送りつくるなり。大名の病も斯の如くに、相談療治とて其醫ありても、一人任ずることなく、順送り

蒔の時、暖にして裸になることあり。斯の如き氣候は

豐熟なりといふ。

田植布子に麥蒔帷子。

前の諺に同じ。

田植の夢を見れば産がある。

俗説。

刀を賣りて牛を買ふ。

武士をやめて農に歸する事。かたなを賣りて牛を買ふ

(カノ部)の條に出づ。

田があれは畑もある。

田地を多く有するものは畑地も有すとの意。

高い所へ土持。

金を借りて、高い利子を支拂ひ、或は高價の物を已む

を得ず廉價に賣却するなど、すべて貧人よりして富人

を益々富ましめ、利益を得しむることをいふ。

高い木は風に當る。

高木風に撞まると同義。

高い所の上らねば熟柿が喰へぬ。

冒險をやらねば巨利を得難しとの喩。

高うても卑うても、裁縫うみつむぎせねば、
夫の形がへばくたになる。

高貴なると卑賤なるとを論せず、婦人にして其裁縫其

他女工の道に暗ければ、夫の不名譽なりとの義。

鷹が飛べば蠶も飛ぶ。

偉才俊傑のもの立身出世すれば、凡庸のもの亦之に倣

はんとする喩。

高かる良かる安かる悪かる。

價の高いものは品質が良く、價の低きものは其品質悪

しからんとの義。

高きに登るは卑きよりす。

凡そ學問其他何事を爲すにも、一時に飛び越えて成し

得らるゝものならず、必ず漸を追ひて進むべきなりと

の義。「中府」第十五章「君子之道辟如行遠必自邇。辟

如登高必自卑。」尙書「太甲」若「升高必自下若

陟邇必自邇」

高く賣るとも欺くべからず。

價を高くすると、不其の品を賣るとい、其他不正の手

段を取ることなけれとの義。

高くとまる。

自ら尊大ぶりて、ことさらに品位を高くするを、鳥が

喬木の梢に高くとまるに喩へていふ。

高燈籠の油盗人

甚だ丈高くして、瘦せたる人の形容。

鷹に逢うた雀。

勢力の弱き者が、勢力の強大なる者に遭遇したる喩。

到底力を出すこと能はずとの義。

鷹匠の子は能く鷹を馴らす。

餅は餅屋と云ふ如く、家業の専門が巧なりとの義。

鷹の無い國では、雀が鷹をする。

無鳥國之蟬蟬と云ふ故事より出でしならん。

鷹は飢うとも穂を摘まず。

義を守る士の窮しても不義の財を取らざるに喩ふ。「諺

草」「つむとは食事なり、枕草紙に椎つみたるとかけ

り、此諺の意は、義を守る武士は、たとひ飢に及ぶとも、

不義の俸祿を受けずとなり。李白が詩に曰。鳳凰不

啄粟。所食唯琅玕。焉能與群雞。刺促爭一粟。世諺

よく似たり。

鷹は賢けれども鳥に笑はる。

賢者の愚者より譏笑せらるゝ喩。

高みの見物。

傍觀して善も其事に關係せざる義。

財逆つて入る者は逆つて出づ。

悪徳身につかず(アの部)の條に出づ。

田から出るも、畔から出るも同じ事。

何の途より、支出するも出所は同じといふ義。

寶の持腐。

人才能を有しながら、之を使はず、金錢を有しながら

之を用ゐず、空しく藏するのみなるをいふ。

寶は國のわたり物。

錢は足なくして走ると云ふに同じ意。

寶の山に入りて、手を空しうするやう。

得べき所に至りながら、何物をも得る能はざる喩。「止

法念經」「羅羅王爲人脫、偶云汝得人身、不修道。如

入寶山、空手歸。」「摩訶止觀」「睡眠盜」「莫以睡眠因

縁一失二世樂。徒生徒死。無二可獲。如入寶山空
寶は身の仇。

金銀財寶の爲身を誤つとの義。「徒然草」「小人に財あり君子に仁義あり」
寶は身のさしあはせ。

人は財産を持ちて生れしに非ず。身につける寶は一時の供物の如しとの意。
寶は時の差合せ。

前に同じ。
寶は湧物。

寶を得るは奇遇によるとの義。
寶を盜賊にあづくるやう。

不安心なり、危険なり、奪ひ取らるゝ患あり。との義。
「本朝俚語」「性理大全云、是猶家有三明月之珠、夜光之璧、委之衢路之側、盜賊之街。」

たかを括る。
物を豫算して着手する事。其結果斯くあるべしと断定する事。たつとは頼の意ならん。

薪盡きて火消ゆ。

資本盡きて廢業するに喩ふ。「法華經」佛此夜滅度。如薪盡火滅。
薪を抱いて火を救ふやう。

薪を抱いて火を消し止めんとするは、其かひなく、却つて火を燃し付くるが如き者なりとて、方法の誤れる爲却て不利災害を招くに至るといふ義。

「戰國策」魏安釐王篤孫臣謂魏王曰且夫彘臣固皆欲以地事秦。以地事秦。秦將猶抱薪而救火也。薪不盡則火不止。今王之地有盡而秦之求無窮。是薪火之說也。

たきつける。

煽動すること。
澤庵の香物を茶へ入れて食ふと口が臭くなる。

たくらた猫の隣ありき。

たくらたは大馬鹿のこと。業を勉めず優遊怠惰なるものをいふ。

たくらたの市に立つやう。

目利の出来ざる者の、買物に立つに喩へたるなり。

竹と人の心と直いのが少い。

人心の直なるが少しとの義、竹は直なる如く見えてもよく見れば多少の曲あり。

竹に油をぬるやう。

能辯の形容。
竹に花咲けば凶年

俗説。
竹の子親優り。

子其父に優る喩。
竹八月に木六月

身取られてかはいや(皮服の義)といふしやれ。
竹を伐るは八月、木を伐るは六月を可とすとの義。
竹のさきに鈴つけたやう。

徒に騒がしとの義。ベチヤ〜しやべる形容。
竹の二俣。

稀なる喩。
竹は六十年目せりは四十二年目につく。

俗説。
竹箒も五百羅漢。

數ならぬ者も數に入るとの義。
竹屋の火事。

ほん〜云ふこと。
章魚食つてへどはく。

胃を害する故にいふ。利慾を食りて却て害を受く喩。
章魚のくそで頭へ上る。

頭へ上るといふは厭倦を催すこといふ。章魚のくそは頭に在るを以て、序詞に添へたるなり。俚言集覽には己のみ矜れども他より見るものは卑しと思ふにいへりあり。

章魚の友食。

章魚は友食するもの故己れの友人を賣りて自己の利益を計るもの喩とす。
章魚をつる。

人を窮詰して制裁を加ふる事。
他山の石。

他を見て我の益となす事。「詩經」他山之石。可以攻玉。
櫛をかけて飯を食ふと櫛が三杯食ふ。

労働したる後に食事の進む者なればかくいふにや。
助くる神あり、捨つる神あり。

捨つる神あり(スの部)の條に出づ。
助けの神様。

急難を救はるゝ人を指していふ。
出すのなら袖から手を出すも厭。

吝嗇者はいふ。
出す事なら目の中の塵でも厭。

前に同じ。
多勢を恃む群鴉。

衆の多きを恃むこと。
出す事は舌を出すもいや、取る事は親の首でも取る。

鄙吝貪慾の徒を譏りていふ詞。

多勢に無勢はかなはぬ。

「孟子」寡固不可敵衆。
多少によらず、水一寸、不動頭に火をたいて、ぐづぐづいはせて火を引いて、三尺さがつて猿ねむり、親が死ぬとも蓋とるな。

飯を炊く法をいへるなり。
蛇足を添ふ。

重複して無用の贅事を爲す義。「代醉篇」「蛇著足無用處」

立たう様も俯ふ様もなし。

進退谷まりしこと。
闘ふ雀人を恐れず。

二雀相闘ふときは、人の近づき之を捕へんとするをも氣付かずとなり。血氣の勇に驅られて、闘ふ者は其身を忘るゝに至るとの義。「孟子」好勇闘狠以危其父母。」

たゝかれた夜は寝安し。
害を被りたるものは、害を加へたるものより、却て安心

りとの義。
たゝとり山のほとゝぎす。

樵客のいふ詞。「醒睡笑」或者山路へ行き不思議の白鳥を拾ひたり。更に其名を知らず、人に向ひて語る。聞く者それは郭公であらうと云ふ。いや大なる鳥なりなかく小鳥ではない、さりとて時鳥にスウタタトル山の郭公とて、時鳥からあることよ。」

立たねど矢聲の氣轉。

氣轉の利くことないふ。矢を放つ音を發せしめて敵を追ひ斥くといふは氣轉頓智に長じたるなり。

たゝの鼠でない。

通常の者にあらざるの義。

たゝのたんすけ日やけの茄子。

たゝ空しく取られてやむのみとの義。

たゝほど安い物はなし。

解に及ばず。

多々益々善し。

多ければ多いほど猶益善く之を辨ずとの義。韓信の語に出づ。「史記」淮陰侯傳「高帝嘗與韓信言諸將能者各有差。上問曰。如我能將幾何。信曰。陛下不過能將十萬。上曰。於君何如。曰。臣多多而益善耳。」

たゝみ水練。

其方法を知らず未實地に行はずしては眞のやくにたゝずとなり。戲「國策」諺曰以書御馬者不盡馬之情。以古制今者不達事之變。故循法之功。不足高世。法古之學。不足以制今。」たゝみの上の水練ともいふ。又はたけ水練ともいふ(ハの部)参照。

壘のちりをひねる。

壘のちりをひねる。

立聞すれば足下の土三寸窪む。

立聞することは甚だよろしからざるもの故、之れを爲さざらしめん爲にかくいふなり。

太刀取を恨まずして細取を恨む。

斬首せらるゝ者、首を斬る人を怨まずして、捕縛したる人を怨むと云ふ事なり。

立場を失ふ。

立脚地を失ふことないふ。

立佛が居佛を使ふ。

立ちて居るものが、坐して居るものを使ひ立つるをいふ。「光廣痴人歌仙」立居さへ檀那まかせの釋迦阿彌陀人をばいかに送りむかへん」「きのふはけふの物語」「立佛を居佛にも檀那はけらひにして」

立寄りば大木の根。

大勢力のものに依憑すれば、便宜を受くとなり。「傳家實」「大樹底下好遮陰」「吾吟我集」立よらば大木の蔭と落椎の敷を拾へる猿の賢さ」

立往生。

起立したるまゝ、何の爲すことも得ることなきをいふ。

立つて居る者は、親でも使へ。

急用を辨ずる際、其傍に立つて居る者は、誰人にも其用事を手傳はずべしとの義。

立つ鳥も跡を濁さず。

水禽の飛び去るとき、其水を濁さずして立つごとく、人も其處を去るに際し、後に汚點を残すことなきやうに意を用ゐるべしと戒めたるなり。「史記」樂毅曰。古之君子交絶不出惡聲。忠臣去國不潔其名。」

立つより返事。

人に呼びかけられ、又は用事を命ぜられたる時は、先づ返事せよとの義。

辰に巻いて巳にこぼす。

辰の日より催ふして巳の日の多く雨ふるをいふなり。又金を儲けて直に費消することをいふ。

立て板に水。

能辯の形容。

立て白へ蕙を巻いたやう。

肥満したる形容。

蓼食ふ蟲も嗜好。

人の醜とする所を愛し、人の苦とする事を樂む類、すべて人の嗜好せざる者を嗜好する者あるは、例へば蓼は辛きものなれば之を食ふ蟲あるまじと思ふに、之を好む蟲あるが如し。人の嗜好する所其性癖によるものなりとの義。「孔叢子」「是蟲幼長三斯蓼。不以爲辛。」「白氏文集」自詠詩「一家五十口。一郡十萬戶。出爲差料頭。入爲衣食主。水旱合心憂。饑寒須手撫。何異食蓼蟲。」

不知三苦是苦。「鶴林玉露」氷蠶不知寒。火鼠不知熱。蠶蟲不知苦。蜘蛛不知臭。」

伊達者の薄衣風を引かず。

伊達するもの薄衣を爲しても、感胃に罹らざるは、意志が皮膚の官能に影響を興へて、生理的變状を起さしむるによる。

立てば芍薬坐れば牡丹、ありく姿は百合の花。

美人の形容。芍薬、牡丹、百合、すべて花の美なるものなり。

伊達の薄着。

伊達者の薄着に出づ。

炭團へ目鼻。

色の黒き人をいふ。

棚から落ちた達磨。

地位を失ひし喻。

棚の牡丹餅も、取らねば落ちて来ず。

事皆自働いて取るに非ざれば、得ること能はずとの義。田螺もなまぐさの中。

他人に及ばず。

他人にする。

他人のさる似。

他人同士の其容貌の相似たるをいふ。

他人の空似。

前と同じ。

他人の中を蹈む。

世故を閱歷すること。

他人の念佛で極樂参り。

他人の力によりて利得を受くること。

他人の飯には骨がある。

他人の家に飲食すること(奉公人食客の類)の艱辛なるをいふ。

他人の飯を食ふ。

他人の家に於て食事をするをいふ。即ち食客奉公人等の類是なり。

他人の弓を挽くな。

已に在る事を勉めよとの義。已を棄て、他に求め、内を忘れて外に取らんとするなかれとの意を、他人の弓を挽くとなく己の弓を挽くべしとの義にかゝる。「鑑古録」内省篇「妙喜曰、他弓莫挽他馬莫騎。他人之事莫知。此雖常言。亦可爲入道之資糧。」「無門關」領曰、他弓莫挽、他馬莫騎。他非莫辯。他事莫知。」

他人雜へぬ、水入らず。

一族親類のみ集合して、一人の他人とてはなく、至極親睦せるをいふ。

他人は恐い者。

他人の心は、陰險測りがたく恐ろしき者なりとの義なり。

狸が腹鼓をたたく。

俗に狸が興に入る時に、腹をたたくといふよりすべて遊び興じて面白き事を狸が腹をつみたたくやうといふ。(狸の腹は膨れて鼓の如し)俗語に「面白うつてお出でたれ」面白狸の腹鼓」

狸寝入り。眞の寝入りたるにあらで、たゞ寝入りたる體に許り装

ふなをいふ。狸はよく死したる眞似をなすもの故にいふ。狸の罌丸八疊敷。

金箱を展ばすに、獸皮にて挿み、上より種にてうつ、狸の皮最も之に適し、一匁の金を、八疊敷の面積に引き伸ばすことを得べしといふ。

狸の念佛。

跡消のすること。

種なき手品は使はれず。

資料なくしては事を營みがたしとなり。如何程巧なる手品師も種なくしては其技を演じがたし。

種無しに手品は使はれず。

前の語に同じ。

種物喰の身上潰し。

總て野菜等の種物は少し許を大事に貯へ置くものなりこれを食ふ程の者は身代を潰すとの義。

樂は哀の基。

「史記」滑稽列傳「淳于髡曰。酒極則亂。樂極則悲。萬事盡然。」淮南子「道應訓」夫物盛而衰。樂極則悲。張籍古が

「大喪箴」樂不可極。樂極生哀。漢武帝が秋風辭「歡

樂極哀情多。

頼む木蔭に雨がもる。

頼みにしたる所のもの、たよりとならざるをいふ。

「太平記」主上笠置を御没落の時、槍を拂ふ松の風を雨のふるかと聞しめして、木の蔭に立ちよらせ給ひたれば、下露のほろ／＼と御袖にかゝりけるを、主上御覽せられて、さして行く笠置の山を出でしより天が下にはかくれ家もなし。藤房卿なみだを押へて、いかにせんたのむ陰とて立よれば、猶袖ぬらす松の下露たのむ木のもとに雨もるといふ。

頼む乞食が馬に乗らぬ。

依頼すれば人は傲慢となるものなりとの義。

頼めば信州から米舂にも来る。

人は切に頼めば如何なる遠方よりも來りて業を助け呉るものなりとの義。

煙草輪を吹く。

空嘯き居る形容。

束草を負ひては、人の家に入らぬもの。

たの——たは——たひ

蓑笠を着て人の家に入らぬもの(ミの部)の條に出づ。

旅がらす。

旅の事になれたるものをいふ。

旅の耻はかさ捨。

立つ鳥跡を濁さずの反對にて、旅は一遍通りの物故、少々不面目の事を爲すとも顧みざるなりとて、耻かしき所行をも、忍びて爲す口實なり。

鯛の目。

眼珠の大なる形容。又肝要のところをいふ。鯛は目最も美味なり。

鯛の尾より鯛の頭。

雞口と爲るも牛後となるなかれと同義。

足袋は姉はけ、雪駄は妹をはけ。

足袋は己の足に大なるをはき、雪駄は己の足に小なるをはけとの義。

旅は愛いもの、辛いもの。

人羈旅に在る時は、平常家居せる時の如く、萬事自由ならず、愛い事、辛い事多し、となり。

旅は道づれ、世はなざけ。

旅行には道連れが便りになり、世は同情ありて互に深切に仕合ふがよしとの義。

足袋屋の看板。

足あがるといふ謎にて、雇人の放逐せらるゝ如きないふ。

足袋を穿いて寝ると、親の死期に得逢はぬ。

是はもと旅行する者は、夜も緩りくつろいで寝ぬること能はず、足袋を穿いたまゝ寝る者にして、遂には旅行中親の死去することありて、其死期に得逢はざる、とあるより、いひならはせるならんか。

多分につけ。

多数の意見に従ふべしとの義。「尙書」「三人占則。從二

二人之言」「左傳」「樂武子云善釣從衆。」

食物と念佛は一口づつ。

食物と佛事とは多と寡とに論なく一家みな之に與らしむべきをいふ。

卵と誓とは碎け易し。

人の誓のあてにならぬをいふ。

鶏卵に目鼻。

顔面の白く美なる形容。

卵で石をうつ如し。

危険なること。他を害せんとして自ら害を取ること。無効なること等の義あり。「吳子」「伏鷄之搏狸。乳犬之犯虎雖有闘心。隨之死矣。」

たまごも切りやうで四角。

物も言ひ様で角が立つとの義。

欺しても透しても。

色々と言を設けて、或は欺き、或は透してもといふ義。

欺すに手なし。

だますに一定の事あるにあらず、臨機應變にだますべしとなり。

珠塵と莛だれ。

高貴の金殿玉樓と、賤人の小屋と、相對比すれば非常の相違ありとの義。

黙つて居れば放圖なし。

人の漫言することある際に、己沈黙を守りて之に抵抗

玉に疵。

美はしき物に、些少の缺點あるをいふ。行き届きたる人にも、多少のわけめあるが如きに喩ふ。

たまに吹く風も野にあたる。

稀にあることなれども、其影響する所は、しばしば

玉の厄に底無きやう。

美にして其ひなしとの喩。「徒然草」「いるこのまさらんをのこは玉の厄にそこなきが如し。」「韓非子」「今有三

千金之玉厄。通而無當。可盛水乎。」「文選」「三都賦序」「玉厄無當。雖實非用。修言無驗。雖麗非經矣。」

玉磨かざれば光なし。

人の學問して切磋琢磨を加ふるに非ざれば、碩德博學の士と爲ること能はざるに喩ふ。「禮記」「玉不琢不成器。人不學不知道。」「實語教」「玉不磨無光。無光爲石瓦。人不學無智無智爲愚人。」「

だまり蟲壁をとほす。

言に納なる者、其行ふ所却て敏捷なる者なりとの義。

珠を炊き桂を焼く。

食物の奢りに長ずることなをいふ。

談義説法するは出家の生計。

談義説法は僧侶の職業といふ義。僧侶は之れによつて生計を立つとなり。

談義の場の惣ぞしり。

慈悲の談を耳にしながら悪口をなす事。説法をきいつ且惣を悪むといふ義。

短氣は損氣。

一旦の怒氣を制する能はずして、大なる損害を招くと

の義。「論語」「一朝之怒。忘其身。以及其親。非惑與。」「荀子」「聞者忘其身也。忘其親者也。忘其君者也。行其少頃之怒。而喪終身之軀。」

短氣は未練の本。

一旦の怒氣に乗じて、事を誤りたる後、深く悔恨することあり、即ち未練の本なり。

短氣は身を亡す腹切刀。

短氣は損氣の條を見るべし。

團子串にさゝねばゆかず。

短氣は損氣の條を見るべし。

團子は串にさすものなり。何事にも適宜相應の處置を取らざるべからずといふ程の意。

團子を食へば彼岸を思ふ。

接近律によりて連合せられたる觀念再生の心理作用をいふ。

團子を食ふは骨を食ふ。

骨とは團子を指したる串のことをいふ。團子を食ふには必ず其の串をしゃぶらざるべからずとの義。

男子家を出づれば、七人の敵あり。

男子外に出づる時は、必ず多くの敵ある者なりとて。人に接することを戒懼せしむるなり。

男子病む時は家衰へ、女子病む時は色衰ふ。

男子は外に出て、働くべき者なり、故に長く病に臥すことあれば其家道衰へ、女子病めば容色衰ふとなり。

男子は己を知る者の爲に死し、女子は己を愛するもの、爲に容つくる。

男女ともに其情愴に感じては、自己を犠牲にすることを厭はずとの義。

簞笥七棹、長持八棹。

新婦の嫁資、饒かなるをいふ。

男女七歳にして席を同じうせず。

小學より出てし語。

男女は自ら授け受けず。

男子と女子と互に自ら直接に授受を爲さずとの義。

矯るなら若木のうち。

木の枝の曲れるを矯めんとならば、若木の間に早く處置すべし、人も亦幼時に於て教導すべしとの義。貝原益軒の「童子訓」に「古人は小兒の始めて能く食し、ものいふ時より、早く教ふ。晩く教ふれば悪しき事を久しく見聞きて、先入の言、心の内に早く主となりては、後に善き事を教ふれども移らず。故に早く教ふれば入り易し、常に善き事を見しめ聞かして、善事に習はしむべし、自ら善にす、み易し。悪き事も少しなる時、早く戒むれば、去り易し、悪長じては去り難し、古語に「兩葉不_レ去、將_レ用_レ斧柯」と云へるが如し。」「顔子家訓」に「教_レ見_レ於_レ嬰孫、誨_レ婦_レ於_レ初來。」短慮功を成さず。

「蘇東集」細川勝元朝臣より短慮不成_レ功といふことゝるばえたとひ給ひしかば、太田持資「いそがずばぬれざらましを旅人のあとよりはる、野路の村雨」
田も畦も與_レらう。
氣にかなひたる者を愛寵し、何如なる貴重なるものをも與へんとの義。
爲を附る。

人の缺點を指摘すること。たりとは馬の病に驚といふものありとなり、それより出て、瑕の事にいひなすなり。
足ることを知れ。

我が身の方限を守りて過ぎたる慾を求むるなかれとの戒なり。「老子」知足者富。「佛遺教經」汝等比丘若欲_レ脱_レ諸苦惱_レ當_レ觀_レ知足。知足之法、是即富樂安穩之處。知足之人、雖_レ臥_レ地上。猶_レ爲_レ安樂。不_レ知足者雖_レ處_レ天堂。亦不_レ解_レ意。不_レ知足者、雖_レ富而貧。知足久雖_レ貧而富。不_レ知足者常爲_レ五欲所_レ牽。爲_レ知足者之所_レ憐憫。是名_レ知足。
達磨の目を灰汁で洗ふやう。

淨くしてさつぱりしたる喩。
誰か鴉の雌雄を知らん。
何れも能く相似寄りたるものにて、何れを何れとも區別し難しとの義。
樽にみたざる酒は、音がする。
學識なり、德行なり、其他すべての事に力世不_レ十分なるものは、自慢を吐き高言を爲すといふ喩。
倒るゝ所に土つかひ。
意地強き心ないふ。又た音響なるをいふ。

ち

小さくとも針は呑まれぬ。
小なりとて悔るべからずとの義。
地入ればはま入る。
圓碁の語。
忠が不忠になる。
主君に忠節を盡し却て不忠の名を取るをいふ。「史記」

鄭陽傳「昔下和獻寶。楚王削之。李斯竭忠。胡亥極刑。」

忠義は末世の出世の手段。

忠言耳に逆ふ。

命官耳に逆ふ(キの部)に出づ。

忠臣は二君に事へず貞女兩夫に見えず。

「史記」田單傳「燕之初入齊。聞三畫邑人王蠋賢。令三軍中。曰環。畫邑。三十里無入。以王蠋之故。已而使二人。」

謂蠋曰。齊人多高子之義。吾以子爲將封子萬家。蠋固謝。燕人曰。子不聽。吾引三軍而屠畫邑。王蠋曰。忠臣不事二君。貞女不更二夫。云々。

重箱で味噌摺れぬ。

其器に非ざれば、其用を爲さずとの喩。事方法を誤まれば成功せざるにもいふ。

重箱に鍋蓋。

物の卒合せざる喩。

重箱のすみを楊枝でほぞくる。

些細の事までを彼是といひ、誠にせよ、こまきこと。

煩細苛察にして穿鑿至らざるなき喩。

忠は憎のもと。

「呂氏春秋」至忠逆於耳倒於心」とあるは是忠は憎のもととなる謂なり。

中風病みに菟蓐持たす。

ブル／＼ふるふ形容。「紙屋川楓榭」中風病に菟蓐のたてを持せし如くなり」

注文違。

求むる所のもの、其好む所に違ふないふ。「書言故事」

中流に舟を失へば、一瓠も千金。

「不投所好、曰好、竿鼓、一瓠、一瓠も千金。」

凡何如なるものにて、時に従ひ所によりては役に立つ者なりとの義。瓠を腰につくれば水に洗まぬ故、水を渡る時船を失へば一の瓠も千金に値るべしとなり。

中流の砥柱。

「冠子」中流失船一瓠千金」

獨立して移らざる喩。砥柱山は禹の鑿して水を通せし所、河水分流し、水中に兀立して柱の如く見ゆとなり。

近い中にも垣をせよ。

親しい中にも垣をせよ(シの部)の條に出づ。

地が傾いて、舞がまはれぬ。

あまり物事に勿體つけ過ぎて事を爲すに、隙取ること念の入り過ぐる事にいふ。舞をまふ者が此衣ではいかぬ、此扇では舞はれぬ、離子がどうの、舞臺がどうのと勿體つける中に地が傾いたらどうするといふに喩ふ。

近くて見えぬは眉毛。

我事に氣のつかぬ喩。「韓非子」知如瞶也。能見百步之外、而不能自見其睫也。

近しい中にも垣をせよ。

親しき中にも垣をせよ(シの部)の條に出づ。

近しき中に禮義あり。

親近するも禮を失する勿れとの義。女子と小人は養ひ離し、近くれば不遜と論詰にあり。

近づく神に罰あたる。

漫りに神を祀るは、神を褻瀆するものなれば、却て神罰を被るべしとなり。人に接するにも、餘り狎親して却て其人の不興を受け、或は禍災を受くることあり之を謂ふなり。

地金を出す。

其本色をあらはすないふ。刀は地金と刃金とにてなる。刃金つきて地金あらはるゝに至れば、またいかんともしがたきなり。

近火で手をあぶる。

他の災難を意とせざるをいふ。眼前の小計を爲すないふ。

近星が出るると悪い事あり。

俗説。

池魚の害を受くるやう。

罪なくして牽連する喩。「風俗通」城門失火殃及池魚。宋の城門火を失したる時池中の水を汲みて空しくしたるより出づと。

池魚の災。

火災をいふ。近火の災にあへるをいふ。

竹馬の友。

幼時の友をいふ。「書叙指南」七歳之戲曰竹馬之戲」

地獄から飛脚に來たやう。

人のやせたる形容。
地獄から火を取りに来たやう。

人のやせたる形容。
地獄から抹香の相場をき、に來たやう。

枯槁したる形容。
地獄から迎ひに來さうだ。

死にさうだといふ義。
地獄で佛に逢つたやう。

危急難縁の場合に、扶掖救助を受けてうれしく思ふをいふ。「平家物語」辨しげに思はれたるけしき、ごころにて罪人どもが、ごさうぼさつを見奉らんもかくやと覺えて哀なり。

地獄にも知る人。

何程我心にそまぬ人なりとても、事に臨み所によりて不圖見合はせたるも憤かしく嬉しき心を生ずる事ある者なりとの義。

地獄の上の一足飛。

ひあいなることをいふ。

地獄の馬。

つらばかり人なりといふ謎。

地獄の釜のふたもあく。

罪ある人は、死後地獄に入り、鬼の呵責に迷ひ、釜に入れられて煮らるゝなり。されど盆正月の十六日には鬼が其釜の蓋をあけて、罪人を放ちゆるすと云ふ。

地獄の沙汰も金次第。

金力にて如何なる事をも動かすとの義。魯褒が錢神論に「錢無德而尊。無勢而熱。危可使安。死可使活。貴而可使。賤。生可使殺。諺曰錢無耳可使鬼。財。織子」千金不死。萬金不刑。世俗此理。諺あるは病堂策云寧波の一小民に張斌といふものあり、崔尙書が廊房に、住蒲鞋を織て業とす。性修行を好み、長齋念佛し、剪下寸鞋の鬚を以て、念佛の數を記し、籠に入れ置、毎歲除夕地蔵堂前にて焚くこと既に數十年に及べり。適崔尙書發背(疽俗)を病み、死して冥土に至る。國王眼を怒らし、平日の惡を數ふ、崔云能く我をゆるして娑婆に廻さば、善を行ひ罪を贖はん、國王云汝所蓄の錢用にたらず、汝が廊房の民、張斌金銀あり念佛

地震が揺る。

動搖することはいふ。房事の事などいふ。

地震の時竹藪にはいれ。

俗説。

地震の時は南天の木の下に行け。

俗説。

地震の時は萬歳樂と唱ふべし。

俗説。

地震の時は世なほし世なほしと云ふ。

俗説。

智者の一失、愚者の一得。

智者の敵とはなるとも、愚者を友とせざれ。

愚者を友とすることの不利なるをいふなり。

智者の邊の童習はぬ經を讀む。

此の智者は僧をさす。門前の小僧習はぬ經をいふ(甲)の部)の條參照。

智者惑はず勇者恐れず。

地獄の顔も三度。

凡そ人の溫和にして怒らざる人を佛或は地蔵といふ。

地震 雷 火事 爺。

「論語」子罕篇「子曰、智者不惑。仁者不憂。勇者不懼。」
智者も千慮に一失、愚者も千慮に一得。

智者なりとも、多くの考への中には、必ず二の過失はある者なり。愚者なりとも、多くの考への中に必ず二の取る所ありとの義。「晏子春秋」晏子曰、嬰聞之。聖人千慮、必有二失。愚人千慮、必有二得。「史記」韓信傳「廣武君云、智者千慮必有二失、愚者千慮必有二得。故狂夫之言、聖人擇焉。」
痴人の面前に夢を説かず。

「丹鉛總錄」痴人前不可親、達人前不可言命、智過ぐればうそをつく。

伊達政宗の附。
乳臭い。

口猶乳臭い、ヘクの部の條を見るべし。
父父たり子子たり。

父は父の分を盡し子に子の分を盡す。
父の恩は山より高く、母の恩は海より深し。
父母の恩の鴻大なるをいふ。

父の子母の子。

夫の妻を娶らざる時に子あり、妻夫に嫁せざる時に子あり後相結婚せる時云ふ。

「羅山文集」翁が子六人、媼が子六人合せて九人なりと。翁未だ媼を娶らず、媼未だ翁に嫁がざる以前共に子三人あり、夫婦となりて子三人を産む合せて九人なり云々。

父母を見れば尊く妻子を見ればかなしくめぐきは世の理。

「萬葉」十八大伴家持の長歌「於保奈牟知、須久奈比古奈野、神代欲里、伊比都藝家良之、父母乎、見波多布刀久、妻子見波可奈之久米具之宇都世美能世乃許等和利止、可久佐末爾、伊比家流物能乎、云々。」
縮れ毛の女は色深い。

ちつと申さば、くはつと申す。

少しの事を聞きて大層らしく言觸らす。
血で血を洗ふ。

親類血族中互に相争ふことないふ。互につまらぬ内輪

の争を公にするは、血にて血のつきし物を洗ふ如く、汚辱いよく甚しとの義なり。「唐書」源休傳「可汗使謂休曰汝國已殺突董等二番又殺汝、猶以血洗血汚穢益甚爾。」

智なき者は木石に等し。
人にして智なき者は、木石と異なることなしとの義。
地に在らば連理の枝。

夫婦相愛し其情の濃かなるをいふ。夫婦は二世といへば、此世は愚か縦令生を替へて木となるとも枝を連ねる樹とならんととの義。天に在らば比翼の鳥地に在らば連理の枝(テの部)参照すべし。
地に二王なし。

解に及ばず。
身のおき所なき弊。天にせぐくまり地にぬき足すといふ。
地にぬき足。

治に居て亂を忘れず。

太平の世尙戦時を思ふべしとなり。
地の下で大鯨が動く地震がゆる。

俗説。
血のたるほど直切る。

甚だしく物價を直切るを云ふ。
血のなみだ。

哀痛の切なること。
血のたるやうな金。

非常なる辛苦勞心を以て造りたる金。
血のよるものは親子。

人の死屍に其親とつ子とつ肉親のものが觸ると血が出るといふ俗語あるより此語出でし。

血は血だけ。
親族は親族丈の事ありとの義。血統相引くものは親族なり。

千引の石は動かすとも、親には勝たれず。
子たる者其父母に抵抗する能はずとの義。

持佛堂と姑と置所なし。

邪覺になるといふ意。
沈魚落雁閉月羞花。

美人の形容。

沈香もたかず、屁も放らず。

氣の利つぬ男の格別用を爲さぬ代り苦をも爲さぬといふ。嘔。よき臭をたきて世に芳名を流す能はず、さりとて又臭名を残すものにあらざとの義。可もなく不可もなし、毒にもならず薬にもならずと同義なり。

鎖守の沼にも蛇がすむ。
たよるべき所に恐ろしきものゝ居るをいふ。

ちんころを坐敷へおげたやう。

狎猫婆小供。

宴席の禁物を集めたるなり。
壁に道見するな、反齒に併見するな。

跛者却て兩足の者より道を歩行すること疾し、又反齒の者餅を好む故にいふ。

丁子頭立てば早し、百草霜に火點すれば雨晴る。

次の謔を見るべし。

丁子頭立てば善き事あり。

俗に燈花を丁子頭といふ丁字に似たるによりてなり。「事文類聚」禁嗔問。陸賈曰。自古人君受命於天。云有瑞應。豈有是乎。賈云。目擊得酒食。燈花得錢財。乾鶴喚而行人至。蜘蛛集而百事喜。小事既有徵。大亦宜然。又丁子頭立てば早し百草霜に火點すれば雨晴るといふ、蘇子瞻が秋陽賦「釜星之雜出又燈火之雙懸奴婢喜而告子曰此兩止之祥也」

銚子地獄。

鹿島洋にて、時化にあひたる船、銚子浦に入るときは、荷を上げて高瀬にて江戸に運漕せり、其費頗る多し故に此謔あり。といふ。

銚子程の蕪もて来い。

越前にて節分の夜豆撒くはよそに同じく唱へ畢りて後に門に出て、銚子程の蕪もてこいと高く聲々によばふとなり、土人の説に長生殿の蕪もてこいといふを訛れるなりとなり。

長者三代。

富豪の家も長く其富が持續せずして三代目に及びし頃

に衰運に傾くが通例なりとの義にて、富の恃むに足らざるをいふ。「景行録」無百歳一柱作千年計。見孫自在兒孫福莫把兒孫作馬牛。川柳に、三代目唐様でかく貧屋札」

長者富に飽かず。

守銭奴の常情として、富むに従ひ、愈求めて足ることを知らずとの義。「韓詩外傳」食の物而不止者雖有天下不富」「遺教經」不知知足者。雖富而貧。」

長者二代なし。

長者三代の條を見るべし。
長者に貧を語るな。

「雜譬」貴人之前莫言貧窮。彼將謂我求其薦矣。富人之前莫言貧。彼將謂我求其福矣。

長者のすねへ味噌を塗る。

長者の萬燈より貧女の一燈。

ありあまる人の多くの施よりは、貧しき者の赤心より出したる一錢の寄附金が其功德却て勝れたりとの義。長者が佛に獻ぜし一萬の燈明よりは、貧女の獻じたる

一燈の光が、却て明なりきといふ故事より出でしか。高野山奥の院にもあり。

「阿闍世王受決絶」一時佛在羅閱祇園密闍山中。時阿闍世王請佛。飯食已訖。佛還祇洹。王與祇婆。請曰。今日請佛。佛飯已竟。更復宜祇婆言。惟多燃燈也。於是王乃勸具百斛麻油膏。從宮門至祇洹精舍。時有貧窮老母。常有至心。欲供養佛。而無資財。見王作此功德。乃更感激。行乞得兩錢。以至麻油家。買膏。有主曰。母人大貧窮。乞得兩錢。何不買食以用。此膏爲母。我聞佛世難值。劫一過。我幸逢佛世。而無供養。今日見王作大功德。蠶々無量。激起我意。雖貧貧窮。欲燃一燈爲後世根本者也。於是膏主嘉其至意。與兩錢膏。應得三合。持益三合。凡得五合。母則往當佛前。燃之。心計此膏不足。半夕。乃自誓曰。若我後世得道如佛。當通夕光明不消。作禮而去。王所燃燈。或滅或盡。老母所然一燈。光明特明。殊勝諸燈。通夕不滅。膏又不盡。佛告目連。天今已曉。可滅諸燈。目連承教。以次滅諸燈。燈皆已滅。惟此母一燈。三滅不滅。便舉袈裟。以扇之。燈光益明。」

長者末代つゝかず。

富家水道までつゝくものにあらずとの義。
提燈に釣鐘。

甚だ權衡を失したる喩「新撰犬築波集」片荷かるくて
持ちやかれけん釣がれをちやうちん賣にことづけて」
提燈ほどの火が降る。

人の貧窮はなほだしきないふ「和漢故事要言」人の貧
といふは食の乏しきを第一とすれば飢乏たることを詩
にも飢火といへるなり。巢元方が病源論内に飢餓極り
て熱を生ず、熱は火なり、火人に向ひて久しき時汗自
ら出て、又夏は火也、炎熱して人汗す、此心を以て飢
ゑて身に冷汗することは、其家内に飢火ふるといふ義
なり。

町内で知らぬは亭主ばかり。

婦人の姦夫と情を通じ居ることを、一町内の人娶て之
を知らざるはなし、唯其亭主のみ知らずとの義。

町人の武士咄。

不似合はなしすること。

張範が當飲。

金儲けのあることを豫想してそれをあてに酒を飲むこ
と。熊阪張範は、盜賊の首魁なり、人の家に盗み入る
前に酒店につけて、他の財貨を常に酒を買ひ飲みりと
いふより出づ。又た賭博の丁半をいふ。丁が出るか半
が出るか常にならぬ錢を常にして酒を飲むの義。
ぢやがひでも。

是なる事ならんとも、僻事ならんとも、といふ義。
茶と百姓はしぼる程出る。

茶はしぼつてもく出る、百姓は年貢をしぼつても
く出すとなり。

茶人文盲。

茶人は學者らしく思はるれど文盲なるもの多しとの
義。

茶にする。

他人を馬鹿にすること。

茶に酔うた態。

伴りて知れることなも、知らざるまれなすをいふ。

茶飲友達を貰ふ。

老翁の婦人を娶るをいふ。表面合意借老などいふを羞

ちて茶飲友達と稱し、唯喫茶の相手に供するのみといふ
ふ心なり。

茶初穂を飲むと憎まる。

俗説。

茶腹も一時。

茶を喫するのみにても、一時は空腹を凌ぐといふ義に
て、事の一時間に合せにすることに喩ふ。

茶屋の餅も強ひねば食はれぬ。

他より推して勤めらるゝに非ざれば、自ら我より進ん
で得がたしとの義。

茶碗と茶碗とのやう。

其間柄の不和なるをいふ、當り合つて破れぬといふこ
となし、申あしき者の交接を磁器の相觸るに喩へいふ
ことなり。いづれ、かたへが、傷かざしてはあるべか
らずとの義。

茶を飲むと色が黒くなる。

俗説。

茶を飲むと年がよる。

あまり茶に福あり(アの部)の條を見るべし。

茶を飲むと目が悪くなる。

俗説。

勅諭に異議なし。

解に及ばず。

女子と小人は養ひがたし。

「論語」陽貨篇「子曰。唯女子與小人難養也。近之則
不孫。遠之則怨。」

一寸來いに油断すな。

解に及ばず。

女郎買の尻切草履。

けいせい買の尻切草履(ケの部)の條に出づ。

女郎買の糠味噌汁。

けいせい買の糠味噌汁(ケの部)

女郎に誠あれば晦日に月がある。

女郎の誠とたまこの四角みそがくの好い月夜。とも
いふ。

女郎の千枚起證。

一向期にならぬこと、信用すべからざる義。

塵が積もれば山と爲る。

小事積もりて大事に至るとの喩「耽苑」「土積成山則
 樞樞生焉。學積成淵則富貴尊顯至焉」「大藏禮」「積土
 成山風雨興焉。積水成川蛟龍生焉」「鶴林玉露」「張乖
 崖曰一日一錢千日千錢。」「徒然草」「一錢輕しといへど
 もこれを累ねれば貧しき人を富める人となす」「古今
 集序」「高き山もふもとのちりひぢよりなりあまくもた
 なびくまでおひのぼる」「休の歌に「六根につくる罪科
 のちりほこり死出の山路の高根とぞなる」
 後頭毛を三本脱くと鼻血がとまる。

俗説。
 塵塚の鶴。

超群の者の喩、はきだめに鶴といふ。
 塵に繼

ふる事を學ぶないふ「古今集」眞名序「葛風塵塵」「新撰
 六帖」數知らず誰も書おく名のみしてチリにツクべき
 音の葉もなし」
 塵一筋。

極めて僅かなることをいふ。
 散りも初めず、咲きも残らず。

花の盛開せるをいふ。
 塵に交る。

俗に和するをいふ「老子」「和光同塵。是より出でたる
 諺ならん。
 塵をひねる。

物の靜なるを動かすことをいふ。又物はぢしたるやう
 なるをいふ。
 塵をはたてる。

前の諺に同じ。
 智慧の鏡も曇る。

心亂れて平日の思慮なしとの義「朝野僉載」人貧智短
 馮跛毛長「又古諺「福至心靈。禍來神昧。」
 智慧の無い神に智慧付る。

何心もないものを教唆し、色々付智慧して慈愍するを
 いふ。
 智慧のない子に智慧付る。
 前の諺に同じ。

血を血であらふ。

血で血を洗ふに同じ。

血を含みて人に噴く。

人を汚さんと欲して、己先汚るゝといふことにて、他
 を害せんとせば己亦其害を受くる喩なり。「明心寶鑑」
 正己篇「太公曰。欲損他人。先須自損。傷人之語。還
 是自傷。含血噴人。先汚自口。」
 地を掘つて釜。

廿四孝の故事より出でしならん。僥倖の義。

っ

追従も世渡。

阿諛するも、世に處せんが爲の方便なりといふ義。
 朔日毎に餅食へぬ。

常に利益なる事のみあるものに非ずとの意。
 朔日降に三日降いつも七日に降らぬことな
 し。

朔日に雨降れば三日にも降り七日にも亦降といふ俗

ち—つ—つ

既。

使ひかけの楊枝を使ふと仲が悪くなる。

俗説。他人の楊枝を使ふべからずとの事。
 使ひ先で足駄をはく。

使ひに行きて、私に己の利益を占むる義。
 使ひ先で、油を賣つて歩く。

使ひに行きて早く還り来らず途中にぐづぐづして居る
 ことをいふ。油をうるとはむだばなしなどする義なり。

使ふは使はるゝ。

人を使ふは甚だ氣骨の折るゝ者にて、結局己が使はる
 ると同様なゝとの義。
 束短なる筆。

直ぐに不川となる意ならん。
 頭寒足熱。

平素の攝生法、頭を寒にし、足を暖くするを貴ぶとい
 ふ義。要するに生を養ふの道上部は常に清涼ならむこ
 とを要し下部は常に溫暖ならむことを要すとの衛生法
 なり。

津輕合浦外が濱。

津輕の私大。

陸奥にて十二月小なれば翌朔日を入れて終晦日とし、正月二日を元日とし、正月十一、十二と二日を一日につゝむなり之を津輕の私大と云、南部松前もまた然りと云ふ。

月明で、針穴を通すと目性がよくなる。

俗説。

月から水が取れる。

月澄みて露横りたる夜景の状をいふ。

つき切れに錢をつなぎ。

未詳。事の中断せんとする時金錢を以てこれを支ふる意。

月と籠。

物事非常に懸隔の甚しき喩。或は又月と朱盆ともいふ。

月に螢火。

價値の差の大きいなる事。

月にむら雲、花に嵐。

好事冤障多き喩なり。「淮南子」説林訓「日月欲明而浮雲蓋之。闕芝欲俯而秋風敗之。」帝範「去讒篇」「蕞爾欲茂。秋風敗之。王者欲明。讒人蔽之。」

月中に兎が餅をついて居る。

俗説なり「未曾有經」「當時有二兔。爲燒身供養。帝釋將骸骨安在月中。以示天下人。」

月の昇に日の降。

月の升に昇れば、雨ふり、日の降りに昇れば雨ふるとなり。信濃の諺。

月の前の一夜の友。

「太平廣記」中秋之夜玄宗宮中に月を弄ぶ、公違奏して曰く陛下に従ひ月中に遊ばんや否、乃ち杖を空に抛てば大橋となる。帝に請ひて同じく登る行く事數十里遂に大城関に至る、仙女數百皆素練霓裳にして廣庭に舞ふ。云々とあり、これより出でしならんか。

月の前の燈。

月の光に氣壓されて其光を放つ能はずとの意。

月の夜に提燈。

月夜影に足袋をさす。

勤儉なること。

月夜鴉はいつも鳴け、闇の夜になかぬ鴉の聲きけば生れぬさきの父を戀しき。

婦女子闇夜に鳥のなくを思ひてかくいふなり。

月夜に釜をぬかる。

油断の甚しき喩。よもやと思ふに物を奪はるゝが如きをいふ。月夜は明なり釜は自立つ器なり。しかも之を奪はるゝは不注意なりとなり、又鈍なるにも喩ふ。「壇浦兜軍記」手に入る敵やみくも逃しなば月夜に釜のぬかり武士と世上のそしり。

月夜に刈りた竹は蟲がつく。

俗説。

月夜に米の飯。

いつも月夜に米の飯ともいふ。年中月夜であつて常に米の飯を食ひたしとの義。

月夜に提燈。

月夜提燈を携ふるとも、月光に照されて燈光敢て道を照すに足らざれば、畢竟無効に屬すとの義。

月夜に取つた蟹は肉が少す。

不川のことにいふ、月夜に提燈ともいふ。

月日は人を待たず。

月日の早く過ぎ去る事。陶淵明の詩に、盛年不重來、一日非再長、云々とあり。

月日に關守なし。

前に同じ。

月待つまでの手ずさび。

月の出づる迄の手なぐさみと云ふ意にて。目的とする事の起らざる前に、慰み半分にして見る事をいふか。

月盈れば虧く。

物盛なれば、やがて衰ふものなりとの喩。「易」豐泰傳「日中則昃。月盈則食。」史記「蔡澤傳」日中則移。月盈則虧。物盛則衰。天地之常數也。歌に「おもへたみつればやがてかく月のいさよふ空や人の世の中。」

頭巾と見せて頬冠り。

立派に見せかけて、其實然らざる事。眞面目な顔をして其實醜行ある如きをいふ。

月雪花は一時に眺められず。

一時にすべてよき事を併せ得ること能はずとの喩。

解に及ばず。

月夜に取つた蛭は肉が少い。

俗説。

月夜に夜仕事。

勤儉の意。

月夜の道徳坊。

「和漢故事要言」とは世の人の心には、只ウツカリとしたる阿房なる様な事を云、此心は奇妙な人といふ事なり。談載に云長慶の始楊隱之州にありし時常に道士を問ひて遊びけるが、或時唐居士と云道士を尋れて、始めて親近になりけるを、唐居士悦びて一宿させしむ。夜に及びて唐居士其女を呼びて、一ツの弦月子を將來れと云付けければ、女奥より月を持ち出で、壁に貼りたり。蓋かと思れど、蓋にも非ず、玉かと思れど玉にもあらず。誠の月の色にて、曇りたる夜の光りの如くなり。唐居士坐を起ちて拜して云、今宵珍客あり光明を出して見せたまへと云ける詞の下より、忽雲の晴る如くきら／＼と光り出で、一座は明月に照され、燭を乗らざりけりとあり。是より出でたる世話也。道徳

の妙を得ては何も月夜を見る事も儘になると云心也。筑波峰の會に、娘財を得ぬ者は兒女にあら

俗説。

鴉喜べば蠅蝸腹立る。

一方の者に利ありて、一方の者に害あること。つぐみは蠅蝸を好み食ふ故なり。

つけ焼及は役に立たず。

智なきものに傍より智慧をつくるも遂に成効せざる

辻褄が合はぬ。

前後掃着し矛盾せることないふ。東京の人はつちつが

槌で庭を掃く。

阿諛迎合力めて欺待することないふ。或説に槌で庭掃くとは、其入來の客に馳走ふりにとて掃除をするを、餘りに遣て、槌を符と取り違へ、符と思ひて、槌で庭を掃くなり。諛辭を言ひ並ぶるは、之に等しき故とあり。

つち日和。

庚午の日より、七日の中を、大土と云、丁丑の日を問月と云、七日の内を、小土と云、土の日和はたしと云カタシとはカタイヤの意なり。土に入る日雨ふれば、土中雨也、入る日日和なれば、土中日和と云へり。

土佛の水遊び。

自滅を招く所行の喩。病身者の色欲にふける類を云。

「和漢故事要言」「急に見切りて捨つべき事を悟らずして、終には身を亡ぼすことを知らぬ喩。」

土佛の水狂ひ。

前の跡に同じ。

慎めば禍なし。

慎重にすれば、禍を招くことなしとの義。

つゝなし者の節句働。

ノラの節句働ともいふ。

常に轉ぶ石は苦を生ぜず。

絶間なく働く者の事をいふ。

角を矯めて牛を殺す。

是は少しの瑾を去らんと欲して、却て大なる害を求む

る喩なり。「郁離子」夷門之樓人頭没于脾。而擲代爲之元。口目鼻耳俱不能爲用。鄢封人憐而爲之割之。人曰癩不可割也。弗聽。卒割之。信宿而死。國人尤焉。吾知去其害耳。今雖死癩亦亡矣。國人掩口而退。角を直すとして牛を殺す。

前と同じ。

角を折る。

我を折るといふに同じ。かぶとを脱ぐに同じ。

燕の巢くはぬ年は火事に逢ふ。

俗説。

唾で矢を知いだやうな家でも建てよ。

矢は膠を以て堅く矧ぐものなり。故に直に倒れる如き間に合せの家にては我家を建てよとなり。

妻戀ふ鹿は笛の音に寄る。

情慾の燃ゆるものは花街杯に足を踏み入れ易しとの義。鹿の突尾期には獵夫笛を吹きこれを誘きて射るなり。

つまづく石も縁のはし。

袖の振合他生の縁と同じ意。石に躓きて介抱せられた

るが縁のはしになるとの意。
妻は夫の譜代の臣。

幕府の頭譜代の臣と云ふがありき。妻の夫に事ふるは譜代の臣が將軍に事ふる如くせよとの義。
妻は輪廻の媒。

妻は流轉三界の媒となるといふ義。
つまり殺

術盡きて一の下策を出す喩。末にいだすさかなをつまみ殺といふつまりは末の義。
撮み食をするしやくりてと呃が出る。

つまみ食をさせせぬ爲にいふ。
罪の疑はしきは軽くし功の疑はしきは重くせよ。

罪ありて刑罰に行ふとも其罪十分に治定せず少しなりとも疑しき所あらば刑罰を軽くせよ又忠節を致すときは多少疑はしき所ありとも恩賞をば重く行ふべしとなり「尙書」辜疑惟輕。功疑惟重。
旋風の中には鎌剛が居る。

俗説。
つむのをのされたやう。

事の絶えてあとの繼がぬ喩。つむのをは紡車絃也。
盤に鐵砲盲に抜刀。

感ぜざる喩(恐嚇しても無効なりといふ義)
盤の立聞。

役にも立たぬことの喩「首楞嚴經」疏「猶如盤人遊百歩外上聆於蚊蚋」

盤の早耳。

聖者の人聲を聞くと誤解したるをも願みずして早合點するをいふ。

爪糞程。

極めて少しばかりといふ義。

爪で拾うて箕でこぼす。

貯蓄する所僅にして費す所莫大なる喩。「文選」養生論「或益之以吠浴而泄之以尾闕」

爪が長し。

金錢物品を借りて早く返却せず長く留め置かないふ。

爪で火を燈す。

音階の甚しき喩。

爪のわかほど。

極めて少しといふ喩。「竹齋物語」夫よりもあかのちゑの文珠に參て我はた智慧才覺もいらぬなり爪の垢ほど果報たまはれ

爪のかげほどのゆかり。

遠族をいふ。少しのゆかりといふ義。

爪の極樂火の地獄捫り放しは目がまはる。

爪のさきまで似る。

全部分能く似たるをいふ「大筑波」われもわれたりつきもつきたりといふ句に牛の子の爪のさきまで親に似て

爪の短い者は器用。

俗説。

爪へ白斑が出来ると衣服がでてる。

俗説。

爪も立たぬやう。

場所の密に蒸りたるをいふ。

爪をかくす。

能を蔵す喩。

爪を煎じて飲む。

音階なる事。

爪をば慎みて取收むべきもの。

「書紀」神代に素戔鳴尊の高天原より逐はれます條の一書に「故諸神大喜、卽科素戔鳴尊千座置戸之解除、以手爪爲吉爪葉物、以足爪爲凶爪葉物、乃使天兒屋命、掌其解除之太醇辭、而宣之於世人、慎收己爪、者此其縁也」

其縁也

爪を火にくべると狂氣になる。

俗説。

露拂

「諺草」「埃塵抄」に云萬の遊の最初にするを卑下する心に露拂と云は禁裡に蹴鞠の御會の有時かならず賀茂の人参りて出御以前に先蹴て懸りの露を落す是を露拂と云也源氏の蓬生に御先の露を鳥の糞して拂ひつとあ

強き木はひず折。
強硬に過ぐる時は、人に悪まれ、意外の奇禍を買ふことありといふ喻。「淮南子」木強則折。革固則裂。齒堅於舌。而先之敝。口義云。木強則折。者。如藤如柳則難折。又柳の枝に雪折なしとつけていふことあり。

面當耳こすり。
其人の面前に於て強く其人の心中に徹するやうにはげしく諷刺する義。

面の皮厚し。
耻づべきことも恬然として平氣なるをいふ。「中峰廣錄」自讚「面皮厚三寸。鼻孔没半邊」「昔言故事」「進士王光弼。素樸。無厭。或遭挫辱。略無改悔。時人云。光弼面皮如二十重鐵甲。而の皮千枚張ともいふ。

面の皮を剥いでやる。
人の詐などを發きて之を詰責し辱かしむるをいふ。

釣合はぬは不縁の原。
解に及ばず。

男女結婚を爲すに、雙方の門地貧富貴賤などの相匹敵せざるは、其縁の途げがたきものなりとの義。「左傳」桓公六年傳「公之未昏於齊也。齊侯欲以文姜妻。鄭太子忽。太子忽辭。人問其故。太子曰。人各有耦。齊大非吾耦也。」

釣落した魚は大きい。
死んだ子の容貌美しと云ふに等しく、人は惜む心の大なるものなりと云ふ義。未練執着の已み難きを云ふ。

鐘に提燈。
提燈につりがれ(チの部)の條に出づ。

釣の好きなる奴は子を餓やす。
釣道樂の耽り易きをいふ。

釣は道樂のゆきどまり。
解に及ばず。

釣するとも網するな。
釣は一度に一尾づゝ取る者なれども網は一時に多く取

るものなれば其害する所多し故にいふ。「論語」千鈞而

釣は釣れても釣れないでもまたゆきたくな

剣の下はくゝるとも理合の下はくゝるな。
道理を破ることなけれとの義。

剣を身に添ふと夢見るは男にあはん前兆。
「萬葉」「劍太刀、身爾取副常、夢見津。何如之怪骨毛。君爾相爲」

絃なき弓羽ぬけ鳥。

用を爲すこと能はざる喻。「淮南子」鳥號之弓。籟子之琴。不能無絃而射。「中將姫」つるなき弓の如くにてたゞ茫然として立居たり」

鶴の粟蛾の塔。

未詳。用意周到にして秩序の整然たるをいふ。

鶴の一聲。

超群卓絶なる人の言語命令を鶴に喩へいふ、千羽の雀

が喋いて、鶴の一聲に、収まるとつけていふ。

鶴は枯木に巢をくます。
出處去就を慎みて荷しせざる喻。

鶴は千年龜は萬年。
鶴龜は長壽の者にして縁喜よしとして、凡慶事には必ず鶴龜に寄せて祝ふなり。「淮南子」鶴千歲極其遊。廣五行記補「龜齡經萬歲」又「萬年謂龜龜」

連小便。
雷同すること。

杖とも柱とも頼む。
甚だ頼みにするをいふ、杖は老人に於て無かるべからず、柱は家に於て缺くべからざるもの、共に緊要なるものなり。

杖にも柱にも一せきのむすこ。
愛子の事。

杖の下からも廻る子が可愛。
打たんとして振り上げた杖の下からも廻りて来て纏る子は可愛となり。

節ほどかゝる子は無い。

人は老身の時、子にかゝる者なれども、子には孝なる者と不幸なる者とありて、必ずしも親の意に満足を興ふる者ならず、節は無心の者にて意の次第になるものなり、又子よりは却て杖の扶助を受くること多しとの義あり。
圖を按して驥を求む。
その得ざるをいふ、圖を見て其馬を得んと欲するも、寶物を見ざれば無功なる事なをいふ。「漢書梅福傳」三代選舉の法を以て當世の士を取らんと欲す。猶伯樂の圖を察して驥駿を得んとするに同じ云々」

て

手足がかなはぬ。

手足の自由ならざるをいふ。

手足が棒になる。

手足の勢れたるをいふ。

手足がぬけて行くやう。

疲倦草臥の體にいふ。

鄭家の奴は詩をうたふ。

勸學院の雀家求を轉ると同義。物事ことさらに學ばずとも自然に習熟するをいふ。「事文類聚後集」鄭玄家奴婢皆讀書。一婢不稱意。使人携著泥中。須臾一婢來問曰胡爲手泥中。詩經邶風式微篇の詞也。答云薄言往愆。逢彼之怒。篇の語諺。に出たり。鄭玄は後漢の大儒にして、著書多し。

手生けの花。

己れの自由に賞玩し得るもの。

弟子賢しとも師のはん學に如かず。

弟子の師に及ばざることをいふ。はん學は半學。

亭主に好を馳走に出すやう。

己の情に於ては、好まざる所なれども、忍びて人に興ふる喻。

亭主の好きな赤烏帽子。

すきに赤烏帽子(スの部)の條参照すべし。亭主とは夫のことをいふ。夫たるもの其愛好すべからざるものを愛好するときに、婦は枉げて其意に従はざるべからずといふことを、亭主の好きな赤烏帽子で仕方がない

亭主の顔へ泥を塗る。

婦人其夫の面目を汚す所行のあるにいふ。

亭主八杯客三杯。

客を饗宴するに、主人却て客より多く飲むをいふ。

亭主を尻にしく。

婦人が其夫に柔順ならずして、夫を無にするをいふ。夫を夫として、頭に戴かずといふことを、強くいはんが爲に、頭に戴く反對に、尻にしくといふなり。行誠上人が或女史の繪畫詩歌に巧みなるに書いて示されし一歌に「歌をよむ女房などはもたぬもの亭主を尻に敷島の道。」

亭主をゆもじに巻く。

亭主を尻にしくに同じ。

泥中の蓮のやう。

周囲の惡に染まず、一人塚として清淨潔白を全うする喻。「維摩經」佛道。譬如高原陸地不生蓮華。卑濕淤泥乃生此華。周茂叔が愛蓮說「予獨愛蓮之出淤泥而不染。濯清漣而不妖。中通外直。不蔓不枝。香遠

てい—てう

貞女立てたし姦通したし。

理性と情慾との衝突をいふ。

貞女兩夫に見えず。

貞操の正しき女子は、一旦夫を持ちて再び他の夫に見えずとの義。「說苑」王歇曰忠臣不事二君。貞女不

鳥雀枝の深さに集まる。

徳を積まば、衆人自歸服する喻。樹木繁れば鳥雀より來る故にいふ。杜子美詩に「鳥雀聚枝深」。貞觀改要仁義篇「林深則鳥棲、水廣則魚遊、仁義積則物自歸之」

厠で天窓をかくと指が腐る。

俗説。

厠で暮六ツを聴くと腎へ疵が出来る。
暮六の時刻に厠の神と井の神と會合す其會合を妨ぐる故にたゞりてなりといふ。

厠てらうに居かる時地震きとちしんが揺ゆると運うんがよくなる。

厠てらうへ入はいて戸とを閉しめずに入はいると仲なかが悪あしくなる。

俗説。
厠てらうへ入はいて唾つば吐はくと目めが悪わるくなる。

俗説。
厠てらう板いたへ女をんな小便せうべんをしかけると難産なんさんする。

俗説。
厠てらうをよく掃除さうじすると美いい子こを生うむ。

厠てらうの掃除さうじを怠たらざらしめざる爲ため方便ほうべんにいふなり。

手水てすいをかけられると三年生さんねんせいさなす。

俗説。
手てが入はいれば足あしも入はいる。

物の次第しだいに侵入しゆいする意。
手書てかきわれど文書ぶんかきなし。
世よに手跡てしのすぐれたる者は、多おほけれども能文ねぶんの士し少すくとなり。

手てが長ながい。

竊盜せつとうをする者ものないふ(手てが長ながき故ゆゑに能あたる後あとに廻まるなり)。
手紙てがみは成なるべく敬うやまて書かけ。

手紙てがみの文句ぶんくを丁寧ていじんに認まめて禮れいを失うはぬやうにすべしとの義。
手利てきの子こは手てづつと笑わらはれぬがよし。

親おやに劣おとらぬやうにすべしとの義。
出来できた事ことなら仕様しやうがない。

解とけに及およばず。
敵てきなきに矢やを放はなつ。

目的てきなきに漫まんに事ことを爲なす意。
敵てきに糧かて。

敵てきを利きすることないふ。彼かを盜賊たうさくに預あづかる如ごとし(タの部ぶ)の條じょう参照さうじやうすべし。

敵てきは本能寺ほんのうじに在あり。

我が目的てきの要旨やうしは彼かに在あらずして、此こゝに在ある意。
光秀みつひでの故事こじより出いでたる語ことばなり。
敵てきを射やんとする者ものは馬うまを射やる。

主人しゆじんに脱だつかんとするものは先ま其妻そのさい君きみより脱だつき落おすが如ごとき類るいないふ。

手癖てくせが悪わるい。

竊盜せつとうをばたらくものないふ。
出口でぐちの敷居しきい跨またげば男子なんし七人にんの敵てきあり。

男子なんし家いへを出でづれば七人にんの敵てきありに同じ。

槓てい杆かんでも動うごかぬ。
容易やすに動うごかざる義、人のドツカリ尻しりを据すゑこみたるをいふ。

木偶箱こくわくを顛ひっくり覆かへしたやう。

子供こどもの多おほき喩たとへ。關西くわんせいにては人形にんがたのことをぞこといふ。
手酌てしやく貧乏びんぼう。

貧者びんぼうは酒さけを飲のむにも酌しやくする人ひとなき故ゆゑに獨酌どしやくにて飲のむとなり。

手品てじなり伶俐りやうりする馬鹿ばか見みる。

利巧りこうなものが手品師てじなしで欺あざまれて見みるものは馬鹿ばかなりといふ意。
出でず入はいらず。

手てが長ながい。

竊盜せつとうをする者ものないふ(手てが長ながき故ゆゑに能あたる後あとに廻まるなり)。
手紙てがみは成なるべく敬うやまて書かけ。

手紙てがみの文句ぶんくを丁寧ていじんに認まめて禮れいを失うはぬやうにすべしとの義。
手利てきの子こは手てづつと笑わらはれぬがよし。

親おやに劣おとらぬやうにすべしとの義。
出来できた事ことなら仕様しやうがない。

解とけに及およばず。
敵てきなきに矢やを放はなつ。

目的てきなきに漫まんに事ことを爲なす意。
敵てきに糧かて。

敵てきを利きすることないふ。彼かを盜賊たうさくに預あづかる如ごとし(タの部ぶ)の條じょう参照さうじやうすべし。

敵てきは本能寺ほんのうじに在あり。

我が目的てきの要旨やうしは彼かに在あらずして、此こゝに在ある意。
光秀みつひでの故事こじより出いでたる語ことばなり。
敵てきを射やんとする者ものは馬うまを射やる。

勘定かんていの取引てきぎんに支拂しはらふべき高たかと、受取うけとるべき高たかと同額どうがくにして差引さしひ出入しゆいなしとの義。又また人ひとの上うへにて中府ちゆうふを得えたるにいふ。

手千兩てせんりやう。

人ひとの手ては最もも貴重きちゆうなりとの意。孟子まうじの所謂すゐ食指しじの曲まりしは千里せんりを遠とほしとせずして治療ちりやうに行く云々の意。

出遣でつかひより小遣せうつかひ。
大おほに出いす費用けいゆうより、目めに見みえぬ雜費ざつぱいが却かへて多おほき者ものなりとの義。

てつかり千兩せんりやう。

下總しもすまの行徳鹽漬ぎやうとくしんじに於おて、一日いちにち晴天せいてんなれば千兩せんりやうの鹽しんを焼やくといふ。

鐵砲丸てつぱうだまいきぬけと思おもへ。

往いきて再び歸來きらいせざるないふ。

鐵砲玉てつぱうだまの使つかひ。
行いつたきり返かへり來きらずとの義。

鐵砲てつぱうをはなす。
虚誕きよたんないふこと。即すなはち無なきことを夸あ大おほにいふこと。

鐵面皮。

つらの皮厚い(ツの部)に同じ。

出爪とると耻をかく。

俗説。

出爪は取らぬもの。

俗説。

手ですることを足でする。

宜しく爲すべきものを以てせずして爲すべからざるも

を以てするをいふ。

手遠いものはまさかのときの役に立たぬ。

「明心寶鑑」遠水難救近火。遠親不如近隣。」

手なくして寶の山に入る。

眼前に取るべき者のありながら之を得る能はざる喻。

無効徒勞の義あり。「大論」信爲手。無信如無手。

無手人入寶山中。則不能有所取。

手鍋活計。

寒素にして簡單なる生活をなすをいふ。

「いつそ夫婦かけむわいて瑠瑠より安樂に手鍋さげて

天冠より藥籠がましじやとわめきける。」

手習は阪に車を押す如し。

少し油断すれば直に後へ戻るといふ義。學問の退歩す

ることを、車の後戻りするに喩ふ。家康の歌より出づ。

手習は通用の目の療治。

學問教育は處世上に必要なものなりとの義。

手に汗を握る。

他人の事を傍觀して覺えず我心を動かさしひあい感ず

ることをいふ。「元史」憲宗召趙璧問曰天下何如而

治。對曰先誅近侍之尤不善者。憲宗不悅。璧退也。祖曰

秀才汝渾身都是膽邪。吾亦爲汝握兩手汗。「投壘隨筆」

「今世人旁觀人涉險而躡者。輒云爲爾捨兩把汗。」

手に取らぬことは不定なり。

手に取りて檢するにあらざれば確と判定しがたしとの

義。實地に當つて見ざれば確ならず。

手に取るやう。

至て明瞭に分る形容。

手に持つた物を落すやう。

ワツカリして失策すること。

手に居た鷹をそらすやう。

「榮花物語」手にすゑたる鷹をそらしたるなといふや

うに思ふ。

手拭と百姓は搾るほど出る。

手拭は搾つてもく水のしたる如く、農家に租税を

課してもく出すとなり。

手の中の珠を取られたやう。

掌中の珠を取られたやう(シの部の條に出づ。

手の裏を返すやう。

輒く變改することないふ。「小町師」手のうらなをへす

や夏と秋の風

又易きことないふ「孟子」以齊王山反手。(注反手

言易也)

手の無い將基は負將基。

基客の語。歩のない將基はまけ將基といふ。

手の無い相撲。

計の無きことないふ。相撲に四十八手ありといふ。手

なくば如何に大力ありとも必ず手のある巧者に負くる

なり。

手の無い時は端の歩をつけ。

棋客の語。

掌が痒いと貨物がある。

俗説。

手の中で揉む。

次の條に同じ。

手の舞ひ足の踏むことを知らず。

うれしくてたまらぬこと。「禮記」の「樂記」に「故歌之

爲言也長言也、既之故言、言之不足、故長言

之、長言之不足、故嗟、嗟之不足、故不知

手之舞、之足之踏之也。」

掌に揉む。

人を蹴弄するを云ふ。

手の奴、足の乗物。

何事も己の力にて處理し、敢て外に求めざる義。

手は千里の面目

手跡の巧拙は、手紙等にて遠方の人に、直に知らるゝ者にて大に面目に關すとなり。

手八丁口八丁。

手て爲すことも器用なる代り口も達者なりとの義。

出船千艘、入船千艘。

船船の出入繁き股賑なる港。

出船に船頭待たず。

解に及ばず。蝶は菜種の味知らず、菜種は蝶の味知らず。

相及ばざるの義。

手前味噌臆し。

自慢する者ないふ。手前を棚へ上る。

我事を棚へ上る(ワ)の部の條に出づ。天一天上雨ふらず、十方暮風ふかず、八專に日和なし。

天一天上とは、天一神の天に上り居る十六日間をいふ。十方暮とは、甲申より癸巳までの十日間をいふ。八專

とは、壬子の日より癸亥の日に至る十二日間をいふ。壬も子も水にて支干比和すとて、此間雨ありといひ、又嫁娶を忌む。

天一天上に雨なし、十方暮に日和なし、八專に雨あり。

前の諺を見よ。天下は天下の天下。

「陸奥雜話」天下は天下の天下、一人の天下にあらざといふことは、六韜の書にいて、天下の君たる人は常に忘るまじき事にて候萬世不刊の名言と申すべし。されど中國にても三代を除きては、およそ創業の君大かた天下を得るを我一人の樂として天下の天下とするはなし。六韜の語は次の諺を見るべし。

天下は一人の天下にわらず。『六韜』太公曰。天下非一人之天下。乃天下之天下也。同天下之利者則得天下。擅天下之利者天下廻り持。

貴賤貧富の循環するをいふ。天から横に降る雨はなし。

天井から目薬。

効の無きことをいふ。二階から目薬ともいふ。

天井が支へた。

天井が高いといふ反對なり。

天井が卑い。

天井が高いといふ反對なり。

天井を見せる。

人を苦しむるをいふ。

天知る地知る人が知る。

人の見ぬ處にても、悪事を爲せば必ず知れずにはすまぬ者なりとの義。『後漢書』揚震傳「荊州茂才王密爲昌邑令。謁見至夜。饋金十斤。以遺震。震曰故人知君。君不知故人。何也。密曰暮夜無知者。震曰天知神知我知子知。何謂無知。密愧而出。』佛說罵意經「人所作善惡有四神。一者地神知之。二者天神知之。三者傍人知之。四者自意知之。」

天道さまと米の飯は何處にもある。

世間は廣しとの義。

人の性善にして、はじめより横道凶惡なるものなしとの義。(雨は眞直ぐ降るものなれども、風の工合で窓を打つ如く、人は性善なれども、慾心の爲に悪人となる。)

「日蓮の歌」心から横さまに降る雨はあらじ風こそ夜の窓はうつらめ。

天狗の躑。

投げ飛ばす形容。

天狗の飛びそこなひ。

自慢する者の失策。天狗(補遺テの部)の條参照すべし。

天子に二言なし。

繪言汗の如し(ワ)の部に出づ。就きて見るべし。

天子に父母なし。

一天萬乗の君は高貴至尊なりとの義。「天智天皇」天子に父母なしといへり。天子とは天の子と書く。

天井が焦臭いといふやう。

醜婦の鼻の低き形容。

天井が高い。

頭がつかへないといふ義。(昇進の範圍廣き喻)。

天道に依怙なし。

「天智天皇」善は善、悪は悪天道に依怙なし。次の跡を参照すべし。

天道に私なし。

「既苑」天地無親。常與善人。天道は盈つるを虧きて謙に益す。

謙遜する者は福祐を享くとの義。「易」天道虧盈。而

天道人を殺さず。

天の慈悲鴻大なるをいふ。神佛人を殺さずと同意。

天道へ唾放掛けるやう。

仰向けの唾(アの部)の條に出づ。

天道へ石を投げるやう。

前の跡に同じ。

天竺日返り。

足の早きをいふ。

天竺浪人。

人に疏んじ棄てらるゝやうの者をいふ。

天に在らば比翼の鳥地に在らば連理の枝。

男女の愛情の深き喩。比翼の鳥とは、雄雌共に一目一翼にて、其羽を比べ一體になりて飛ぶ鳥なれば、歌に、はれなならぶる鳥とあり。連理の枝とは、枝のふたまたとなりて相向ひ脈理を連れ接へて生ずる木なれば、歌に、かはせる枝と詠り。「白氏文集」長恨歌「在天願作比翼鳥。在地願爲連理枝。」源氏物語「桐篋巻」はれなならべえだなかはさんとちぎらせたまひしに云々「天曆御集」いきての世しにての後の後の世もはれをかはせる鳥となりなん」御返し「かくちぎることのはだにもしはらずば我もかはせるえだとなりなん」女御芳子。天に口なし、人を以て言はしむ。

天言はされども、公議輿論は天に代つて言ふとなり。

天に二日なし地に二王なし。

一國一家の主権者たるもの、一人なりといふ喩。

天人も五衰。

頭に華鬘をつけ、羽衣を着、身に光ありて、天下を飛行する女神にも五衰ありとなり。五衰とは、身光現せず、華鬘萎頓す、兩液汗を流す、體便臭穢、本座を樂

まず、の五をさす。天にも上る心地。

歡喜の至極なるをいふ。月の前の一夜(ツの部)の條参照。

天にも地にも無いもの、やう。

重寶がらるゝことをいふ。

天然飛礫に猪をうつ。

已手を下さず、自然に他の手によりて思はざる巨利を得る喩。(初より期したるにはあらず、偶然の事に獲物あるをいふ。)

天の與ふる所を取らざれば却て其咎を受く。

己進んで取らんと欲するの念なければども、自然の理にて得るやうに成り來れる者を取らざれば、却て害ありとの義「史記」越世家「天與不取。反受其咎。」既苑「天與不取。反受其咎。時至不迎。反受其殃。天地無親。常與善人。」逸周書「天與不取。反受其咎。當斷不斷。反招其亂。」

天の網にかゝる。

犯罪人の逮捕せらるゝことをいふ。

點のうち手が無い。

誰一人非難すべきものなしとの義。

點のうち所なし。

同然する所なし(非難すべき點なしとなり)との義。

天の火で尻をあぶる。

無効なる事。甚だ迂遠なる所行にして、到底其用を爲さざる喩。

天は見通し。

天は絶えず下を照覽す、故に天の賞罰に誤なしとの義。

天は物言はねど指圖する。

「孟子」天不言。以行與事示之而已矣。」

天網恢恢疎にして漏さず。

天の網廣大にして疎なる如くなれども、悪事を働けば早晚之にかゝる、即天罰を免るゝ能はずとなり。「老子」天網恢恢。疎而不失。」

天網遁れがたし。

前の跡に同じ。

天を測り地を測りても、人の心は測られず。

人心の測知すべからざるをいふ。

出物腫物所嫌はず。

放屁と腫物とは時と場所とを問はずして發するものなりとの義。

天を衝、地を舐つ、一黒陸頭耳小齒恒。

相牛の法。天をつくと地は角の上を衝かないふ。一黒とは純黒、陸頭とは頭の平なるを善とす、耳小とは耳の小なるを善とす、齒恒とは方の恒恒せるを善とすとの義なり。丑數に擬して、一石六斗二升八合といふ。

天角地眼。

牛をほむる語。前の語を見るべし。

手も足も動きがつかぬ。

物の紛糾して奈何ともする能はざるをいふ。

手も口も利けぬ。

手の働きも口給の働も無しとの義。無能者のこと。

手盛り入杯。

人の給仕することなく、自分にて飯を盛りて食するときは大食すとなり。

手持無沙汰。

寺から里へ。

凡べて與ふべき者が與へらるゝ者より反對に進物を受くる喻。物の逆様なることをいふ。寺は檀家より物を貰ふが常なるに、寺より檀家へ物を贈るは顛倒せるなり。「珍書考」魏書七十卷の十一枚目に、魏の陳留王の時、天下大に饑寒に及べり。夫故民間より一里に十五家の買物の布を織り出すことも成らず、甚難義なりければ、君令し玉ひて、彼布の買を許して、其上朝廷より官人に仰付けられ、官衣を一宛、寒凍の民に賜る、是を時に寺解冠服給郷里凍民」と書たり。此寺といふは、官人の勤所にして、出家の居所に非ず、今に至て出家の居所を寺と名號事は、昔震旦へ、天竺より初めて經卷を持來りし時、先官人の役所の寺にさし置きしより、世々例に成りて和漢ともに僧徒の居所を寺といひ傳へたり。三體詩王延が詩にも宮前、楊柳寺前、花を作りしも、官人の詰所を指すなり。其外儒書の寺といふは、大方官人の役所をいふ、故に一里より朝廷へ布の買を來りけれども、魏の代には却てもろくの寺より、里

と

砥石を跨ぐと破れる。

女が砥石を跨がれば其砥石破るとの義。

戸板に豆を轉がす。

滑脱の辯。

同氣相求む。

牛は牛づれ馬は馬づれと同義なり。「易」文言「同聲相應。同氣相求。」吳越春秋「同病相憐。同憂相救。」

同氣同行相求む。

同氣相求むを見よ。又類を以て集る(ル)の部参照すべし。

東海道五十三驛。

磁瓶のつき多きをいふ。東海道に驛多くして、其數五十三あり。つきと引きかけてまかいふなり。

冬瓜に夕立。

容貌の醜なるをいふ。

出る杭は打たれる。

杭の出過ぎたるは必ず打ち卑めらるゝ者なり。人も亦差出過ぎる者は災害に逢ふとの義。「割一元龜」秀木之于林。風必摧之。過行之于人。衆必惡之。歌に「さし出づる餘さきを折れ幾度もおのが心を金槌にし

照る八專降る八專。

八專八日間日四日(ハ)の部の條を見るべし。

出る船の纜を引く。

未練の事。

手を引く。

己が關係せる事業を中止する義。

手を焼く。

失敗すること。

冬瓜船が着いたやう。

坊主の多く集りたる形容。

冬至十日経てば、阿房でも知る。

冬至後十日経てば日の永くなりしこと誰にても知るとなり。

冬至には大根が一時に大きくなる。

俗説。

燈心で須彌山。

力相及ばず到底其ひなしとの義。「釋迦如來誕生會」

「燈心で須彌山を引き寄せんとする如く中々思ひもよ

燈心で竹の子を掘るやう。

如何に勞すればとて其効なき喻。徒勞の義、事の成ら

ざる義。心細きことにもいふ。「役者氣質」心細きは燈

心で竹の根を掘る思これではとてつゞくまい」燈心

で根笹を掘るやうともいふ。

燈心で根笹を掘るやう。

燈心で竹を掘るやうを見よ。

燈心で根笹は掘れぬ。

俗に此世に於て子養ひの艱苦を嘗めざるものは、地獄に入りて、鬼に燈心で根笹を掘らせらるゝといひて、己に生子のなき者も、他人の子を養ふなり。

燈心で盤石。

燈心で須彌山と同意。

燈心を少くして油を多くせよ。

其末をつとめずして、其本を養へよとの義。(燈光を明にせんと欲して燈心を多くするは、油を多くするに如

いさるなり。)

燈臺下暗し。

遠くの人の知れることを、近くの人の却て知らざるこ

とある喻。燈臺の火の遠き所は明にして、燈下却て暗

きものなるを以て喩ふ。「孟子」「道在邇而求諸遠」

「鶴林玉露」「盡日尋春不見春。芒鞋踏遍蘄頭雲。歸

來笑煞梅花一嗅。春在二枝頭一已十分」

同病相憐れむ。

自己艱苦に逢ひて、他人の艱苦に同情を表するとの義。

豆腐殻をこぼさぬやうに食せば長者にな

る。

豆腐殻をこぼさぬやうに食するは、節儉の心懸あるも

のなり故にいふ。

豆腐で頭をうちて死にはせぬ。

臆病者意氣地無き者の、恐るべからざることに恐るゝ

を嘲罵する語なり。豆腐で頭をうちて死ぬともいふ。

豆腐で歯を痛める。

有り得べからざるをいふ。

豆腐に銚。

聞かぬといふ謎なり。利かぬと、聞かぬとを通はせたる

なり。無効の事にいふ。

豆腐の殻を益さずに食ふと長者になる。

つましきものは豪富となるべしとの義。豆腐のからな

こぼさずに食ふとはつましきことなり。

豆腐のやうな身體。

多病にして事に堪へざる身體。

豆腐を切るより易い。

至て容易きこと。豆腐を切るは易き業なり、故にいふ。

燈明の火で尻をあぶるやう。

至るべきこと。豆腐を切るは易き業なり、故にいふ。

徒勞無効の義。又ぐづぐづしたる意。

胴より臆が太い。

體軀小なれども、心膽の大なるをいふ。

兎角近所に事なけれ。

己に接近せる所の、無事息災を願ふが人の情なり。

兎角浮世は色と酒。

世間の多くは是酒色の奴隷たりとの義。

蜥蜴へ指しをすると指腐る。

俗説。

時しらぬ山伏。

山伏は山入り修行等の時機あるなり。然るに夫れを辨

へずして山入を爲す如く、時勢外れの事をなすをいふ。

時と品とによる。

事一様に律すること能はずして、時宜に従ひて之を處

理するをいふ。

時に遇はず。

爲すこと意の如くならず、或は世に用ゐられずして、

不幸の地位に居るをいふ。

時に遇へば鼠も虎となる。

庸味の者も、一朝時を得て、大に用ゐらるれば、必ず人の畏敬する所となる。漢書「東方朔傳」抗之則在青雲之上、抑之則在深泉之下。用之則爲虎、不用爲鼠。宗尊親王の歌に「虎とのみ用ゐられしは昔にて今は鼠のあなう世の中。」

齋にも非時にもはづれ。

食事にはづれたることないふ。「言海」晝(日)出て、漸く盛なる時に食ふ事なりとぞ。僧家に食事の稱午後の食を時ならぬに食ふものとし非時といふ。

時の代官日の奉行。

其日其時の職権ある者には従ふべしとの義。

時の役人日の奉行。

前の語に同じ。

時の花をかざしにせよ。

世と興に變遷推移して、其時其時に従ひて便宜を求めよとの義。

時延るはわるし。

何事も時日を遷延するはよろしからずとの義。齋の用には鼻さへ剔ぐ。

さしあたりたる要用の爲には、何如なる方法融通にてもすることはいふ。「宇治拾遺集」鼻の長き僧ありて齋を食ふに邪宛になる爲之をそぎしとなり。時は得難くして失ひ易し。

時世時節。

「漢書」韋信傳「功者難成而易敗。時者難得而易失。」凡何事も其時其時の運命なりとの義。

徳孤ならず必ず其隣あり。

徳行は他を感化するに至るものなりとの義、隣嚴うして資儲くるの條参照すべし。「論語」より出でたる語。毒蛇の口を免かれた心地。

讀書百遍義自ら通ず。

書を讀むこと反覆精熟すれば、其意義自然に了解し得る者なりとの義。「魏略」董遇字季直性質訥而好學。中略人有從學者。遇不肯教而云。必當先讀百遍。言訖

書百遍而義自見。得失は一朝榮辱は千歲。

得失は一朝のものなれども、榮辱は永遠に消えずとの義。

讀者作者の苦心を知らず。

書物の著者の苦心は讀者これを察せずといふ義。

徳に在り險に在らず。

險を待まずして徳を修むべしとの義。「史記」吳起傳「魏武侯浮西河而下。中流顧謂吳起曰。美哉乎山河之固。此魏國之寶也。起對曰。在徳不在險。」

毒と藥とちやんぼん。

玉石混淆したるをいふ。

毒にならぬ人。

心柔和にして害を爲さざる人をいふ。

毒にもならず藥にもならず。

害にもならず、利にもならず、悪しくもなければ、善くもなしとの義。

徳利に口あり鍋に耳あり。

言を苟もするなかれ他に之を聞く者あり語る者ありて己の禍となるべしとの戒。

徳利の身投のやう。

つぶく沈み行く形容。

徳利に味噌をつめる。

所爲の間違へるをいふ。

毒を食はば皿まで。

一度悪事を犯す上は、あくまで慕りゆくをいふ。悔い改めずして、却て甚しく惡を爲し果すことをいふ。

毒を以て毒を制す。

惡人を以て惡人を制するをいふ。

何所へ行つても甘草の流るゝ川がない。

何所へ行きても、一攫千金の利を得べくもあらずとの義。

何處の馬の骨やら牛の骨やら分らぬ。

義。甘い事の溢れたる所あらずとの意。人の身分出所の知れざるをいふ。何處の氏の者やら何處の生れの者やらといふより轉じたるなりといふ。

何處の鳥も黒し。

何處に行くも人はそれくかしこく利に敏き者なりといふ。己れ利ありと思ふ所は人も亦然りといふほどの意。

地得ぬ玉作

記の中巻、狹穂彦の謀反に、妹皇后も皇子を抱きて同じく稻城に籠り給へるを、垂仁天皇軍士に仰せて、皇子と共に皇后をも助け出さしめんと、謀り給ふ條に、「爾其後、豫知其情、悉剃其髮、以髮覆其頭、亦腐玉緒、三重纏手、且以酒腐御衣、如全衣服、如此設備、而抱其御子、刺出城外、爾其力士等、取其御子、即握其御祖、爾握其御髮者、御髮自落、握其御手者、玉緒且絶、握其御衣者、御衣便破、是以取獲其御子、不得其御祖、故軍士等、還來奏言、御髮自落、御衣易破、亦所纏御手之玉緒便絶、故不獲御祖、取得御子、爾天皇悔恨、而惡作玉人等、皆奪其地、故諺曰、不得地玉作也。」

が往々あり。思想の疎そかなりし古代の事といへ、れはもとよりありし諺に、事實をよ加減に附會して、縁起としたるを證するにあらじか。思はぬとばしりにかりて田地を失ひし玉作、さても氣の毒といふべし。

「古代の風俗并に歳時」に「後世の事なれど、倉持皇子の、かくや姫の乞に應ぜんとて、職工に命じて玉の枝を遣らせ、蓬萊山より得たりと云ひ做せるを、職工の、かくや姫に訟へ申したるにより事願れたりとて打擲せしめ給ひし事を、竹取物語に載せたるは、此諺より思ひ寄れるものか。」

所所の畫を描く

夫相應の事をなすなむ。處に似せて繪をかく。

凡人賢不肖各其材能品格に應じて行動を爲す喻。繪をかくに奥の間は奥の間らしく勝手の間は勝手の間らしく茅屋は茅屋らしく丸屋は丸屋らしく山は山らしく川は川らしくかくに喩へしなり。蟹は甲に似せて穴を作るといふと同じ意なり。

何處を推せばそんな聲が出る。

何處を風が吹くといふやう。

鎖さぬ御代。

安穩太平なる御代をいふ。「史記」循吏列傳「鄭以子産爲相、三年門不夜閉、道不拾遺。」

年取れば金より子。

とこし

年の矢

老年に至れば金儲けの考よりは、子を愛する情が優るとの義。

老人と釘頭は引込むがよし。

老人の云ふ事と牛の尻がい外れた事なし。

老人の経験より云ふ言の確なるをいふ。牛の尻がいの如く外れさうで外れぬとの意なり。

「徒然草」貧しき者は財をもちて禮とし、老いたる者は力をもつて禮とす(中略)貧しくして分を知らざれば盗み、力衰へて分を知らざれば病を受く。」

屠所の羊。羊のあゆみ(ヒの部)に出づ。就きて見るべし。

老人の子は影なし。

衰へたる精氣によりて生るゝが故にいふ。『風俗通』
「老人子無影。」らう人の子は。影なし(ラの部)を見るべし。

老人の冷水。

不似合な事をする喩。老人の冷水を飲むが如きは甚不相應の事なる故に喩ふ。老人の吉原通ともいふ。

老人の吉原通。

老人の冷水と同じ。老人の吉原通は不相應なり。

老人は犬も侮る。

老境に入れば誰にも輕侮せらるゝとなり。

老人は詞が甘い。

老人は詞をやさしく深切にかけらるゝをよるこぶとの義。

老人火の子。

老人寒を怕れて爐に寄る故にいふ。

老人と紙袋はいれにや起てらぬ。

老人は食を欲するものなり故にいふ。

斗筭の小人。

「論語」子貢問曰今之從政者何如。子曰。噫斗筭之人。何足算也。」
茅程の涙。

柄の實程涙を落とすと云ふ事。又た「和漢故事要言」に「涙を落す體を譬へて云詞也。莊子に云祖公あり日本にては猿遺と云者あり祖公猿に向つて云汝等に茅を養はんと思ふに付きて數を極むべし。朝には四つ、暮には三つあたへんといひければ、衆怨怒る。又いふ、然らば朝に三つ、暮に四つ與へんといひければ、衆怨よるこぶとあり。此言より出でたり」とあれど、こは眼前の利慾を欲するをいふなり。涙の形容にはならじ。

とちめんぼうをふる。

「珍香考」或問世俗もの、聞はしきことなとちめんぼうなふるると云ふ。是も出所ありや。是は西陽雜俎の卷の七の廿四丁目に趙生と云者吳郡之郁眠成息所にうろたへ來て戯れて曰、東市迷方、西市失途と、有り、是より出でたる世話にて、とちめんぼうと云は誤也。としめいはう也。椶櫚棒なりとも云ふ。又とりいそぎうろたへたるかたぢをいふ。椶の實を廻につくるに冷なればち。

取りてのびず、手廻甚だ念なるに喩ふとの説もあり。取たか見たか。

成るか敗るか、一番試にやつて見んと、決心する場合にいふ。取つたか見たか、江戸見たか、とつけてもいふ。とてもぬれたる袖。

一旦非に落つれば、遂に其非を遂げて墮落を顧みずとの義。毒を食はい皿までといふに同じ。

襦袢質に置いても初鯉魚。

如何なる工面なりとも初鯉魚を食はむとの義。東京にていふ諺。

どてら質に置いても、しやも食て寝らう。

如何なる工面してなりともしやも食はうとの義。

刀根川にせう。

酒を銚子限りに收めんとする事ないう。常陸の諺。銚子に刀根川の下流の海へ出る口なり、酒の銚子と通はせたるなり。

隣嚴うして寶儲くる。

如何なる怠惰心のある者も、其傍に能く勉強し働く人あれば、知らずく之に感化せられて、自然勤勉心を起

すといふ義なり。徳孤ならず、必ず其隣ありの意なり。

隣家に併搗く杵の音一ツ食いたい蓬餅。

他を羨むこと。

隣家の疝氣。

己の憂ふべき筋ならぬものを憂とする類をいふ。

隣家の疝氣を頭痛に病む。

前に出づ。

隣家の財を算ふる。

己が身の事知らざる喩。物の道理など多く聞くのみにて、之を身に行ひて我がものせざる時は、何のこひもなしといふ喩。(隣家の財を數へたりとて、自家の用に立たず、故に喩とす)。「華嚴經」卷六菩薩明難品法首

菩薩偈、譬如貧窮人日夜數他寶。自無半錢分、多聞亦如是。「實語教」雖智識不復。只知計隣財。」

隣家の花は赤い。

餘所の花赤い。(ヨの部)ともいふ。

隣家の飯は甘い。

他人のものはよく見えて、之れを羨望するをいふ。

隣家の糞味贈。

自家の馳走より隣家の糞味贈を欲しがるとの義。糞味贈は糞味贈の事。他人のものを羨望するをいふ。殿の御馬もかりや三日。[大和歌五色紙]「これ申し殿の御馬もかりや三日と申すたとへもあり。」一度借りたるものは暫時使用すとの義。

途方に暮る。方法を失ひて爲す所を知らざる體。鳶が鷹を生む。

凡庸の者の子に非凡の者の出来たる喻。「詩經」(毛傳)小惑傳「古語曰鷓鴣生鷓鴣。雀が鷹を産むに同じ。飛び立つやう。

至極うれしきことにいふ。鳶に油揚げを握はれたやう。

他に奪ひ取られて呆然たるをいふ。鳶の子鷹にならず。

凡庸なる父に非凡の子なしとの喻。鳶の巢立のやう。

拙なる笛聲の形容。

鳶鳴けば風吹く。

其前兆を認めて物事を察知するをいふ。「曲禮」前有「塵埃則載鳴鳶」(注曰鳶鳴則將風)。

鳶物を見れば舞はず。人の何事か經營奔走するは、利の爲にするといふ喻。(事の冲天に飛び舞ふは、何物をか見付け出したる爲に之を攫取せんとてなりとの義に取る。)

鳶も坐作から鷹に見ゆる。人の起居動作につきて、放埒ならず、端正なる者は、下賤の者と雖ども、上品に見ゆるとの義。

問屋の唯今。

問屋の明後日に同じ。就きて見るべし。

問屋は長者に似たり卵に似たり。

問屋は富饒に見えてつづれ易き故にいふ。

飛ぶ鳥も落つる。

威勢の強きをいふ。

問ふに落ちず語るに落つる。

人に問はるゝときには、注意して答ふる故、わが胸中の大事を吐かざれども、何心なく話する時に、ウツカリとして覺えず大事を言ひ出すとの義。

問ふにつらさのまざる。

悲しき事などの、己が心に殆ど忘れんとしつる折節、人より其事を問ひかけられて、又心を傷ましむとなり。又問はれて、其之に對ふる事のつらきをいふ。「古今」わすれてもあるべきものをななく、にとふにつらさをおもひ出ける「吹く風もとふにつらさのまざるかななくさめかゝる秋の山里」

問ふは一度の恥問はぬは末代の耻。

知らざることを知らずとして、之を問ふは耻かといふもの、是耻づべき事にあらざ、然るに知らずといふを耻ぢて、問はず、遂に一生無識にて終るは、是末代迄の耻辱なりとの義。「諺草」諺の意は凡人必先覺の人に順ひて、審に問ひ、明に辯ぜずんば、何ぞよく道を知らんや、然れども小人は一旦問ふ事を耻ぢて、一生の耻を抱くことなり。中庸。子曰舜其大知也與。舜好問而好察。論語に云子入大廟。每事問注尹氏云禮

者敬而已矣。雖知亦問謹之至也。かく大聖の舜孔子さへ問事を耻給はず、後生晚進なんぞ問事を耻べきや。「遠からん者は音にも聞け近からんものは目にも見よ。」

往時戰場に於て敵に對したる時名乗りし語なり。

遠き慮なき者は必ず近き愛あり。

將來の事を憂へざるものは眼前に災難來るとなり。論語に出でたる語なり。

遠き思案をして置かねば必ず近き難義あり。

前に同じ。

遠き親類より近き他人。

次の諺を見るべし。

遠き親類より近隣。

遠方に在る親類よりは、近所隣が却て火急の場合の助けとなる者なりとの義。「明心寶鑑」吾心慈、遠水難救、近火、遠親不如近鄰。」遠きに行くは遠きよりす。

遠きは花の香。高きに登るは卑きよりす(タの部)の條を見るべし。

遠方に在るものを心ゆかしく思ふ喻。花の香の遠く開ゆるものは、何の花とは知られども、早其花に心の移りてゆかしく思ふが如し。「耽林」人情賈、鶴、股、雞、雞近也。賈、原象。而賈、牛馬、牛馬近也。人亦然。寺隣人、不重、僧。而野人重之。僧之教、行於野人。不行於隣人。也。

遠くて近きは男女の道。男女間の互に相近接し易きをいふ。

遠くの火事脊中の灸。遠くの火事より脊の灸があつしとの義。

遠くの坊さん有難い。遠方に在るものを賈ぶ義。遠きは花の香の條を見るべし。

遠ざかる程思がつのる。情は相離るゝ程募ると云ふ義。

苦ふく。出さずしてしまつて置くとの義。商業を管みて金錢を

儲けたれば、最早之を資本に廻さず、損失の患を恐れて従前の方針を一變し、商業を收縮して、貯金策を取るが如き類をいふ。擴張主義をやめて、守成の方針を取ることをいふ。

泊り雀を捕れば宿に逃ふ。俗説。

富みては驕り貧しければ詔ふ。心情卑劣なる者にて于其の所謂貧而無諂富而無驕にまで至り及ばざる人ない。「論語」子貢曰貧而無諂而無驕。何如。子曰可也。未如貧而樂富好禮者一也。

富は一生の財、智は萬代の財。富は一生の財に止まれども、智は永遠不朽の財寶たりとの義。

富は屋を潤し徳は身を潤す。財富むときは家が立派になり徳高きときは身が立派になるといふ義。

富む家に瘦せ家なし。富貴なれば必ず其居宅を美にするものなり故にいふ。

杆栗を食ふと吃になる。俗説。

團栗の丈較。

同じく平凡なる者の相並びて、何れも優劣のなきをいふ。

飛んで火に入る夏の蟲。人の自ら求めて禍を取る喻。夏蟲の火に入りて焼け死するが如しとなり。愚人夏の蟲(クの部)の條参照。

吞舟の魚は細流に住まず。英雄は卑き位置に居ずとの義。列子に吞舟之魚は枝流に遊ばず鴻鵠は高く飛んで汚池に集らずとあり。

どんたく日。遊ぶによき日なりとの事。日曜日のことをいふ。

曇天でも霧脚揃へば雨降らず。俗説。

富むと雖ども貧を忘るな。富みたりとも貧時の状態を忘れず奢侈を慎めとの義。

蜻蛉の尻冷すやう。尻落付かざる喻。靜定する能はざるをいふ。

とん—とむ—とみ—とよ

富む者仁ならず仁をすれば富まず。

「孟子」公孫丑の章に出でたる語より出づ。「五雜俎」富者は多く慳く、慳くせざれば富まず又富める者は多く愚なり、愚にあらざれば財を爲さず。

貪慾は底なき袴に盛れ。慾の限りなきをいふ。

燈光消えんとしては光を増す。人の病氣にかゝりて死せんとする前に、一時快方になり家の破滅する前に、一寸繁榮せるが如き類を、燈火の將に滅せんとするに臨みて、一時ばつと其光を増すことあるに喩ふ。「法滅盡經」吾法滅時。譬如油燈臨欲滅時。光明更盛於是便滅。吾法滅時。亦如燈滅。

「列子」仲尼篇「燈將滅者必大明」梁の記少瑜が詩に「殘燈猶未滅。將盡更揚光。」

土用中の章魚は親にても食はずな。土用中の章魚は頗美味なりとの義。

土用半に秋の風。土用の半頃に至れば、秋の季節に屆して、はや秋風が吹くとなり。

三五三

土用布子に寒帷子。

貧しき者晏に及びてまだ布子を脱する能はず、却て寒に及びて帷子を着するをいふ。又物の顛倒せるをいふ。土用の筈。

出たばかりで其かひなしとの義。(土用に生ずる筈は、腐敗して竹とならず故に出たばかりといふ謎とす。)土用見舞の道明寺の袋のやう。

虎嘯けば風。

「易」文言「風從虎」淮南子「虎嘯而谷風至。龍舉而景雲屬」

勢の強き上に一層強きを増す喩。「韓非子」難勢篇「周書曰毋爲虎傳翼將飛入邑擇人而食之。夫乘不肖人於勢。是爲虎傳翼也。」捕らぬ狸の皮算用。

將來の事を前より豫算するを云ふ、早計の意あり。虎の穴に這入らねば虎の子は得られぬ。

こいつに入らざれば虎子を得ず。(コノ部)に出づ。虎の子のやう。

秘藏物をいふ。子を大切にするをいふ。虎の威を借る狐。

狐が虎の威を借る(キの部)の條に出づ。虎の尾を踏むが如し。

戰慄恐懼する喩。「書經」心之憂危。若蹈虎尾。「月清集」「ものいふのさげはく太刀のまりさやのとらの尾ふみておそろしの世や」

虎は死して皮を留め人は死して名を残す。

虎は死しても、其皮は數物となりて、永く世に珍重せらるるものなり、人も亦死後に名譽を留むとなり。「五代史」死節傳「王彥章武人。不知書。常爲俚語。謂人曰豹死留皮。人死留名。其於忠義蓋天性也。」

虎は千里の藪に棲む。

虎は勢猛くして千里の長きを往復するとなり。寅年寅の日を思むは、長引くと云ふを思むなり。虎臥す野原。

怖しく危き地をいふ。虎も我子を食はぬ。

猛獸虎の如きも猶其子を愛すとの義。虎を野に放つやう。

後書を遺す喩。「漢書」張良謂漢王曰。今釋楚不擊。是養虎自遺患也。」虎を放つて山に返す。

「華陽國志」先主入蜀至巴郡。嚴農拊心歎曰。此所謂獨坐於窮山。放虎自衛也。」虎を防いで狼に逢ふ。

前門虎を拒いて後門狼を進む(セの部)を見るべし。虎を養ひて患をのこす。

飼犬に手を喰はる(カの部)の條及び虎を野に放つやうの條を参照すべし。虎を畫きて狗に類す。

學び損ひのこと。巧を弄して却て拙なる喩。「後漢書」馬援傳「馬援戒兄子嚴敬曰。龍伯高敦厚周慎。吾願汝曹效之。杜季良豪俠好義。吾不願汝曹效之。效伯

高不得。猶爲謹勅之士。所謂刻鵠不成。猶鷲者也。效季良不得。陷爲天下輕薄子。所謂畫虎不成。反類狗者也。」

虎を畫いて猫に類す。

鳥かげがさすと客が来る。

鳥かげが障子に映ると客が来る。

俗説。鳥鳴いて夜深し。

思ひ立ちし事の成否善惡未だ知れがたきをいふ。「伊勢物語」昔男あひ雛き女にあひて、物語なんどする程に、鳥の鳴きければ、争てかは鳥のなくらん、人知れず思ふ心はまだ夜深きに。」

鳥なき里の蝙蝠。福小の地に在りては、さほどにあらぬ人も、第一流に居る喩なり。「夫木集」動物部和泉式部の歌に「人もなく鳥もなからん鳥にてはこの蝙蝠も君を尋ねん」和漢三才圖會「原禽類」伏翼之爲鳥也最卑賤者。故俚語云。

無鳥之郷。蝙蝠爲鳥王。

鳥なき里では蝙蝠が鷹をする。

酉の市の賣れ残りのやう。

女の容貌の醜き形容。東京にては往時より酉の市とて十二月酉の日に三平二端を賣るなり故にいふ。

酉の市の三度ある年は吉原が火災る。

鳥の一穴。

鳥は肛門も陰門も同一なりとの義。

鳥は一日に三難の苦あり。

鳥類は一日の中に三回の困難苦痛ありといふ。

鳥の兩翼車の兩輪。

二者相待つて功を爲すに喩。(各其一を缺くべからざる義)

鳥は枝の深さに集る。

繁盛なる所に人の出入盛なる喩。「淮南子」「水積而魚

聚。木茂而鳥集。鳥雀枝の深さに聚る(テの部)の條參照すべし。

鳥は古巢に歸る。

誰しも故郷のなつかしきをいふ。

鳥低き枝に巢うは大風の年。

鳥獸は天然に氣象を知る、故に大風と見れば、高き所に巢はず、風害を恐るればなり。

鳥を食ふともどり食ふな。

どりと鳥の肺臓なり、至て腐敗し易きものなり。故に食ふなかれといふ。物事を營む所ありても、害に

取る手方角なし。

泥田に足入れる。

泥の中の蓮。

泥中の蓮(テの部)の條に出づ。

盜賊捕へて細。

平素の準備を怠りて急用あるに際し、俄に之に備へ

盗賊に負錢。

物を損しての上に、又損を爲す喩。「珍事考」「或間俗諺に物を損しての上に、又物を遺すを、盗人に負錢といふこと出所ありや。答曰、文選の卷十三の廿七葉目に、秦の李斯始皇帝へ奏問する書に、藉寇兵而濟盜

盜賊にげて後の向ふ鉢巻。

盜賊の提灯持ち。

盜賊の味方となつて彼是便宜を與ふること。

泥を打てば面へはぬる。

時機已に過ぎ去りて、役に立たぬ喩。菊は九月九日節句の祝のものなれば、十日となれば最早其用を爲さぬ

十で神童十五で才子廿過ぎては凡庸の人。

幼時俊秀にして、頭角をあらはしたる者が、漸次に退歩し遂に壯年に至れば尋常の人たるに過ぎずといふ義。

な

無いが異見の總仕舞。

放蕩者に異見したりとて、なかくに聞くものにあらず、唯其財盡き、金無きに至れば、自然に息む、再び異見するを須めず、故に總仕舞(終の果)といふ。

無いことまでも世には言ふ。

事實無根のことをも、世人は風説し合ふとの義。

無い袖は振られぬ。

己の力足らざること、身になんかとは、出来ぬものなりとの義。ある袖は振るが、無い袖は振られぬ。(マの部)の條參照。

泣いても笑つても。

泣いて暮すも一生、笑つて暮すも一生。

生涯を不愉快に暮すも、愉快に暮すも、同じく一生の間ぞとの義。

無い時に辛抱有る時に節儉。

無き時は辛抱して用わず、有る時は節儉の爲用びずとの義。

無い名は呼ばれず。

名が付いて無ければ、何とも稱へやうなしとの義。

無い—言うて有るものは氣、ある—言

うて無い者は金と化物。

解に及ばず。

無い物喰はうが人の病。

無き物を欲するが人の常癖との義。「閑窓瑣談」俗諺

にないもの喰はうが人の癖といふことあり。實に人情

は得がたきを尊み、常に有つて大益有るものを輕んじ

賤めて信ぜず。

永い浮世に短い命。

世は永劫なれども、人生に限ありて、常住すべからず

との義。「文選古詩」「生年不滿百。常隨千歲盛。」

長生すれば新らしいことを聞く。

長壽なれば、新らしい事を見聞すること多し、故にい

長生すれば辱多し。

いのち長ければ辱多し(イ)の部に出づ参照すべし。

永い月日に短い命。

永い浮世に短い命に同じ。

長芋で足をつく。

小事にて事を誤ることをいふ。即ち敵にもならぬもの

とて輕侮する所のものに、不覺を取るとの義。「韓非

子」「先聖有諺曰。不履於山。履於壑。」

長い者には巻かれる。

勢力の弱きものが、勢力の強大なるものに、左右せら

るをいふ「孟子」「小固不可敵大。」

媒口。

「諺草」俗に言の相違多きを媒口といふ。宋袁采が世範

云、古人謂周人惡媒。以其言誼反覆。給女家。則曰男

富。給男家。則曰女美。近世尤甚。廢庵口の條参照。

媒虚言。

前の諺を見るべし。

媒は宵のもの。

婚姻の媒をなすを、月下の老といふ、唐の章固婚を求め

て宋に次す、老人月に向つて香を檢するを見て、何の香

ぞと問へば、天下の婚厭なりと答へしに出づ。

長追無益。

戦場にて、敵を長く窮追するは、益無しとて之を戒め

たるなり。其れより轉じて事の長く追及することの不

利をいふことにも用ふ。

長くなり短くなりして居る。

寝れたり坐したりして、退屈して居ることをいふ。

啼かざる猫は爪を藏す。

次の諺を見よ。

啼かざる猫は鼠を取る。

能ある者の自ら其能を語らずして、謙抑する喻。(鼠

を捕らざる猫はよく啼けども鼠を捕る猫は啼かざるな

り)鼠取る猫爪を藏す。鼠取る猫ニヤンとも言はぬ(ネ

の部)を参照すべし。

霖雨つらく時夕方明しとの義。

長し短し。

過不及ありて、何れの用にも立たずとの義。おもふまゝ

にならぬことをいふ。「跡道」大小や長し短し月の劍。」

仲直りの出来た敵に油断するな。

講和したる後も、其敵に心を許すべからずとの戒。

なかまびいき。

其同僚たり伴侶たるものを眞實にするをいふ。「虛室

錄」「林云三人證、成證。意旨如何。師云奴見婢

中の好い他人より久離切つた親子。

他人如何に親睦すとも、親子の自然の情愛に及ばずと

の義。久離とは永く親子の縁を絶つをいふ。

長持杖にならず。

大なるものを小なるもの、代用となすべからざる喻。

流るゝ水腐らず。

流水腐らず(リ)の部)に出づ。就きて見るべし。

流れ河で尻を洗つたやう。

さつぱりとしたる氣持をいふ。

流れ河を棒で打つ。

到底何の役にも立たず(徒勞に屬す)との喩。
流れを汲みて源を知る。

其末を見て、其本を推知せらるゝ義。「荀子」「君子養源。源清則流清。」「天台摩訶止觀」「捨流尋源。聞香討根。」

長居する鷲墓目にあふ。

客となつて長居するを戒めたる俚諺なり。餘り長居すれば、厭なこゝに出逢ふものぞといふほどの意。鷲が長く一所に居れば墓目にあふが故に早く飛び立つて去るがよしとの意を含めていふなり。

墓目とは鉄の一種木製にして、鏑矢の鏑に似て、長く凡そ四寸許り圓み、五寸五孔或は六孔あり。(其孔鏑の目に似たりと云ふ)射る物に傷つけぬ爲の用とし、又空氣孔に觸れて高く響けば、能く妖覓を伏すといふ。「水鳥紀」「酒の樽の數に懸蕪して心もそるるに浮き立ち時刻の移るもわきまへず——とは是、うや」

長居する鷲は人に獲られて汁に煮らるゝとの義。趣意は

長居する鷲は人に獲られて汁に煮らるゝとの義。趣意は

前の諺に同じ。
長居は恐有り。

客の長坐するは、其主人に厭嫌を催さしむる恐有りと
の義。又功績を立てたる後に、長く其職に居るは職に
違ふ恐有りととの義。「史記」越世家「范蠡以爲大名之下。
難以久居。」「禮記」「侍坐於君子。君子欠伸。搢杖
履。視日蚤莫。侍坐者請出矣。」

泣き出しさうな天氣。

雨將に降らんとする天候をいふ。

泣き面に蜂。

一の不幸苦痛ある上に、又一の痛楚を重ねる喩。

泣き寝入り。

特に發起せんとしたることを、其儘に中止するに至る
をいふ。(兒童の訴ふる所ありて、泣き出しつゝ、終に
寝入ることあり、これより出てたる語なり。)

泣き別れ。

別る、つらさを忍びて別ること。

泣く口へ食はるゝが、笑ふ口へ食はれぬ。

忍耐するものは生活の途あれど、浮きたる心の者はこ
れを得難しとの意が、泣きつゝは物を食ふ事を得れど
笑ひつゝは食ふ能はざるなり。

泣く子と地頭には勝てぬ。

往時地頭領主の壓制にして我儘なりしこと、嬰兒の
泣き號ぶこと、何れも如何ともする能はず、其のい
ふがまゝに之れに従はずに居られず、故に此諺あり。

泣く子は育つ。

赤子よくなげば生育の見込ありとの義。

鳴く蟬よりも鳴かぬ螢の身を焦す。

口にするものよりも、口にせざるものが、却て心中の思
切なりとの義。言はぬは言ふにまさる。(イの部)に同じ。

泣く子もあれば笑ふ子もあり。

不幸の者あり幸福の者ありとの喩。

泣く兒も目を見て泣く。

辨への無き者も、場合を見て氣を利かすることあるを
いふ。幼兒の啼くにも猶側の人の様子を見てなくなり。

啼く鹿も夢のあはせのまゝに。

無くて七癖有つて四十八癖。

心は之と相似たり。

「帝國文學」「日本紀十一(仁德紀)に「昔有二一人、
時二鹿臥傍、將及雞鳴、牡鹿謂牝鹿曰昔今夜「夢
之、白霜多降之、覆吾身、是何祥焉、牝鹿答曰、汝之
出行、必爲人見射而死、即以白鹽塗其身、如霜素
之應也、時宿人心裏異之、未及味爽、有獵人、以射
牝鹿而殺、是以時人諺曰、鳴牝鹿矣、隨相夢也。」
攝津風土記に記せる趣は、更に小説的にして面白し。
「雄伴郡有夢野、父老相傳云、昔者刀我野有牡鹿、其
嫡牝鹿居此野、其妾牝鹿居淡路國野島、彼牡鹿屢往
野島、與妾相愛無比、既而牡鹿來宿嫡所、明且牡鹿
語其嫡云、今夜夢、吾背有鹽(於那利止)見又
(日都須久紀)草生(多利止)見支、此夢何祥、其嫡惡
夫復向妾可往、乃詐相之曰、背上生草者、矢射背
上之祥、又響響者、白鹽塗之祥、汝渡淡路野島
者、必遇船人、射死海中、謹勿復往、其牡鹿不勝感
戀、復渡野島、海中遇逢行船、終爲射死、故名此野
曰夢野、俗說云、刀我野立眞牡鹿、夢相乃麻々爾、
夢と驚とはあはせがら」といふ諺徳川時代にありて、
心は之と相似たり。」

人には多く癖のある者なりとの義。無くて七癖有つて八癖ともいふ。
泣々もよい方を取る片身分。

血族の最も親しきもの、死したるときは、非常に悲しく泣くものなれども、かゝる際にも主我的利慾の念は離るゝこと能はずして、争うてよきものを取らんとするが、一般の人情なりといふ川柳の句がやがて俚語となりしものなり。片身分とは死者の身に着けし衣裳など、其他所持品を、片身の爲とて血族の者互に分配するをいふ。

なげ櫛を取れば骨肉の人も皆他人に變ず。

夜櫛(ヨの部)の條に出づ。

投げた枕にとがは無い。

罪は其發動者に在りて、利用せられたるものに罪なしとの義。枕を投ぐるに方り投げし者に責任ありて枕は其責に任ぜずとなり。

なげとを見ることも落度を見るな。

悪事は其起りを知るも結果まで詮索するなと云ふ意か。

なげやり三寶。

物事を忽爾にし勤むべきを勤めずして放逸なるをいふ。或説に「三寶とは、儒家には土地人民政事の三をいふ。孟子に諸侯之寶三、土地人民政事、とあり。又道家にては老子我有三寶、曰慈、曰儉、曰下先たらずの三なり兵家の三寶あり六韜に云大農大工大商是なり佛家に佛法僧の三法あり。佛法僧の三寶は、能く恭敬供養すれば、現當二世の利益を得、此故二世間無上の福田なり、故に三寶といふ。若し此三寶を投げやりにすれば、現當二世の依身を失ふ。故に佛法僧の三寶をなげやりにするを世間第一の悪しき事と知らしむるなり。」

又一説に曰く衣食住も人間の三寶なり、衣食住にかけぬやうに勤むべきが、人の日夜の業なり。之を勤めず、なげやりにするこそ、なげやり三寶といはれ、と。

情知、らず。

同情心の無きをいふ。

情に向ふ及なし。

人情の大なる力あるをいふ。情の力に勝つものなしとの義。

情の目遣。

情の目遣。

情の目遣。

情の目遣。

情の目遣。

情の目遣。

情の目遣。

情の目遣。

情の目遣。

情の目遣。

情の目遣。

俗にいう目といふ、秋波を送る事。

情は質に置かれず。

「和漢故事要言」情ある辭、情ある行蹟の人には、萬民の慕ひ來りて懐くこと、風吹いて草木の上を過ぐるが如く、吾徳を以て靡かせんとするに非らざれども、皆此情に懐きて、昵び従ふことをなす也。此徳は(中略)千歳の後といへども敢て涙すべからざるの徳たる故に、他常に其徳ある人と思ふ事、幼き人の母を思ふよりも甚しく、何時までも世に有らん事を願ふといへども、死生は天の命なれば、其人終に死し、其徳従ひて涙ぶ。たとひ千金を積みて、其徳を贖ひ留めんとすとも叶ふべからず。此心を以ていひ出したる詞也。」

情は人の爲ならず。

人に同情心を起して之を救ふは、人の爲にするにあらず、畢竟己の爲になるものなりとの義。「詩歌藝上」に「思ひ知らずや世の中の情は人の爲ならず、我れ人につられれば、必ず身にも報ふなり。」時頼の歌に「情をば人にかくると思ふなよのちは必ず身にむくふなり。」「韓子」「愛人利人者。天必福之。惡人賤人者。天必禍之。」

なきけ—なし

禍之。

情者は油断するな。

己に同情を表して好意を寄する人は、或は恩を賣りて後に利せんとするものなるやも測りがたければ油断すなといふほどの義。

済しても八百。

借金の償ひても猶盡きざることをいふ。

梨尻柿頭

梨は尻、柿は頭が甘しとなり。梨の尻に柿の頭といふ。

梨の皮は乞食に剥かせ、瓜の皮は大名に剥かせる。

梨の皮は薄く剥くべし、瓜の皮は厚く剥くべしとの義。

梨の礫

音沙汰なしといふ義。

梨の水が付いた刃物で手を切ると治らぬ。

俗説。

梨も礫もなし。

梨の礫に同じ。
濟す時の閻魔顔。

金を返濟する時に不機嫌なるをいふ。即ち苦々した顔付きになるといふこと。
那須の興一は矢さまで殺す、おふく目もとて人殺す。

那須の興一は弓術の達人にて其矢まきにかかりては鳥獸射殺せられざるはなきが如く、おふくの目もとの愛嬌の爲に男子憎殺せられざるなしとの義。

茄子と男と黒いのが善い。

男子は筋骨の逞ましきがよしとなり。色の黒きはどの

ものは筋骨逞し。又茄子は色の黒きは味よし。

茄子の食ひかけを食ふと仲が悪くなる。

俗説。

茄子のへたの心を食ふと長命をする。

へたの心は食へば食はるゝものなり物をあたにすてま

せぬなしへなるべし。

茄子齒。

齒性の黒色を帯ぶるをいふ。
名高の骨高。

聞きしほどなきもの(評判ほどに何値なし。)名物にいいものなし(メの部)ともいふ。名高といふより、骨高と押韻したるなり、骨高とはよろしからぬをいふ。
菜種の十七大根種の老女。

菘種早く獲取りてよし、大根種は晩く收むるがよしとの義。

夏胡瓜を川に流すと河童に引かれぬ。

小供の名をかきて流すなり、御祓の古俗の變ならん。

納所から和尚。

物事順序を經過せざるべからざることをいふ。寺院にては納所(寺務を掌る僧)より和尚に昇進するなり。

夏の雨は馬の脊を分くる。

夕立は馬の脊を分くる(ハエの部)の條に出づ。

夏の北雲行くは蜜蜂に善く稻に悪し。

農家の能くいふ所なり。

夏の傷は膿む。

解に及ばず。

夏の火は娘にたかせよ。冬の火はよめにたかせよ。

晋が娘に殿にして、嫁にやさしくすべしとの義。

夏の蟲氷を知らず。

見識狭く智恵足らざるをいふ。(夏蟲は夏の暑さのみを知つて冬の氷雪を知らず故に喩とす。経験せざる所なれば之を知らずとの義。莊子「外篇秋水篇」井蛙不可語于海。拘于虛也。夏蟲不可語于氷者。篤于時也。

夏は熱いものが腹の薬。

夏時飲食物に煮沸したるものを用ひしめん爲にいひ習はせるなり。

夏は陽をゆけ冬は陰をゆけ。

人の欲する所を避け避るべしとの義。夏に涼を趁うて日陰を取り冬は暖を趁うて日光の指す所を慕ふは人の常情なり。

夏孕は犬より劣る。

なつ—なな

犬は暑氣に堪ふる能はずして喘ぎノ舌を出し、頗る苦惱の體なり。婦人の夏孕みたる者は犬よりも猶甚しとなり。

夏羽織。
人の無能なるを譏りていふ諺。夏羽織は薄きが故に着て居るのやら、着て居ないのやら分らぬ。其人の来て居るのやら、来て居ないのやら分らぬといふに通はせたるなり。

夏南風吹くは晴るゝまゐるし。

解に及ばず。

七足隔つ師弟の禮。
弟子七尺去つて師の影を踏まずに同じ。

七度尋ねて人を疑へ。
まちど尋ねて人を疑への條に出づ。「諺草」この諺の意は、物をうしなひたる時は、靜に之を尋ね求めて、漫に人を疑ふなかれとなり。列子曰人有亡鐵者。意其隣之子。視其行步竊鐵也。顏色竊鐵也。言語竊鐵也。作動態度。無爲而不竊鐵也。俄而拍其谷。而得其二鐵。他日復見其隣人之子。動作態度無似竊鐵者。

三六五

れ人を疑ふ時はする程の事皆盜せしやうに見ゆ、諺に
疑心生暗鬼とは此事なるべしと列子の注にあり。
申刻下り。

古びたる衣服のこと。日中は人に蓋かしとして著るべからず、申刻下り(夕方)に初めて著るべしとの義にとる。
申刻下の雨と四十過ぎての放蕩は容易にや
まぬ。

夕方より降り出す雨は長くつゞきて直にはやまず、中年過ぎたるもの、放蕩も亦容易にやまずとなり。

七歳七里に悪まる

兒童七歳の頃は、悪戯最も盛にして、誰にでもにくまるとの義。

七重の膝を八重に折る。

慇懃に過ぎたる禮(低頭平身の體)をいふ。「晋吟我集」まじらへば、七重の膝を八重に折り、袴のひだの六つかしの世や、「犬子集」わびてなれ、七重の膝を八重樹、何喰はぬ顔。
知つて知らぬ振するをいふ。物を食ひながら何も喰は

わやうな顔をするといふこと。
何事も酒でなければ始まらぬ。

「漢書」食貨志「酒者天之美祿、帝王所以順養天下、享祀所屬、扶養養疾、百禮之會、非酒不行、」
難波の蘆は伊勢の濱萩。

同じ物なれども、其所の變るに従ひ、其名稱を異にする義。「菟玖波集」物の名も所によりてかはりけり難波の蘆は伊勢の濱萩
七日關白。

藤原道兼のことをいふ。それより轉じて物事の長く横かざるをいふ諺となれり。道兼華山帝を嫌し奉りし後、半年ならぬに、權中納言に進み、又右大臣まで累進したるが、吾は父の爲に功あり、父の後には吾こそ關白たためと思ひしに、兼家職を道隆に譲るに及び、大に失望し、父を怨み、其裏にも籠らずして遊び興じければ人之を勝る、されど位階最も高ければ、道隆の薨後に關白に任ぜらる、在職僅に七日なりければ世に七日關白といへり。
七日子腹を病むでなりとも男の子を生め。

男子を生むを費びていふなり。

七日の説法無にす。

數日説法したるものを、一朝にして無効に歸する義。
名の下空しからず。

名高き者は、必ずそれだけの器量ありとの義。「國史纂要」關立本見「張僧繇畫」曰。名下定無「虛士」。

細にも葛にもかゝらず。

如何とも仕方のなきこといふ。是は老人などの歩行思ふまゝならざるをば、家内に繩をはりそれに取りつかせて歩行せしめたる古風によりていひしものにて、腰の立たざるに至りては、繩を張るも杖を與ふるも無益なりといふ義に據りし者なりといふ。此古の風の事日本紀に見ゆ「清寧天皇詔曰、老嫗、伶俚、羸弱、行歩に便ならざる者は、宜しく繩を張つて引紐扶て出入せしむべし」

細暖簾にもたれぬやう。

居酒屋に入りて居酒を飲むなどの意。繩暖簾とは繩を吊したる暖簾のことに、之に凭たるゝときは後に倒るべし、居酒屋は繩暖簾を吊しある者なればかくいふなり。

細張置くも盜の爲。

事を爲すは其目的とする所ある爲なりとの義。

鍋釜賣つてもよい嫁を取れ。

如何に苦心してなりとも眞妻を擇んで娶るべしとの義。

鍋尻やく。

「夜合」家の内の後見などたのめるを鍋尻やくといふ。世話やき、肝煎などの煎、焼より出でしか」

百草霜に火點すれば雨晴る。

丁字頭立てば良き事あり(丁の部の條を見るべし)。
百草霜の焼くる翌日は風が吹く。

鍋にとちふた。

よく適合せるをいふ。われ鍋にとちふたの略。

鍋の釣手越に飯を盛るな。

俗説。

鍋の眞中より汁の煮立つときは翌日晴天と